PNC TN1440 91－003

公開資料

北京事務所よもやま話

（『動燃北京事務所だより』別冊）

動力炉核燃料開発事業団
3.6.14
技術管理室

1991年3月

動力炉・核燃料開発事業団

複製又はこの資料の入手については，下記にお問い合せ下さい。

〒107　東京都港区赤坂１－９－13

動力炉・核燃料開発事業団

技術協力部　技術管理室

Inquiries about copyright and reproduction should be addressed to : Technical Evaluation and Patent Office Power Reactor and Nuclear Fuel Development Corporation 9-13, 1-chome, Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107, Japan

動力炉・核燃料開発事業団（ Power Reactor and Nuclear Fuel Development Corporation ）1991

「北京事務所よもやま話（『動燃北京事務所だより』別冊）」訂正のお願い

先日お送りいたしました標記資料にミスプリがございましたので，誠に恐縮ですが，御訂正をお願い申し上げます。

1991年6月24日　動力炉・核燃料開発事業団
国際部　資源開発室

P.18	上6行	会う	→	遭う
P.22	上6行	部』の原則	→	部』と原則
P.31	下2行	ビジネ6	→	ビジネス
P.78	下5行	検査が	→	検査を
	下3行	12%不合格	→	12%は不合格
P.79	下3行	会いながら	→	遭いながら
P.83	下12行	効率の着目	→	効率に着目
P.94	上2行	だから	→	短期間，中国に旅行に来る人は，帰国後病気になっても結構だが，駐在員が病気になれば面倒だから
P.99	下12行	変わり	→	代わり
P.141	下11行	二台目	→	二代目

公　開

PNC TN1440 91-003

1991年３月

北京事務所よもやま話

（『動燃北京事務所だより』別冊）

国際部　資源開発室

要　　旨

動燃北京事務所は1986年８月に開設されて以来，所長と所員と，通訳（女性）を加えた３名でもって，

- ウラン鉱資源の共同調査，共同探査等への支援業務
- 原子力交流制度への支援業務
- 原子力関係の情報収集
- 科学技術庁関係者等の訪中に対する便宜供与

を主たる任務として活動している。これらの活動結果については『動燃北京事務所だより』として事業団内に報告されている。

この「北京事務所よもやま話」は『動燃事務所だより』の一部として，北京（中国）での暮らしのあれこれを，1986年10月から1988年９月まで北京に滞在した渡辺格所員が送信してきたものを１冊に綴ったものである。

尚，姉妹編の「別冊Ⅱ，北京イメージ通信」も参照されることをお勧めする。

もくじ

1. 引っ越しとコンセント …… 1
2. 西と東のサンドイッチ …… 5
3. 北京で切符を買う方法 …… 9
4. 手紙で鼻をかむ話 …… 12
5. 上海での列車事故について …… 15
季節のたより ① …… 18
6. 中国はプロレスの見方です …… 19
季節のたより ② …… 21
7. らっきょう，しゃぶしゃぶ，みそラーメン …… 23
季節のたより ③ …… 26
8. ダイヤルを回すと中国が聞こえる …… 28
季節のたより ④ …… 31
9. 街角の親切 …… 33
季節のたより ⑤ …… 36
10. 日中の歴史について振り返る …… 38
季節のたより ⑥ …… 41
11. 北京の子供たち …… 42
季節のたより ⑦ …… 45
12. オフィスでシャワーを …… 47
季節のたより ⑧ …… 50
13. ヒーローのいない時代 …… 51
季節のたより ⑨ …… 54
14. 御旅行，御苦労様です …… 55
季節のたより ⑩ …… 59
15. 犬猫診療所 …… 61
季節のたより ⑪ …… 64

16. 7月7日の話 …… 65
季節のたより ⑫ …… 68
17. 地下鉄に乗って …… 70
季節のたより ⑬ …… 73
18. 2,000回に1回のミス …… 76
季節のたより ⑭ …… 79
19. ディオックス（DIOK's） …… 81
季節のたより ⑮ …… 84
20. 野菜の話 …… 86
季節のたより ⑯ …… 89
21. 旅行中に病気をしない方法 …… 92
季節のたより ⑰ …… 95
22. 北京という街 …… 97
季節のたより ⑱ …… 99
23. あべこべの世界 …… 102
季節のたより ⑲ …… 105
24. 5年前，2年前，そして今 …… 108
季節のたより ⑳ …… 111
25. 北京で考えたこと …… 113
季節のたより ㉑ …… 116
26. 夏の農村で〔「動燃」1988年8月号から転載〕 …… 119

（付録1）中国一般情勢に関する1988年年頭所感 …… 122

（付録2）動燃北京事務所について …… 141

引っ越しとコンセント

北京事務所は，竹園賓館の内装改修工事に伴い１月下旬から約１か月間，いつもの 401号室を出て 201号室に仮住まいしていた。同じホテル内での引っ越しではあったが，書類の整理や荷作り等でかなりの労力が裂かれてしまった。今週初めに改装なった 401号室に戻ってきた。この竹園賓館は清の時代の郵政大臣の屋敷を改造したもので，建物は古風であり，かつて訪れた人が「龍宮城みたいだ」と称したほどである。今回の改修で，この国宝級の 401号室にもアルミ・サッシが入った。服務員（ホテルの従業員）が電気掃除機をガーガー鳴らして掃除でもしていない限り，小鳥のさえずりも聞こえる静かな事務所である。

引っ越しは面倒なものだが，書類の整理ができる，という点では都合がよい。今回も古い不用なものをかなり処分した。本来，内装工事によって住み心地が良くなるのだから引っ越しもまた楽し，となるはずであった。しかし，中国にいると引っ越しがなんとなく億劫になる。というのは，新しい所に入ると必ずトラブルが生じるからである。どの部屋も一応人間が過ごせるだけの設備が整ってはいるが，実際に入ってみると，風呂の下水の流れが悪い，水洗トイレから水が漏る，窓の鍵が閉まらない，部屋の電灯のタマがきれている等々必ず何か問題がある。長く滞在する場合は，気がついたものをホテル側に申し出て直して貰ったり，自分で何とか処置したりして徐々に問題を解決し住み易くしていく。それが新しい部屋に移るとなると最初からのやり直しとなる。だから引っ越しは気が重いのだ。

今回の事務所の引っ越しでは，電灯線のコンセントの違いに閉口した。日本ではコンセントは１種類しかないが，中国では，私の知る限り５種類ある。即ち，①日本と同じ２つの平たい突起が付いているもの　②丸い突起が２つ付いているもの　③平たい突起が３つ付いているもの（１つはアース）　④丸い突起が３つ付いているもの（小）　⑤丸い突起が３つ付いているもの（大）である。 401号室の壁のコンセントは③の「平らな３つまた」である。事務所で持っている電気製品は，蛍光燈スタンドやワープロ用変圧器は②の「丸い２また」，ラジオは①の「平たい２また」，部屋備え付けの冷蔵庫は④の「丸い３また」である。これらは，事務所が設置された時に稲積前所長の手によって各種のテーブル・タップや変換器具を使ってうまく繋がるように配線された。それを 201号室に移すとなると，もう一度コンセントの接続をやり直さなければならない。しかも， 201号室の壁のコンセントは 401号室とは異なっていて，②の「丸い２また」，④の

「丸い3つまた（小）」，⑤の「丸い3つまた（大）」の3種類である。市販のテーブル・タップの先を切って，別に買ってきた差し込みの部分だけを付け替えるのである。大した手間ではないが，付け替えてコンセントに差し込もうとすると「入らない！」ということが時々あり，こういう時は引っ越しの疲れがどっと出る。同じ「丸い2また」でも2つの突起の1ミリ程度違っていて差し込めないのである。力任せに押し込めば入らないことはないが，何回もこんなことをやっていたらすぐこわれてしまうだろう。しょうがないので，うまく合うべつのテーブル・タップを仲介させて繋げることになる。結局足元に無駄な長いコードがとぐろを巻く結果となる。1か月後，401号室に戻った時には，もう一度これを繰り返して全ての差し込みを「平らの3つまた」に戻さねばならなかった。いろいろなコンセントの型があるのは，中国に限らず世界各国にあるようである。各国を旅行する人は大なり小なりこうした困難に直面するという話はよく聞く。「同じホテルなのにどうしてこんなにコンセントの型が違うのだ！」と怒り狂うのは，世界の現状を知らない常識のない人間なのだろう。コンセントの規格について，中国ではこれを統一しようという政策はあまり採られていないようだ。当分，引っ越しの度に「コンセント問題」でイライラし頭を掻きむしらなければならない状況が続きそうである。

それにしても，同じ型のコンセントならばいつでもピッタリ合うようにして欲しい，という思いは切実である。中国人に言わせれば「コンセントは電気が通ればよいのであってピッタリと合わせる必要もないだろう。少々きつくても金槌で叩けば入るはずだ」ということになるのだろう。我々島国生まれの者には，なかなかこういう大陸的な大らかな気持ちにはなれない。

一般に中国製の製品の値段はかなり安いが，買ってきたものが必要な性能を持っているかどうかについては，常に大らかな気持ちで見てやらねばならない。ピッタリ合うと思って買ってきたコンセントが実際やってみたら差し込めないからといっていちいち怒っていたのでは体が持たないのである。例えば，20ワットの電気スタンドの蛍光燈が切れたので買いに行くとすると常に以下のような事情を考えなければならない。即ち，買った製品の1割は蛍光管の取り付け金具の長さが1ミリ程長いので電気スタンドにピッタリはまらない。電気スタンドに入ったもののうち1割は線が切れていて点灯しない。点灯したもののうち1割は管の密封度が悪くて封入ガスの真空度が足りないため明るさが不安定である。明るさが一定しているもののうち1割は1日経つとチラチラし始める。つまり，結局役に立つのは全体の6割程度ということになる。従って，買い物をする時はできる限りその場でチェックしてみる必要がある。持ち帰ってから不良品であることがわかっても，レシートを持って行って説明すれば無料で交換してくれるが，新しく交換してもらっ

たものが不良品である確率もあるわけで，何回も店に行くのが嫌な場合は，買ったその場でチェックするか，不良品が出ることを見越して必要な個数の２～３倍買っていくしかない。我々外国人の場合は，言葉もよくできないし店員の不機嫌な顔を見るのもイヤなので，それほど高くないものの場合は大抵必要量より多く余分に買う。従って，「中国の製品は安い」といっても結局は日本で買うのと値段的には変わらなくなることが多い。

中国製の冷蔵庫に「万宝」というのがある。日本の技術を導入した工場で生産しており，よく冷えるし故障も少なくて評判がよく，東南アジアやアフリカ等に結構輸出されているようである。この「万宝」冷蔵庫について，人民日報に「万宝冷蔵庫，好評を博す。製品合格率93％を達成。」という称賛記事が出たことがある。つまり，好評を博している「万宝」でさえ７％は不合格ということであり，他の製品についてはもっと不合格率が高い，ということなのである。社会主義経済では「鉄鋼○○㌧。テレビ××台」というように「作った数量」が最も重要な指標なのである。不合格品を除いて少数を出荷するよりは，むしろ，作った物を全て出荷した方が「生産量が上がった」ことになり工場にとっては都合がよいのだ。これが「満足な製品は全体の６割程度」という現状を作り出してしまっているのである。中国はロケットも打ち上げるし国産の原子力潜水艦も保有しており，技術力がないわけではないのだ。しかし，商業ベースの生産となると，どうしても「とにかくたくさん作る。品質は二の次」ということになってしまう。中国の持つ技術力が十分発揮されていないのだとしたら残念なことである。

とにもかくにも，内装工事は終わり，コンセントも元の通りになって，こうしてワープロを打っているわけなのだが，１か月の「引っ越し騒動」を終わって考えてみると，「はて，ホテル側は何のために内装工事をしたのだろうか？」という疑問がふつふつと湧いてくる。木枠の窓はアルミ・サッシに替わった。それにともないクーラーの場所を付け換えた。壁紙も張りかえ絨緞も新しいのと取り替えた。カーテンも新しくなった。しかし，それだけである。このホテルは元もと古い建物であり，改装前もそれほど「老朽化して使いにくい」とは思わなかった。改装後の今も「新しくなって便利になった」という感じはあまりしない。入居している我々としては少しでも新しい方がいいし気分が悪いわけはないのだが，ホテル側にとって客室の半数を１か月閉鎖しなければならないというコストを払うだけのメリットがあったのかどうか。このホテルでは去年も炊事場とレストランを結ぶ通路の建設や売店の建設等かなりの工事をやっていた。客室の数は40余りのこのホテルとして，これで採算が合うのかどうか心配になってくる。客の分際でホテルの経営状態など心配する必要はないのだが，もし経営に行き詰まってホテルを閉鎖することにな

ったらこちらにも影響するので無関心ではいられないのだ。

どうも，ホテルのマネジャーらの言動を見ていると，これらの改装工事は，ホテルの経営戦略の一環というわけではなさそうだ。ホテルの上部機関（北京市旅遊局）あたりからの指示によるもののようである。工事を行う建築公司を遊ばせておくわけにもいかないので，ホテルの経営方針とは関係なく工事が行うことになったのではないかと思われる。というのは，ホテル側から「内装工事をやるので一時部屋を移ってくれ」と言われたのは昨年の12月だったが，その時は「来週工事をやるので５日後までに部屋を替わってくれ」と言われた。こちらからは，丁度，福原理事一行が来られていた時だったので「そんな急な話は無理だ」と答えた。ホテルの意思で工事をやるのであれば長期滞在している我々にもう少し早く知らせていただろう。当事務所は理事が帰国されたらすぐ移るつもりでいたが，他の長期滞在者の都合で実際の工事は１か月以上たってから行われた。この間，長期滞在者のうち日本人１人とドイツ人１人がこのホテルを出ていった。内装工事のせいかどうかは知らないが工事が一つの切っ掛けであったことは確かなようである。２つの空き部屋のうち１つはその後別の長期滞在者が入ってきたがもう１つは空いたままである。長期滞在者に出ていかれたのはホテル側としては痛かっただろうと思う。

ホテル側の意思で工事が行われたのでなかったのだとしたら，一体誰がこのホテルの経営に責任を持っているのだろうか？いろいろ考えていたらわからなくなった。１人の客としてはそんなことはどうでもいいのである。部屋がきれいになって，それで部屋代の値上げがないのだから，黙っていればいいのだ。ただ，資料の整理だ，荷作りだ，コンセントの付け替えだ，とバタバタとなんとなく落ち着かない１か月を過ごして，新しいペンキの匂いを嗅ぎながら，「一体この１か月，僕は何をしていたのだろう？」と言いようのない虚しさを感じてしまっただけの話である。

（1988年３月４日）

西と東のサンドイッチ

我々の接待単位（身元引受機関）である核工業部は，国慶節（10月１日の中華人民共和国の成立記念日）や春節（旧正月）の休みの前後に歌や踊りの舞台見学に招待してくれる。今年の春節の時には「歌と踊りと音楽の夕べ」に招待された。会場である「天橋劇場」に少し早めに到着したら，入り口周辺に若干目付きの良くない若い連中が４～５人ウロウロしていた。ダフ屋である。この日のチケットは３元（約 100円）であるが，これらのダフ屋は事前に劇場関係者からコネを使ってチケットを買ってたり，当日来た客から余ったチケットを買い上げたりして，欲しい人に３～４倍の値段で売り付けるのである。中国の場合，音楽会や舞踊会のチケットは大抵各機関や公司がお客の招待等のために買い占めるので，一般の人はなかなか入手できない。このため人気のある舞台ではダフ屋が横行するのである。

この日の舞台は「小野満とスウィングビーバーズ」みたいな小オーケストラによる軽音楽と歌，それに踊りだった。この踊りのなかにいくつかブレイク・ダンス(*) が入っていて，これがあるためにダフ屋が出る程の人気になったようだ（なお，先ごろ公開されたアメリカ映画『ブレイク・ダンス』（中国公開名：『霹靂舞』)を上映した映画館でもかなりのダフ屋が出たそうである）。ミラーボールが回り連続フラッシュがきらめき「天橋劇場」にディスコ・ミュージックが流れた。この日のブレイク・ダンスではダンサーはいい気分で乗っていたし，会場では拍手喝采，アンコールの声も掛かった。ただし，舞台の上の人には申し訳ないがはっきり言って「プロ」のダンサーとしてはイマイチだった。内容よりも北京でこれを見られることに自体に価値があるのだろう。だから，ダフ屋も商売になるのだろう。

ブレイク・ダンサーが客席の声に応じて台本通りのアンコールをやった後の次のプログラムは「雲南省の少数民族の踊り」だった。「次にどんな目新しい演出が見られるか」と期待していた外国人である私は思わずズッコケてしまった。客席で盛り上がっていた若者達も急に白けてしまった。「少数民族の踊り」も結構現代的で軽快なリズムであるし芸術的であることは確かなのだ

＊（注）［ブレイク・ダンス（break dancing ）］
70年代後半ころからニューヨークのハーレム等で若者の間に流行しはじめ街頭等で踊られるようになった踊りの一種。映画『ブレイク・ダンス』や『フラッシュ・ダンス』等で取り上げられブームとなり，ディスコ・ダンスの主流となる。ヘッド・スピン（頭だけを支えとしてぐるぐると回る）やウェーブ（体の中を波が通り抜けるように手や頭を動かす），ムーンウォーク（足を滑らせて，前に歩いているように見せかけながら実は後に進む動作。マイケル・ジャクソンがステージでやって流行らせた）などの動作がある。

が，観客は頭の中で，自分が座っている場所をニューヨークから雲南省の山奥の農村へ一瞬のうちにワープさせなければならない。この舞台イメージの急変に付いていくにはかなりの精神的柔軟性を必要とする。

北京でこれまでに見た舞台のうち，西洋の歌や踊りが含まれているものは，いつもこのように中国古来ものがサンドイッチのように割込んで，「西洋もの」だけが続かないようになっている。舞台だけでなくラジオのＦＭステレオ放送でも，例えば，

18:30 外国の軽音楽「ポール・モーリア・オーケストラ」

19:00 胡弓演奏会

19:30 モーツァルトのピアノ協奏曲

20:00 人民解放軍音楽隊の演奏「山西省の民謡」

20:30 外国の映画音楽「ある愛の歌」ほか

というように「東洋・西洋サンドイッチ」になる場合が多い。これを素直に解釈すれば「劇場の観客やラジオの視聴者は，若い人もいるしお年寄りもいる，民謡が好きな人もいればクラシック・ファンもいる。これら全ての人に楽しんでもらいたい」という「みなさまのＮＨＫ」的な親切心あるいは「最大公約数主義」によるもの，ということになる。屈折した見方をすれば，全面的な西洋化を恐れた当局の文化政策の現れ，と見ることもできる。劇場での状況を見ていると，せっかくブレイク・ダンスで盛り上がった場内の雰囲気を冷やすように時々水を差すような順番でプログラムが組まれており，劇場側は若者達のエネルギーが盛り上がって爆発するのを恐れているのではないか，という疑念さえ起きてしまう。先日の新聞には「首都体育館で開催された音楽会で無職青年の某は，歌手が歌う度に『××引っ込め！○○を出せ！』と騒いで会場の秩序を破壊した。このため公安当局は治安管理処罰条例第19条第２項の規定に基づき彼を拘留した」という記事が載っていた。劇場で騒ぐのは「いけないこと」なのだ。舞台の演出が盛り上がりに欠けた「民族文化・西洋文化サンドイッチ方式」であったとしても我慢しなければならないのである。

こういう劇場側の演出を中国の若者達がどう考えているのかはよく知らない。中国の若者達が強烈に西洋文化に憧れているかというと，そうでもないところもあるからである。アメリカのグループの歌よりも日本の演歌の方が好きだ，という人も結構多い。街で中国製の若者向けミュージック・テープを買うと必ずと言っていいほどそのうち２～３曲は日本の歌謡曲の中国語の替え歌が入っている。元の歌が中森明菜だったり石川さゆりだったり一定しない。ニュー・ミュージックだろうと演歌だろうと気にしない，いい歌ならばジャンルは関係ないのである。だから，中

国の若者達は「西と東のサンドイッチ」が出てきても全然気にしないのかも知れない。これを「当局の文化政策のせいだ」と考えるのは偏見と先入観で凝り固まった外国人の歪んだ見方かも知れない。

客観的な目で冷静に文化面での中国の状況を見ていくためには2つの視点を忘れてはならないのだ。1つは中国が社会主義国であることに立脚した見方だが，もう1つは中国が独自の歴史を有する文化大国であり，しかも西洋との文化交流が活発になってからあまり時間が経っていないことを考慮した見方である。この2つを混同してはいけない。昨年，広東省の深圳市で開催されたボディービル大会で女性の参加者がビキニで登場して話題になった。それまでは「公衆の前で女性が肌を見せるのは好ましくない」との空気が強くビキニは許されていなかった。また，今年，上海の美術学校でヌードモデルをやっていた若い女性が故郷の村に帰ったら周囲の村人から白い目で見られ遂にノイローゼになった事件があった（この村人達の態度は「人民日報」の紙上で，芸術に対する理解を欠いた封建的なものだ，として批判された）。これらの現象は，中国が社会主義であるかどうかはあまり関係がない。そこには，古来人間の肉体を「美」の対象の一つとして考えてきた西洋型文化とそういう習慣のない東洋型文化の間の文化的ギャップがあるだけである。文革時代の画一的な文化傾向の印象が強いためか「中国は社会主義だからお堅い」と考える人が多いようだが，現在では文化面で体制の違いを感じることはあまり多くはない。文革時代は「ベートーベンはブルジョア的だ」としてクラシック音楽すら批判されていたが，今では街でマイケル・ジャクソンやマドンナのミュージック・テープを買うことができる。この間の変化を端的に表現すれば，文革時代は「共産党を称賛していないものはダメ」だったのが，現在は「共産党に批判的でなければよい」に変わった，ということができる。マドンナの「ライク・ア・バージン」は「共産党に批判的ではない」からO.K.なのである。

「社会主義だからお堅い」と考えるのは単純過ぎる。各国にはそれぞれ独自の民族性や歴史的・文化的背景がある。ある日本人の北京事務所長は宴会での挨拶で「挨拶とスカートの丈は短ければ短いほどよいので，挨拶はこれで終わりにします」と言ったら，「品がない」として中国人関係者からひんしゅくを買ったそうである。これは体制の違いというより文化の違いである。両国の違いを正しく理解していないと無用な摩擦を起こすことになる。だからブレイク・ダンスと雲南省の踊りを連続させることに対して，軽々しく批判的なことを言ってはいけないのである。

「今日の『天橋劇場』の観客たちは満足したのかな。少なくとも3元（約 100円）分くらいは楽しんだのだろうな。一晩の劇場の出しものを見て『日中間の文化摩擦の問題』について考えた

りするのはちょっと考え過ぎだな」。そう思いながら無灯火の自転車の群れがまだ行き来している北京の街を宿舎へ帰った。

（1988年３月11日）

北京で切符を買う方法

所長が日本からの出張者と一緒に遼寧省の興城へ出掛けたので北京駅まで見送りに行った。北京駅は建物の入口に改札口がある。だから駅舎に入るためには乗車券か入場券が必要である。興城行きの乗車券は前もって買ってあったが，見送る人の入場券はまだ買っていなかった。通訳の王龍安さんは入場券を買うために窓口へ行った。しばらくすると困ったような顔をして戻ってきた。見送りのための入場券を買うためには，実際に列車に乗る人の乗車券を提示しなければ買えないのだそうだ。時間がなかったので改札口の人に事情を説明して無理矢理頼んで入場券なしに入れてもらった。そのかわり帰るときに清算窓口でお金を払った。

中国の各機関の窓口ではよく身分を証明する書類の提示を要求される。駅の入場券などお金さえ払えばすぐに売ってくれればよさそうなものだが，「私は確かに駅に入場する正当な理由がある」という証明書がないとダメらしい。列車の乗車券や飛行機の航空券を買う時にも身分証明書（外国人ならパスポート，中国人の労働者なら職場が発行する工作証，学生なら学生証）が必要である。このほかに中国人の場合は，プライベートな旅行であっても，自分が所属する職場や学校が出す「この者が旅行することに対して当公司（学校）としては異存がない」旨書かれた紹介状が必要らしい。また，外国人が非開放区へ行くためには公安当局が発行する旅行証が必要となる。その上，乗車券や航空券を買える場所は普通１か所しかない。列車なら北京駅の窓口，飛行機なら北京市内の中国民航局だけである。旅行代理店やチケット屋はない。だからこれらの窓口はいつも猛烈に混雑している。しかも，これらの窓口では北京発の切符しか売らない。北京へ帰ってくる時の切符は行った先で買うしかないのである。行った先に知り合いでもいない限り帰りの切符が取れるかどうかは「神のみぞ知る」である。向こうに知り合いがいたとしても切符を取るにはパスポート等の身分証明書が必要なのだから，結局本人が行かなければ切符は入手できない。（ただし，行く先があまり大きくない地方都市で仕事の相手が政府の関係機関である場合は，相手側がその土地でかなり「顔が効く」場合が多いのでなんとかなることが多い）。

大混雑の窓口へ行くのは気が重い。航空券の場合は電話で予約ができるが，予約だけ先にして切符を後で買おうとする場合はある程度のリスクを覚悟しなければならない。切符を買う＝お金を支払う，という手続が終わらなければ予約は完全に成立したことにならないからである。電話で予約だけして安心してしまい，直前に切符を買いに行ったら予約が取り消されていた，という

苦い経験がある（汽車の切符の場合は電話予約ができないので，まず駅の窓口へ行って予約をして予約券を入手し，乗車日の数日前にもう一度窓口へ出向いて予約券と身分証明書を提示してお金を払って切符を買うのである）。

切符を入手してしまえば安心である。天候や故障がない限り，列車や飛行機はかなり正確に定刻通り運行されるし，ロスト・バゲッジなどの心配もない。中国民航や鉄道の職員は極めて真面目に職務を遂行しているのである。切符の入手が何故こんなに面倒なのかという理由はいくつかある。考えられるものを列記すると，

① 全国的な通信ネットワークが不十分なため切符販売のオン・ライン化が全くできていない。切符への座席指定の書き込みや売れた座席のチェック等は全て手書きなので，１つの件を処理するのに時間がかかる。

② 中国は国土が広く列車や航空機の路線が複雑である上，人が多くて交通機関に対する需要が極めて大きいので，複数の場所で切符を販売すると整理がつかなくなる。このため窓口の数を増やせない。

③ 列車や飛行機を利用する全ての人の身分をいちいち確認するため手続が複雑になる。

④ 交通機関は「国営」だから手間を省いて効率化しようというコスト意識がない。

⑤ 手続を代行する旅行代理業が未発達である。

いずれにせよ北京事務所に勤務するには「切符も取れないし出張の予定も立たないとは何事か！」と本社からガミガミ言って来ても「ここは中国ですからね。できないものは仕方がないんですよ。まあ，そうカリカリしないで下さい」と涼しい顔をしていられる図太さが必要なのである。上記の①とも関連するが，中国の電話事情の悪さは有名である。当事務所にも去年の秋に直通電話がついたが，それまではダイヤル直通で話ができるアフリカの探鉱事務所を羨ましく思ったものだ（現在でも遼寧省の興城にはダイヤル直通はできない）。中国の電話普及率は 100人当たり0.59台（1985年）で，日本の38.0台，全世界平均の11.5台より遥かに低くアフリカ諸国の平均 1.2台にも及ばない。北京市内でも最近はかなり改善はされてきているが古い交換機を使っている２桁局番のところに掛けると３回に２回はお話中である。相手が誰かと電話中なのではなく，その局番の電話局へ行くまでの回線の本数が足りないか電話局の処理能力が足りないかして通じないのである。だから，３～４回掛けてもいつも話中音が聞こえたからといって，次に会った時に「この間は随分長電話をしていましたね。一体，誰と話していたのですか？」などと聞いてはいけない。相手は「いや。私はずうっと事務室にいましたが，どこからも電話は掛かってきませ

んでしたよ」と答えるに決まっているからである。

もっとも切符購入が面倒なのは電話事情の悪さのような物理的な原因によるものばかりではない。極秘のノウハウをここで紹介するが，例えばある日の中国民航の北京発ー成田行きの飛行機便の発着時刻を知りたい時は，日本航空の北京支店へ電話を入れるのである。中国民航に電話をしても「その件は〇〇係に聞いて欲しい」とタライ回しにされた挙げ句に「時刻表に載っているからそれを買いなさい」と言われて電話を切られてしまう。通訳の王龍安さんに電話してもらうわけだが，喧嘩腰で向こうとやりあっているのをそばで聞いていると，気の毒で頼めなくなってしまう。そこで自分でＪＡＬに電話する。まず，「東京に出張する計画を立てているのですが，〇月×日の北京発成田行きのは何時発ですか？」

と聞く。向こうはすぐ答えてくれるので，それに続けて，

「そうですか，どうも。あ，それから，もしお宅でわかるようでしたら中国民航の方の時刻も教えていただけるとありがたいのですが。」

と聞く。すると向こうは，

「ええ，わかりますよ。民航さんは△△時××分発の〇〇〇便で成田着は××時△△分です。」

と答えて，しかも「宜しくお願いします。ありがとうございました」と言って電話を切る。この間３分間。この方が早いし，とにかく嫌な思いをしないで済む。この中国民航とＪＡＬ（全日空ももちろんですが）との違いは，中国語ができるとかできないとか，電話が通じるとか通じないとか以前の問題のようである。

中国民航の人も別に仕事に不真面目なわけではない。とにかく，供給できるサービスに比べて需要が圧倒的に多すぎるのである。窓口などではいつでもお客が何十人も群がっている。客の方は，隣の人に「お先にどうぞ」なんて譲っていたら自分の分がなくなってしまうから我勝ちに「早くオレに切符を売ってくれ」と騒ぐ。窓口の係員は，一日中こういう騒然とした中にいて「そんなに騒ぐんじゃないよ！１人１人やってんだから！」とわめき続けているので「ありがとうございました」なんて言う雰囲気じゃなくなってしまう。乗りたい人が多過ぎるのだから仕方がない。鉄道や飛行機の輸送能力が飛躍的に大きくなるまで，少しくらいの不愉快さは我慢しなければならない。中国の人が我慢しているのだから，外国人たる我々も「あ〜あ，日本だったらなあ」などという溜め息はぐっと飲み込んで我慢しなければならないのである。

（1988年３月18日）

手紙で鼻をかむ話

中国語や韓国語を勉強したことのある方ならば御存じだろうが，同じ漢字で書かれていても国によって意味の違うことがよくある。日本語の「手紙」もその一つで，中国では郵便による書簡のことは「信」という。「手紙」と書くと中国の人はティッシュ・ペーパーかトイレット・ペーパーを連想してしまう。同字異義語にまつわる笑い話はいろいろあるが，北京事務所の日常の中でも失敗談がある。北京に着いた最初の晩，お茶を飲むためのお湯が欲しかったので貰うことにした。辞書を引いたら「湯」は「タン」と読む，と書いてあった。そこでホテルの服務員（サービス係）に「私にタンをくれ」と言った。そうしたら服務員は眼を丸くして「タン？」と繰り返して「没有（メイヨウ＝ない）」とぶっきらぼうに答えた。「なんと不親切な」と頭に来て，発音が悪かったのかな，ともう一度辞書を見たら，「湯」とは「スープ」のことで日本語のような「熱い水」という意味ではないことがわかった。「熱い水」のことは「熱水（ルーシュイ）」とか「開水（カイシュイ）」とか言えばよかったのだ（「開」は「開く」のほかに，「（水を）ぐらぐら沸かす」「（自動車や機械を）運転する」という意味がある。スイッチの開閉の「開」を連想すればよい）。「湯＝スープ」というのは「タンメン（湯麺）」とか「バイタン（白湯）スープ」とかから簡単に連想できたはずなのだが，どたん場になると気が付かないのである。この服務員が親切で本当にスープを持って来なくてよかった。北京での冷汗の「かきぞめ」であった。

このテの話は中国にかなり慣れたつもりになっている最近でも時々起こる。先日，中国側のある機関から，今年後半に開催を予定している展覧会について説明したい，と電話が掛かってきた。あまりこちらの業務と関係なさそうだったので，資料だけ郵送してもらおうと思って「資料を送って下さい」と言った。そうしたら翌日，係の人が事務所まで資料を持って来てくれた。事務所は北京市内でもどちらかというと北のはずれの方にあるので，わざわざ届けてくれたのには若干恐縮した。後でよく考えたら，私は「送資料」とか何とか下手な中国語で言ったらしいのだ。この「送」とは中国語では郵便で送ることではなく，物なら持っていくこと，届けること，人間なら付き添って行くことを意味する（郵送する場合は「寄〇〇」という。これは日本語でも「お手紙をお寄せください」という時に使うからすぐわかると思う。「送」は日本語の「今晩はもう遅いから君の家まで送るよ」という場合の「送る」の意味である）。そのことは知っていたはずなのだが，やはりとっさには出て来なかったのだ。

この種の現象は，日本人が中国語を話す時に注意しなければならないことだが，中国人が日本語を話す時にも時々現れる。中国からの訪日団の日本での宿舎について打ち合わせるている時，日本側が「近頃はホテル代も高くなって手頃な値段のところがなくてね」と困ったような顔をすると，中国側が「そんなに気を使わなくても結構ですよ。「ひゃくしょう」が泊まるようなところでいいですよ」と言ったりする。日本側は意味が分からず「ん？」と顔を見合わせるのである。この場合の「ひゃくしょう」というのは「百姓」で，中国語で「庶民・一般の人」の意味である「百姓（バイシン）」をそのまま日本語で発音してしまったための間違いである。「百姓」という語は，もともと「貴族の姓以外の諸々の姓を持つ人々＝普通の人々」という意味であったものが，昔は一般庶民はほとんど全部が農民であったことから，日本では「百姓」＝「農民」の意味になり「一般の人」という意味が消えてしまったのである。中国側は「ごく普通の人が泊まる所（ビジネス・ホテルのような所）でいいですよ」と言いたかったのである。こういう勘違いは優秀な通訳の人でも時々起こす。正式な会議よりむしろ気軽で非公式な会話の中でひょっこり出てくることが多い。

これら言語上の意味の違いは，必要があれば問い直せばよいのだからそれほど大きな問題ではない。ちょっと困るのは，いかに優れた通訳が間に入っても通訳できない文化的間隙（カルチャー・ギャップ）がある場合である。日本と中国の場合，お互いに同じような顔をしているし，文化的にもそんなに違わないだろう，と思っているので，時々カルチャー・ギャップによる不必要な摩擦が起こる。例えば，知人の家を訪れた時，日本人ならば挨拶の中で「いやあ，ちょっとそこまで来たのでついでに寄らせていただきました」と言うだろう。しかし，中国人に対してこれをそのまま訳して伝えたら，この家の主人の機嫌を損ねてしまうことになる。中国人の家に行った時は「わざわざあなたの家に来たのです」と言わねばならない。「他の要件を差し置いてあなたの家を訪問した」ということを伝えるのが，自分の相手に対する敬意を表すことになるからである。日本人のつもりで言ったら「ついでに寄った，などと私をそのように軽視しているのなら，家に来て貰わなくてもよい」と追い返されるかもしれない。謙遜してものを言う場合にも日中の間で差が出る時がある。日本語を習っている中国人を「あなたの日本語はお上手ですね」と褒めると，大抵「いやいや，まだまだ下手です」と謙遜する。この辺の感覚は日本人と同じなのだが，こちらが日本式に過度に謙遜すると誤解を招くことがある。ある残留日本人孤児が日本に帰って知人の家を訪問した時の話である。この人は中国で育ったが，学校へ行って勉強していたので日本語はかなり理解できた。帰り際に，この家のおばあさんが「これ，お口に合わないでしょうけ

れども，お持ち帰り下さい。うちの孫たちは『おばあちゃんの作ったケーキなんておいしくないよ』なんて言うんですけれども」と言いながら手作りのケーキをお土産として持たせてくれた。この残留孤児だった人は「自分の孫が，まずい，と言っているようなものをくれるなんて，馬鹿にするのにも程がある」とすっかり腹を立ててしまい，家を出るとケーキをすぐ道端に捨ててしまったそうである。おばあさんは「これ，私があなたのためにわざわざ作ったんです。召し上がって下さい。おいしいですよ」と自分の気持ちに素直に言えばよかったのだ。そうすればこの人は感激してケーキを持ち帰っただろう。言葉が完全に理解できたとしてもこれらの誤解を防ぐことはできない。

日本人が謙遜をするのは「不必要な気使いをさせたくない」という相手を思いやる気持ちから発生している。だから，謙遜することが悪いわけではない。要は，変なふうに謙遜して言葉尻だけで相手を思いやるのではなく，例えば，残留孤児の人の話の場合は，「この人は日本語がまだ完全じゃないから私の言っていることを 100%は理解していないのかも知れない」と相手の身になって考えることが必要なのである。自分の気持ちを素直に丁寧に表現すれば誤解を避けることができるはずである。

中国はアメリカやドイツと同じように「外国」である。地理的に近いからといって，安易に中国を理解するすることができると考えるのは極めて危険である。しかし，日本人の場合，欧米人と比べて「漢字を使い，同じような歴史的・文化的背景を持つ」という圧倒的な有利さを持っている。この有利さは大いに活用すべきである。以前，北京に来て間もなくの頃，欧米人の北京駐在員達と博物館へ行く機会があった。2～3年北京にいる欧米人の駐在員は，結構中国語は話せるのだが，やはり漢字は苦手のようだった。よく「この展示の説明には何と書いてあるのか」と質問された。北京に来たばかりの私でも書いてあることを読んで説明することができた（もっとも英語が下手だから相手がわかったかどうかは知らない）。今中国で使っている簡略体の漢字に慣れれば，日本人ならば7～8割は書いてある意味は分かる。中国語は完全にマスターするにはやはりかなり難しい言語だが，マスターしないまでも，ちょっとかじっただけでも，それなりに中国人のものの考え方やものの見方の一片を知ることができる。そういう一片，一片を一つづつ積み重ねて行けば，無用な誤解も減っていくだろうし，本当の意味での日中の相互理解が深まるのだと思う。

（1988年3月25日）

上海での列車事故について

1988年３月24日午後，上海郊外で起きた列車衝突事故で，修学旅行中の日本の高校生ら28人が亡くなり 100人を越える人達が負傷した。中国で起きた交通機関の事故でこんなに多くの日本人が犠牲になったのは初めてである。中国にとっても，国内の事故でこれほど多くの外国人に被害がでたのは初めてだと思う。現在開催中の全人代でも交通の安全性の問題がかなり議論されているし，人民日報はじめ各新聞は全人代のニュースと並べてかなり大きなスペースを裂いてこの事故を報道している。

日本にいる人はあまり知らないと思うが，中国ではこの種の事故・災害は意外に多い。中国の不名誉になることをあまり書きたくはないのだが，今年になってからの交通機関の大きな事故を列記してみる。

（日　時）	（場　所　と　事　故）	（死亡者数）	（負傷者数）
1988年１月７日	湖南省の列車火災	34人	30人
１月17日	黒龍江省の列車衝突事故	18人	68人
１月18日	四川省重慶の西南航空機墜落事故	108人	－
１月24日	雲南省の列車脱線・転覆事故	90人	66人
３月７日	河南省のバス転落事故	39人	17人
３月24日	上海郊外の列車衝突事故	28人	104人

このうち黒龍江省の事故については，事故を起こした列車のブレーキ系統が何者かによって故意に破壊されていたことが報道されたが，その他については運転ミスや機器の故障によるものと考えられている。中国側も今年に入ってからの交通機関の重大事故の増大を極めて重視して，西南航空機の事故が発生した時点で，交通部門に限らず全ての職場に対して，規律の維持と職務怠慢のチェックを指示した。我々のカウンターパートである核工業部でも，職員全員について，日頃の業務にゆるみがないかもう一度確認すべし，との指示が行われたようである。この１月の事故の処理が一段落した３月初旬，交通部長が一連の事故の責任を追って更迭されている。

今回の上海の列車衝突事故は極めて不幸な事故だった。この事故によって日本人の間に「中国というのは危険なところなんだな」という不安感が広まるのではないかと心配である。新聞の報道や中国に来たことのある人からいろいろ話を聞いて，中国ではあまり安全が重視されていない

と思っている人が多いと思う。実際，中国の踏み切りでは，遮断機が上がっている時は自動車は一時停止も徐行もしなくてよいことになっている。これには理由があって，踏み切りには警笛手がいて列車が来るのを監視しているのだから自動車の方がいちいち安全を確認することはない，とか，中国の踏み切りは平原地帯にある場合が多いから列車が来れば遠くからでもよく見えるから心配ない，とか，特に冬の寒さの厳しい東北地方では一時停止をするとエンストをする確率が高くなってかえって危険だ，とかいうのである。しかし，自動車は普通に走っているスピードで踏み切りを駆け抜けるので，初めての人は肝を冷やす。街中での交通事故も多い。1986年の中国の都市部での交通事故による死者数は12,530人である。1985年の日本の交通事故による死者数 9,261人より多い。中国の自動車保有台数 800万台，日本の自動車保有台数 4,800万台を考慮すると，中国の農村部では全く事故が起きなかったと仮定しても，自動車1万台当たりの1年間の交通事故死者数は日本の 1.9人に対し中国は15.7人である。だから自動車による交通事故に関する限り中国は日本に比べて8倍以上危険である，と言うことができる。

ただし，交通安全の面で日本と中国を比較する場合は，国の広さを考えなければならない。道路に関していえば，平原で見通しがよい上に車の数が少ないから，多くのドライバーはべらぼうにスピードを出す。その上に自転車が涌き出るごとくに路上に溢れており，農村部では同じ道路上を馬車やトラクターがのんびり動いていく。緻密に交通安全を考える雰囲気はなかなか出てこない。また，交通面でのインフラも中国は現在まだ発展途上にある。今回の鉄道事故で日本にもかなり報道されたが，上海郊外という中国で最も交通量が多いと考えられているところにもまだ単線区間がある。というより，中国の鉄道は，主要な幹線以外は，単線で電化されていないのが普通である。ＡＴＳ（自動列車制御装置）等も設置されていない。運行は鉄道労働者の力量に頼って行われる。コンピューターで制御される機械と人間がお互いに監視しあって完璧ともいえる安全システムを構成している日本の鉄道技術と比べるのは酷である。

中国の鉄道というと，広大な平原の中を蒸気機関車が煙を吐いて疾走する，というロマンチックな光景を思い浮かべる人が多いと思う。確かにそれはそうなのだが，1つの場所に立って，そういう光景を眺めていると，汽笛の余韻を楽しみ旅情に浸ろうと思う前に，すぐ次の列車が来てしまう。幹線の複線区間なら5分間に1本列車が通る，という感じである。国電並みとまでは行かなくても，東海道新幹線くらいの頻度はある。そのうち大体 2/3以上は貨物列車である。日本では最近は背骨にあたる部分に新幹線や高速道路ができたからあまり感じないが，例えば10年程前の東北本線などは，長距離の特急やローカル列車，貨物列車が次々に通るかなりな過密ダイヤ

だった。中国の鉄道の過密さも，中国の経済発展を象徴しているのだ。しかし，資金の不足により，例えば中国最大の幹線である北京－広州線でも全区間の複線・電化は完成していない。去年，衡陽－広州間にある大瑶山トンネルが開通したから，近い将来複線化は完成するだろう。中国における交通の安全を考える上では，短絡的に「中国は危ない。行かない方がいい」等と考えずに，現在の中国の置かれている状況を念頭に入れて冷静に判断していただきたい。今回の事故の報道の中で，一部に「修学旅行の行き先として，どうしてあんな危険なところへいかねばならないのか」という趣旨のものが目に付いた。今回の事故が大きな悲劇であったことは間違いないが，こういう見方は，若干冷静さを欠いているのではないか。こちらの鉄道労働者も別に怠慢なわけではない。みな真剣に仕事をしているのだ。その辺は誤解がないことを希望したい。

今回の事故に関する日本側の報道を見てもう一つ気になったのが，「中国からの情報がなかなかこなかった」「最初の事故の映像が届いたのは事故発生後９時間もたってからだ」という類の報道である。こちらでは，むしろ事故報道の迅速さに驚いたくらいだ。私は見なかったが，事故の当日の夜中（事故発生は昼間の２時20分頃）にこちらのテレビでも臨時ニュースを放送したようだ。翌日の人民日報には写真入りで報道されていた。これは上海近郊という場所が非常に便利なところだったからこんなに速かったのである。日本ではこのような報道は遅すぎて批判が集中するのだろうが，中国ではこれでも「異例の速さ」なのである。１月７日の湖南省の列車火災の映像が放映されたのが９日夜の７時のニュース，１月17日正午頃の黒龍江省の列車衝突事故が報道されたのが19日付けの新聞（写真なし）。政治がらみだともう少し遅くなる場合があって，３月５日の一部チベット人による騒擾事件がテレビに登場したのが３月８日の夜だった。これらはいずれも率直に報道されたという点で大きな進歩なのである。上海の事故報道が異例の速さだったのは，中国側が日中関係への影響も考慮して，この事故を重視していることの表れである。

日本の報道機関は，外国からのニュースでも日本に関係のないことはほとんど報道しない。例えば，３月７日の河南省のバス転落事故や，同じ日に中国が実用通信衛星を打ち上げ22日に東経87.5度の赤道上に静止した等というニュースは，中国に関心を持っている人以外はほとんど知らないのではないだろうか。今回の上海の列車事故は，完全に中国側の責任で弁解の余地はない。しかし，中国の状況をよく知らないで「情報の集まり方がおそい」「対応がのろい」等と必要以上に声高に叫ぶのは，日中間で無用な感情的対立を醸成してしまう。事故の関係者の心情を思うと言いにくいのだが，本当のことを言えば「日本から救援のための医師団が派遣された」とか「成田から輸血用血液が緊急空輸された」とかいう報道は，中国の人から見ればちょっと引っ掛

かるものを感じるのではないだろうか。上海にも有能な医師団がいるし，緊急時の輸血体制も整っている。実際，今回の事故では，外国人が怪我をしたときのために特別に準備された血液が使用された。さらに緊急時のために用意された輸血者リストの中から採血が行われ１万ﾐﾘﾘｯﾄﾙの鮮血が集められた。この事故のために上海献血センターが提供した血液は合計６万ﾐﾘﾘｯﾄﾙに上ったということである。これら中国側関係者の努力も忘れてはならない。

中国の交通事情は日本よりも劣悪だし，交通事故に会う確率も高い。それは事実だが，そういう状況の中で中国の人々は暮らしている。状況を改善させるべく様々な対策を講じている。中国側に不必要な遠慮をする必要はないが，中国の現状を十分承知した上で，中国側の不備について指摘すべきものは指摘し，注文を付けるべきものは注文を付けていく必要があると考える。

事故の関係者からはお叱りを受けるかもしれないが，「日本人が亡くなった場合とそうでない場合とでは，どうして日本の報道の仕方がこんなに違うのかな」となんとなく感じた。雲南省の鉄道事故で中国人90人が亡くなった時，日本は医師の派遣等何らかの援助をやっただろうか。自分が当事者になったら，そんなことは言っていられないだろうが，毎日中国の人と顔を突き合わせている北京駐在員として，そんなことも考えてしまったのである。

（1988年４月１日）

季節のたより　①（1988年４月２日）

＊　竹園賓館の桃の花が今週パッと咲きました。柳の芽も青々としてきました。窓を開けていても心地よい風が入ってきます。もっとも，あまり開けていると，風にのって細かい砂が一緒に入ってくるので閉口します。北京の北西80kmのところにある万里の長城の外側は，昔の匈奴の世界の「黄色い大地」で，その広大な大地から砂が風で運ばれてくるのです。

＊　先日の上海での列車事故はショックでした。上海の総領事館は職員の日本人は７～８人しかいないので大変だったと思います。北京でもJICAの事務所等では中日友好病院にいる専門家を急遽派遣したりいろいろ大変だったようです。

中国はプロレスの味方です

1966年～1976年の「文化大革命」の印象は強烈だった。紅衛兵が天安門前広場を埋め尽くし，少しでも資本主義的なものがあれば徹底的に糾弾された。「輪タクは客が踏め」というスローガンも現れた。「年配の労働者が汗水流してペダルを踏んでいるのを眺めながら若い客が後で涼しい顔をしてふんぞり返っているのはけしからん。ブルジョア的だ。ペダルは客が踏むべきである。輪タク屋は後の座席に座っていればよい」というのがこのスローガンの趣旨である。これを唱えた紅衛兵によれば，輪タク屋の仕事は客待ちの場所まで輪タクを運ぶことだけなのだそうだ。「文革時代」の弊害はいろいろあるが，外国に対して「中国はわけの分からない国だ。我々とは別の世界の国だ」という印象を与えてしまったのもその一つである。

スリーマイル・アイランドの事故があった年（1979年）に話題になったアメリカ映画に「チャイナ・シンドローム」があった。この映画の題名は「原子力発電所で重大事故が発生して炉心融解が起きると，炉心は圧力容器や原子炉建屋をも溶かして地中深く沈んで行き，ついには地球の反対側の中国に顔を出すことになる」という皮肉に由来している。もちろん炉心が地球の反対側に出るなんてことはないし，大体アメリカの反対側は中国ではない。これは「原子力発電所の重大事故＝とんでもないこと，我々の考えが及ばないこと＝中国」という連想から生まれた言葉である。原子力関係者としての立場を離れてこれについてよく考えてみると，これは中国を皮肉った言葉でもある。「わけのわからん，とんでもない，我々の考えが及ばない」というイメージを「チャイナ」という言葉の中に見ているのである。当時，この映画を巡って原子力発電所についての様々な議論が行われたが，「なぜ「チャイナ」なのか」という議論は全くなかった。これは「文革時代」の印象が強過ぎたため，多くの人が中国というと人民服一色に塗り潰された画一的な不可解な国，というイメージを持っていて，それに異論を挟む人がいなかったからである。

「文革時代」の残像は今だに人々の脳裏に残っているようで，日本から初めて中国を訪れる人は必ず「へ～っ，中国でもこんなことがあるのか。意外に進んでいるんだね」と驚くことが何回もある。最近は中国からの報道も多いし人の交流も盛んになったので，結構中国の様子を知っている人も多いのだけれども，北京にケンタッキー・フライドチキンの店があるとか，ＦＭのステレオ放送をやっているとか，テレビでネスカフェやＮＥＣのコマーシャルをやっているとかは意外に知らない人が多い。

既に「文革」が終わってから12年，共産党が「文革は誤りだった」と自ら認めたいわゆる「歴史決議」をだしてから7年経っている。中国はもう「わけのわからん，とんでもない，我々の考えが及ばない」国ではない。世界に数多くある国の一つであって，考えが及ばないほど日本と違った国ではない。「へ〜っ，中国でもこんなことがあるのか」と驚くのは，自分の中の中国のイメージが実際の中国の進歩と同じように変化しないために起こるギャップによるものである。

私が中国へ来て1年半になるが，ここで告白すると，実はいまでも「へ〜っ」と驚くことがしょっちゅうである。先日，何気なくテレビを見ていたら，なんとプロレスをやっていた。日本のテレビ局が制作したものに中国語で解説をかぶせたもののようで，中国語のアナウンスの裏で小さく日本語の解説が聞こえている。まさか「北京電視台（北京テレビ局）」からの放送の中で「おぉーっと！回転えび固めだ！」などという日本語が聞けるとは思わなかった。1つの試合が終わったら，今度は女子プロレスを始めた。さすがに唖然とした。唖然としたまま最後まで見てしまった。恐らく日本のテレビ局かプロレスの関係者が中国のテレビ局にビデオを提供したのだろう。中国のテレビ局としても一度放映して視聴者の反応を見て，評判が良ければ続けようと思っているのだろう。同じようなケースが一度あって，日本のある俳優が所属するプロダクションがその俳優が主演している日本の時代劇のビデオを無料で中央電視台（中央テレビ局）に提供したことがあった。中央電視台はそれを2〜3回放映したが，やはり中国では「チョンマゲもの」にはあまり人気が出なかったようで，それ切り続編は放映されなかった。この時代劇はもちろん中国語に吹き替えてあった。両肌脱いだヤクザのお兄いさんが「よござんすか？入ります！」と言う代わりに「準備好了嗎？開始！」と叫ぶのである。拍子抜けである。視聴者はこの男が何をやっているのかよくわからないだろう。人気が出なくて当然である。私見だが，プロレスも中国では人気は出ないだろう。中国の人はテレビを真面目に見るから，プロレスを見たら「運動員（プレーヤー）は本気でやっているとは思えない」と批判がでるだろう。

中国は今，試行錯誤の時代である。「おもしろそうなものはやってみる。批判が出たら止めればよい」。皆そう思っているようである。文革直後は批判されるのを恐れて，新しいことをやろう，という気運がなかなか盛り上がらなかった。だから今の「やってみよう」という風潮は貴重である。ただ，時々「やりすぎ」と思われることも起こる。テレビでプロレスをやるのも「やりすぎ」のような気がする。最近，北京在住の外国人へのサービスとして人民解放軍の演習場でスポーツ射撃をやらせてもらえるようになった。ライフルやピストル，クレー射撃ならばわかるが，お金を出せばバズーカ砲も撃たせて貰えるという（1発 750元＝約26,000円）。これなどちょっ

と「やりすぎ」の感じがする。

4～5年前まで中国ではボクシングは行われていなかった。「スポーツは国民の健康の増進と青少年の健全な発育に役に立つものでなければならない。ボクシングは危険が多く青少年の教育の場に用いるのには適さない」というのがその理由だった。これも1つの見識であり，賛成する人も多いのではないかと思う。ところが最近はボクシングの大会もやっているしテレビでプロ・ボクシングの試合の放送もある。中国側の言い分としては「適切な防具を着ければ青少年でも危険はないし，世界各国で行われているものを中国で禁止する理由はない」ということになろう。ホンネとしてはオリンピックでなるべく多くのメダルが欲しいので解禁したのかも知れない。中国がボクシングの分野でも世界の仲間入りをしたのは結構なことだが，ボクシングをやらないのも1つの良識ある考え方だと感じていただけに，中国が妙に俗っぽくなっていくようでちょっと寂しい気もする。

「文革」は既に歴史になろうとしている。今街では，「文革時代」の「輪タクは客が踏め」というスローガンなど忘れたように輪タクがスイスイと走っている。しかし，若いアベックが後の座席でおしゃべりしている一方で，おじいさんが汗をかいて一生懸命ペダルを漕いでいるのを見ると，なんとなく「これでいいのかなあ」と思えてしまう。「文革時代」は確かにひどい時代であってあんな時代がまた来たら困るのだが，あの時代とて背景には崇高な理想があったはずである。良識ある「ホネ」の部分もあったはずで，それまでも失うことがなければよいがなあ，と思う。私は「中国はプロレスの味方です」等ということばを聞いて幻滅したくはない。テレビのプロレスを見てそう考えていたら「やはり自分は新人類ではないのだな」と気づいて，なんだか可笑しくなってしまった。

（1988年4月8日）

季節のたより　②（1988年4月8日）

＊　今日（8日）東京は大雪が降ったそうですが，北京は今日の最高気温は20度です。毎週「的はずれ」の報告ばかりで，すみません。幹部との打合せの議事録等を見ると，幹部の方々は「中国プロジェクトはどうなった？機構改革について何も情報はないのか？」と若干イライラされているようですが，実質的な御報告ができないのは面目ない次第です。

＊　そこで今回は機構改革を理解する上で前提となる中国の体制を復習の意味でまとめました。「全人代のことなどどうでもよい。地質局がどうなるのか？我々の契約の相手は誰になるのか？」問われればモゴモゴを口籠もるほかはありません。

現段階で言えるのは次のようなことぐらいです。「核工業部はエネルギー部に所属する核工業総公司になる。地質局や鉱冶局はそのまま『核工業総公司地質局』『核工業総公司鉱冶

局』になる。我々のプロジェクトの契約の相手となるのはこの『核工業総公司』だが，具体的な契約者（サインする人）が『核工業総公司董事長（理事長）』になるのか『核工業総公司地質局長』になるのかはこれからのネゴ・マターである。『核工業部』と『核工業総公司』とはどこがちがうのかは，定かではないが，原子力の平和利用の分野に関しては『核工業総公司』の所掌範囲は『核工業部』と同じであろう，と推定される。『核工業総公司』の意思決定方法は『核工業部』の原則的に変化はないだろうが，経済的な独立採算性は強くなり，コスト意識が高まる結果，経済的な面での我々の考え方を理解しやすい雰囲気が生まれる可能性もある」

らっきょう，しゃぶしゃぶ，みそラーメン

先日，西苑飯店へ食事に行った。食事の前にビールを頼んだら，つまみとして生ニンニクみないなツルツルと光沢のあるものが出てきた。連れの人と「何かの木の実じゃないですか。」「らっきょうじゃないですかね？」「中国にらっきょうってありましたっけ？」と顔を見合わせた。恐る恐る口に入れてみると，「本物」の「花らっきょう」だった。日本で食べるものと寸分違わない。西洋にいる外国駐在員なら「久し振りにらっきょうにありつけた」と喜ぶのだろうが，北京にいる駐在員は「ああ，らっきょうも元をただせば中国が原産なのか」と溜め息をついてしまうのである。

中国に来てあまり時間が立たないうちは，中国の中に日本との共通項を見い出すと，中国に対する親近感が湧いて嬉しくなる。食べ物に関して言えば，豆腐はもともとは中国のものだし，納豆も雲南省の少数民族は今でも食べている。海苔はあぶって醤油を付けて食べることはしないが，スープにいれることはよくある。街では日本と同じようなシート状の海苔を売っているし，レストランで海苔と溶き卵の湯（スープ）が出てくることもある。しかし，中国にいる時間が長くなると，この感覚は段々変わってくる。いろいろ話を聞いてみると，日本のしゃぶしゃぶの原型は北方民族の「涮羊肉」（羊肉のしゃぶしゃぶ）なのだそうだ。「涮羊肉」は薄く切った羊肉をテーブルの上で熱湯にさっと通してタレを付けて食べるもので，食べ方は日本のしゃぶしゃぶと全く同じである。「涮羊肉」は今でも北京の冬の名物料理の一つだが，冬の食べ物というと，日本では漬物や鍋物で白菜が欠かせない。この白菜も原産は中国である。しかも，白菜が日本に入ったのは明治維新以後である。

そう考えてみると，一体日本独自のもの，日本にしかないものというのは何だろうか，と考えてしまう。たまに，中国の人を日本料理に招待することがある。そういう時に「天婦羅は16世紀の秀吉の時代のころ外国から入ったもので語源はポルトガル語の tempero です」とか「「しゃぶしゃぶ」や「すきやき」は1868年の明治維新以後できた料理です」などと説明するわけだが，説明していて若干恥ずかしくなる。というのは，反対に中国側に招待される時には「この料理に関しては唐代の李白の詩にこれこれという風に形容されている」とか「三国志に出てくる曹操が好きだった」とか解説される。教養の差を見せつけられる，ということもあるが，それ以上に年代の古さが一桁違うし，日本料理で出てくるものは元をただせば外国から導入したものばかりなので，

なんとなく残念な気持ちになってしまうのである。「らっきょう」を食べて溜め息が出たのも，日本古来のものだと思っていたものが実は「国産技術」ではなかった，ということをまた一つ発見してしまったからなのである。

中国に来ると感じるのは，日本人が「これは日本独自のすばらしいものだ」と思っているのは，単なる日本人の「自惚れ」であることが多いのではないか，ということだ。15年ほど前，フィリピンのルバング島で，戦後28年間ジャングルに潜伏していた元日本兵の小野田寛郎さんが，発見され救出されるという事件があった。若い冒険家の鈴木則夫さんという人が，一人でジャングルに入っていって小野田さんを捜し出して日本に帰るように説得したのである。この時のエピソードに次のようなものがある。最初，小野田さんは鈴木さんがあまりに現代的な格好をしているので，日本人だとは信じなかった。鈴木さんは，いろいろ日本の事情を説明したが，なかなか信じてもらえなかったので，最後に箸で御飯を食べてみせたそうである。それを見た小野田さんが「うん，これは日本人だ」と納得して，日本に帰ることを承知したそうである。このニュースを聞いた当時は別に不思議に思わなかったが，今考えると妙な話である。箸を使って御飯を食べることが，なぜ日本人であることの証明になるのか。10億の中国人は毎日箸で食事しているし，韓国を始め箸を使うアジアの人々は多い。小野田さんも鈴木さんもニュースを聞いていた我々も，一瞬アジアに人々の存在を忘れてしまっていたのではないか。今でも，ラジオ・ジャパン（ＮＨＫ）の短波放送ではお正月になると「日本では今年は龍の年です」などと放送している。中国でこれを聞いていると「虎の威を借る狐」みたいなので思わず吹き出してしまう。少なくとも「日本を始めアジアのいくつかの国では今年は龍の年です」と言うべきだろう。今書いた「虎の威を借る狐」という言葉も，出典は中国の「戦国策・楚策」である。日本文学を語る時には中国を念頭に置かないわけにはいかない。「日本には四季の区別があり，日本人は季節の移ろいに敏感である。日本の暦では春・夏・秋・冬をさらに細かく分けて，立春，雨水，啓蟄など微妙な季節の変化を二十四節気に分けて表現している」と日本の季節と文学について論じている俳人は，中国に旅行する時はこの話はしない方がいい。二十四節気に分けるのは中国のものだからである。二十四節気で啓蟄の後は，春分，清明と続くが，日本で春分と秋分の彼岸にお墓参りをする習慣は，中国の清明節の先祖を祭る習慣が日本では１つ繰り上がって春分に行われるようになり，後に秋分にも行われるようになったものらしい。中国の人と話をするなら，この辺も考慮して「文化比較論」の話をすればよい。「民族の誇り」を心に抱くのは大変結構なのだが，「日本では古来こういう習慣があります」と得意気に話していると，中国では時として恥を掻くことがある。

天婦羅や「しゃぶしゃぶ」が外来の「文化」だとしたら，日本古来ものは「すし」とか「ぬかみそ」くらいかな，と思えてしまう。これとても，中国のテレビで「内蒙古地方の民族歌謡」が「江差追分」の節回しとそっくりなのを聞かされたりすると「『すし』も原型は朝鮮半島あたりにあるのかなあ」などと自信をなくしてしまう。日本は島国だから１つの国家を形成しているけれども，もし仮に大陸にべったりくっついていたとしたら，「日本」ではなく「東海・大和民族自治区」になっていたかもしれない，などと思ったりもする（「東海」とは［東シナ海］のこと)。

ここまで極端に考えてくると「『日本古来のもの』『日本独自のもの』なんて，なくたっていいじゃないか」と思えてくる。問題は「どこが発祥の地か」「誰が発明したか」ではなく「それをどう活用しているか」なのだ。火薬を発明したのは中国人だが，中国では19世紀にヨーロッパの列強各国に脅かされるまで，それを武器として有効に応用することはできなかった。紙も印刷技術も世界の中では中国が最も歴史が古いが，それを応用して国民全体の教育レベルを高めるのに成功したかといえば，残念ながら中国に対してイエスと言うわけにはいかないだろう。漢字という極めて知的レベルの高い文字を発明したのは中国だが，これを導入して改造して平仮名・片仮名という表音文字を作り出した日本の方が，「子供に文字を教え易い」「外国からの情報を平易に表記できる」などの点でむしろ有利になった。中国は「中国古来のもの」「中国独自のもの」が多すぎるために，新しいものを創ろうという雰囲気に欠け，外来のものを導入するのもあまり熱心ではなかったのである。「古来のもの」「独自のもの」があまり多くなく，外国技術を積極的に導入してこれを改良し消化して自分のものにしていった，というのが日本の特徴である。この特徴は，別に恥ずべきものではない。むしろ，その応用能力の高さは誇るべきものである。「らっきょう」がもともと中国のものだったからといって，がっかりすることはない。その外来の「らっきょう」を完全に「日本の味」にしてしまった合理性や適応力の高さは自慢してもよいのだ。

中国から日本へ行った中国人に日本のラーメンを食べさせると大抵「おいしい」と言って感心する。中国の麺類は，スナックとして食べたり，たくさんおかずを並べておいて御飯と同じ感覚で食べたりすることが多いので，概して味が淡泊であっさりしている。それはそれでおいしいのだが，日本のラーメンの「うまさ」ではない。日本のラーメンは中国の南方の麺類を基本として，日本人の口に合うようにかなり改良されたもので，ほとんど「日本料理」といっても差し支えないものである。その証拠に，北京の日本人駐在員は外人用スーパーマーケットでよく日本のインスタント・ラーメンを買っていく。ちょっと考えればすぐ想像できると思うが，日本の「みそラ

ーメン」「しょうゆラーメン」「バター・ラーメン」のようなものは中国にはない。中国にも「みそ」や「しょうゆ」はあるが，日本のものとは大分味が違う。バター・ラーメンなどはアンパンなどと同じように和洋折衷の完全な日本人の発明である。

よく「日本は他国の「ものまね」ばかりで「独自のもの」がない」と批判される。そのため日本では「独自のもの」を作り出そうと必死に努力する。しかし，中国と日本を比べながら見ているとこう思えてくる。つまり「「独自のもの」自体が貴重なのではない。「独自のもの」を作り出してそれで満足していては何の発展もない。必要なのは，発明されたものをいかに応用し実際に適応させていくかだ。「独自のもの」が重要視されるのは，それを産み出す過程において，多くのヒントやノウハウが得られ，次の段階の発展に結び付く場合が多いからである。発展性のない発明ならば，応用力のある「ものまね」の方が価値がある」というわけだ。「らっきょう」や「しゃぶしゃぶ」や天婦羅が外来のものでもいいじゃないか。これらの外来のものを吸収して新たに再構築したものが日本料理なのだ。そう言って世界に向かって胸を張っていい。「ラーメン」は本場中国を離れて完全に一本立ちしている。

これからは，中国で日本料理の原点を見付けてもがっかりしたりせずに，「我が国ではこれをこういう風に改良している」と胸を張って中国人に説明することにしよう。

（1988年４月15日）

季節のたより　③（1988年４月15日）

＊　今日（15日）の天気予報では北京の最高気温は27度でした。白昼，車に乗っているとクーラーが欲しいくらいです。カナダとかオーストラリアとか大陸性気候のところはどこでもそうでしょうが，北京でも冬からあっと言う間に夏になってしまいます。今週の「季節を表す現象」は，女性のスカート姿が現われ始めたことです。日本にいる方で勘違いされている方もいるかもしれませんが，こちらでも女性はスカートを穿くのですよ。ただ，北京では冬は全くスカート姿がなくなります。底冷えする北京の冬はスカートで過ごすのはちょっと無理ですし，自転車に乗るのが不便だからです。４月になると，気候的な要因がなくなるので，街の女性達の心の中の「おしゃれごころ」が「自転車に乗る不便さ」を押し退けてしまうようになるのです。

＊　13日に全人代が終わりました。14日に早速フィリピンのアキノ大統領が中国を訪れました。訪問する外国要人のリストを見ると，やはり中国は大国だな，と感じます。

＊　今，東単（東四大街と長安街の交差点）の所にある政治スローガンの大きな看板の塗り替え作業が行われています。前は，真っ赤な地に白抜きで「偉大なマルクス・レーニン主義，毛沢東思想万歳！」と書いてあったのですが，これを青や白を使ったカラフルな感じで働く若者の絵を描いて，右上の端の方に「自力更生，刻苦創業，社会主義経済建設をやり遂げよう！」というスローガンを小さく書いたものに変えています。４月になって，街路樹の緑も

萌え始め，太陽の光も強烈になってきているので，街全体がカラフルに明るくなってきた感じになっています。

＊　今回，話題の「101養毛剤」についての新聞広告を入れました。脱毛症でお悩みの方には御同情申し上げますが，最近の「101騒動」はちょっと異常ではないでしょうか。工場で毎日生産される「101」は全て日本の商社筋などによって買い占められて，一般の市場には出回っていません。本来，この薬は25元（約 900円）程度の値段ですが，聞くところによると，日本では10,000円とか15,000円とかのプレミアムが付いているそうです。「101騒動」に伴って，北京では別の養毛剤「大宝（ダーバオ）」もあっと言う間に25元から 195元（約 6,800円）に値段が跳ね上がりました。「ダーバオ」は以前から有名な養毛剤で「101」とは何の関係もありません。街の店では，日本語で「ダーバオ....有名な毛生え薬！」という札をショウケースの中に立てて売っています。よく知らない日本人観光客が「101」だと間違って買って行くこともあるだろうと思います。何れにせよ，この値段の跳ね上がり方は異常です。「101」も「ダーバオ」も毎日工場で生産を続けているのですから，ブームが去れば市場に出回るようになると思います。日本の方々には冷静に対応していただきたいと思います。それにしても，最近の中国では「もうけ仕事だ」というと，すぐ様々なヤカラが暗躍するようになっています。それだけ自由になったのは結構なのですが，コツコツと真面目に働いている労働者がバカを見るようなことにならなければよいがな，と思います。

ダイヤルを回すと中国が聞こえる

中国のテレビはあまり見ない。もちろん１つには中国語がよくわからないからである。毎日確実にテレビを見るのは夜10時前のニュースの中の「国際新聞」（世界のニュース）とそれに引き続く英語ニュースだけである。ニュースのうち国内ニュースは「最近，○○市の製鉄所では生産が順調」とか「河北省の△△県では麦の生産が伸びている」とかいうのが多いので，見ても見なくても大勢に影響はないから見ない。「国際新聞」と英語ニュースでは，世界のニュースとしてアメリカのＡＢＣやイギリスの通信社から配信される映像を使っている。「国際新聞」では映像に中国語のアナウンスをかぶせている。英語ニュースでは原則として音声も配信されたものをそのまま放送する。だからレーガン大統領やサッチャー首相の発言を御本人の声で聞くことができる。中東情勢や韓国の政治の動き，時として日米貿易摩擦の話も出てくるので，これだけは見る価値があると思っている。

一般的に言って，最近の中国のテレビは，以前に比べれば格段に面白くなっている。コマーシャルもだいぶアカ抜けてきた。「黄河」（日本では『大黄河』という名前でやっている NHKとの共同取材番組。編集は独自にやっているので日本のと同じ内容ではない）とか「世界電影之林」（世界の映画の森）とか面白そうな番組もやっている。「サウンド・オブ・ミュージック」もやったし，この間は吉永小白合・高橋英樹の「伊豆の踊り子」をやっていた（もちろん中国語のアテレコ）。でもこれらの番組はほとんど見ていない。

ニュース以外のテレビをほとんど見ないのは，中国の番組の内容や言葉の問題ではなく，個人的な好みが大きいのかもしれない。そう言えば日本にいた時でも，ニュースとプロ野球中継と映画番組以外は，ほとんどテレビは見なかった。

テレビは見ないので，その分ラジオはよく聞く。地理的に日本に近いせいでラジオ・ジャパン（NHKの短波放送）は国内放送と同じくらい明瞭に聞こえる。夏時間の場合だと日本と時差もないので，リアル・タイムの日本語のニュースに関しては国内とあまり差は感じない。「ラジオたんぱ」も比較的よく聞こえる。個人的な好みを言わせてもらえば，「ラジオたんぱ」はもう少し競馬と株以外のことも放送して欲しいと思う。英語の番組はいろいろな国のものが聞こえる。ラジオ・ジャパンと同様によく聞こえるのはラジオ・オーストラリアとモスクワ放送である。それぞれの国にはそれぞれ事情があるのだろうが，モスクワ放送は放送している周波数帯の数が多いか

らか，こちらでラジオ・ジャパンとくっつき，あちらでＶＯＡ（ボイス・オブ・アメリカ）と仲良くしている。この間まで，16mバンドの昼間の放送時間帯では 17.835MHz＝ラジオ・ジャパン，17.840MHz＝モスクワ放送，17.845MHz＝ラジオ・ジャパンという５KHz 刻みのサンドイッチをやっていた。お互いにどういう意図があるのかは知らないが，普通の短波ラジオでは5KHzを弁別するのは不可能に近い。49mバンドの夜の放送では，5.990MHzのラジオ・ジャパンが，最近，香港の中継所からの放送を始めたＢＢＣの5.995MHzに追い出されて別の周波数に移った。電波をいろいろ追っていると，各国の「せめぎあい」がよくわかって面白い。

極東地域は政治的にかなり複雑なので，電波の世界でも「せめぎあい」は熾烈である。いくつもの周波数で「ザーッ」という妨害電波が飛びかっている。いろいろな事情があるから，中国からもこの「ザーッ」は発信されている。しかし，少なくとも日本の放送に対しては，こういう妨害や自国の放送を相手国の放送のすぐ近くに持って来てわざと混信させようというような「イヤミ」はやっていない。別に全ての周波数についてサーベイしたわけではないから詳しいことはわからないが，ＢＢＣやＶＯＡ，ラジオ・オーストラリア，モスクワ放送が北京で聞こえるのだから，中国の「ザーッ」の対象はごく限られているのだろうと思う。

日本の放送に対する「イヤミ」が全くない，というのは北京にいる日本人にとってはありがたいことだ。中国は平原地帯が広くて障害物が少ないから，隣の河北省とかその向こうの山東省とかの中波のラジオもよく聞こえる。従って，中波でもいろいろな周波数で中国の各地方の放送局の電波が沢山きこえる。実は，他の海外にいる方には申し分けないのだが，これらの地方局の隙間から日本の中波放送も聞こえてくるのである。福岡のものが聞こえるし，電波の状況がよければ大阪のＮＨＫ第一が入ることもある。中波が入るとプロ野球のナイターがナマで聞けるのでありがたい。お陰で，幸か不幸か，昨年９月には，江川投手から広島の小早川選手が打った例の「逆転サヨナラ・ホームラン！」もナマで聞いてしまったのである。雑音も多いし，日が完全に暮れないとよく聞こえないので，６月ころは９時以後でないとダメだが，他の国にいる方は羨ましく思うかもしれない。考えてみれば，この北京から東南へ百数十km行けば渤海湾で，その向こうに九州があるのだから，聞こえるのが当然と言えば当然かもしれない。

詳しくは知らないが，何年か前までは，中国でも日本の放送に対して妨害電波を出していたらしい。対外開放政策をとるようになってから，次第にそれまでの鎖国的政策を解除して，電波の分野でも徐々に世界に窓を開いてきているのである。だからナイターを聞けるというのも，中国の開放政策の賜物なのだ。1986年暮れの学生デモ騒ぎの時，学生達は「我々はＢＢＣやＶＯＡで

他の都市の学生の動きを知った。中国のラジオ・テレビで報道しないのはおかしい」と抗議していた。外国語を勉強している青年達は，勉強のために外国の放送を聞いているのだ。

さらに，今年になってちょっとびっくりしたのは，短波ラジオのダイヤルを回していて「This is Voice of Free China from Taipei, Republic of China」という放送が聞こえてきたことである。昨年まではダイヤルをどこに回しても台北からの放送は聞こえなかった。昨年来の台湾と大陸との間の人的交流の緩和の動きに対応して，今年になって規制が緩和されたのかもしれない。内容は一般的なニュースなどあまり差し障りのないものだったが，周波数の紹介の後で「中華民国」の「国歌」を放送するのには参った。さすがに周囲を気にしてボリュームを下げたが，こういう「国歌」を北京でも聞けるということに一種の感慨を覚えた。今年１月に台北の国民党の蔣経国氏が亡くなった時には，台北からのニュースを直接聞くことができた。10年経てば香港もマカオも返ってくる（香港は1997年，マカオは1999年）。台湾にいる人の里帰りも活発になっている。現在の中国の指導部は「少しくらい外から情報が入っただけでは我々の社会はびくともしない」という自信を持ってきているに違いない。中国を取り巻く情勢は確実に変化してきている。

ところが，日本，特に東京にいると，極東地域の国際的な動きを肌で感じるのはなかなか難しい。欧米から入っていくる情報量の方が圧倒的に多いからだと思うが，周辺国の情報を満載した電波は，各国の様々な思惑を載せて，東京にいる人達の頭の上にも飛びかっているのだ。東京はラジオ局の数が多いし，日本の中央に近いので日本の各地からの放送もよく入るから，外国の放送が入り込む隙間はあまり大きくない。また，地図を見ればわかるとおり，東京は，日本列島の中でもユーラシア大陸から最も遠い地域に位置しているので，日本の中でも大陸からのラジオの電波が最も聞こえにくい地域の一つである。日本国内でも，日本海側や九州へ行けば大陸の放送がよく聞こえるし，稚内へ行けばソ連の国内放送が日本の放送と同じように聞こえる。東京にいると，自分が複雑な極東地域の国際情勢のただ中にいることを忘れてしまうのである。

北京では，夜中になって中国の国内向け放送が終了すると，日本の深夜放送だけが取り残されて，よりはっきり聞こえるようになる。「シカ，シカ，シカと十回言ってごらん。」「シカ，シカ，シカ……」「じゃ，サンタ・クロースが乗ってるのは何？」「カモシカでしょ。」「ちがうね！トナカイだよ」。こんな話がどんどん聞こえてくる（この話がよくわからない人は，お近くの「新人類」に聞いて下さい）。ラジオの深夜放送に出ている人達は，自分達の話を大陸の何億もの人達が聞いているかもしれない，とは全く認識していないだろう。何をお話になっても結構なのだが，話の中身が「お隣さん」の国々に筒抜けになっていることを，ゆめゆめ忘れないよ

うに願いたいものだ。

今こちらでは，日本の歌に中国語の歌詞を付けたものが結構はやっていて，時々ラジオでも放送している。日本にいる方々も，ラジオでナイターを聞いていて自分のひいきチームが負けたような日は，ちょっとダイヤルを回してラジオに耳を傾けてもらいたい。運がよければ「みちづれ」や「別れても好きな人」の中国語バージョンが聞けるかもしれない。

（1988年4月22日）

季節のたより　④（1988年4月22日）

＊　今週はほとんど毎日黄砂が吹すさび部屋の中がザラザラになってしまいました。20日の水曜日は「穀雨」でした。「これから雨が多くなって，穀物の種を蒔くのにいい時期だ」という意味です。4月の後半の時点で「これから雨が多くなって」というのは日本ではちょっとピンときませんが，中国の河北平原地帯では，黄砂の風が終わって海の方から風が吹き始めると，雷が発生しやすくなり，本当に雨が多くなります。手元にある日めくりカレンダーには「雨生百穀」（雨，百穀を生ず）とか「穀雨前后，種瓜点豆」（穀雨の前後には，瓜を植え豆を蒔く」とかいう言葉が載っています。後の方のを併音（発音記号）で書くと“gu yu qian hou，zhong guadian dou”となりますが，各句の後半の下線部分がちゃんと韻を踏んでいる（母音を合わせている）のです。この辺の言葉による音楽性は日本語ではマネのできないところです。もっとも，これがあるために，中国では，内容よりも言葉の調子や美しさにばかり神経を使う「形式主義」がはびこってしまう傾向があるのですが。

＊　「よもやま話」に書いたラジオ放送に関して，今週は1つニュースがあります。21日（木）から中央広播電台（中央ラジオ局）が，夜の7:40からの1時間，毎週木曜日に「アメリカン・ミュージック・アワー」を始めたのです。アメリカの会社が中央ラジオ局と提携して番組を作っているそうで，マイケル・ジャクソンの歌もラジオ初登場でした。番組の進行は英語と中国語のちゃんぽんで，ライオネル・リッチやヒューイ・ルイスは自分で番組へのメッセージを言っていました。何より斬新なのは，この番組がスポンサー付きだ，ということです。今までも中国のラジオでもコマーシャルはありましたが，大抵，時報の前などに，「ただ今から広告を放送します」とアナウンスがあってから5分間位いくつかの工場や公司の広告をまとめて放送する形式でした。ところがこの番組では，番組の途中で「アメリカン・ミュジック・アワーは続きます」とアナウンスがあり，その後にコマーシャルが挿入されるのです。英字紙のチャイナ・ディリーによれば，これはスポンサーが本当に番組のためのお金を「提供」しているのだそうです（1分間5,000ドル）。21日のスポンサーは「西北航空公司」（ノースウェスト航空）と「建国飯店」（北京市内の合弁ホテル）でした。（テレビでは既にこの形式の番組はある。例えば「体育縦横」（スポーツ・ワールド）はＮＥＣの提供である。ただテレビの場合も，コマーシャルは番組の始めと終わりに放送し，番組の途中に挿入することはしないのが普通である。）

それより，びっくりしたのは，この番組の冒頭にレーガン大統領からの肉声のメッセージがあったことです。こう言っては何ですが，たかがラジオの音楽番組に合衆国大統領が登場して「この番組は両国国民の文化交流促進のために有意義であり……」などと演説するのは，いかにも大仰な感じがします。形式を重んじる中国ならでは，というところでしょうか。いずれにしても，中国の中央放送局のゴールデン・アワーに割り込んで番組を作り，大統領からメッセージをもらうこともやってのけたアメリカ式ビジネ6のバイタリティーには舌を巻きます。（この番組のアメリカ側のパートナーはChinamericaというサンタ・モニカの会

社だそうです）。

なお，１時間のこの番組が終わった後に続いた番組は，私の予想していた通り「京劇の音楽」でした。「「アメリカ」をあまり長く続けて，純朴な人民が西洋の色に染まってはいかん」という発想は健在なようです。

街角の親切

春になると北京にも旅行者が多くなる。荒涼とした万里の長城よりも，やはり緑の生い繁る大地の方が気分がいい。日本から観光旅行で来る人も当然多くなるが，北京事務所のある竹園賓館は日本の旅行社と提携しているメジャーなホテルではないので，団体客は来ない。ここに来る日本人客は，ホテルの予約なしで北京に来たが他のホテル全てに断られて途方に暮れてやってくるような個人客が多い。特に，できるだけ経費を節約しようとする大学生がよく来る。大学生の個人旅行者は，事前にあまり綿密に計画を立てずに，行き当たりばったりで旅行しているケースが多く，これらの中には中国語はおろか英語も得意でない人達もいる。彼らは身振り手振りと筆談で竹園賓館のフロントと悪戦苦闘するわけだが，フロント係の手に負えなくなってくると事務所に電話が掛かってくる。「日本の客人が来ているが，中国語も英語もよく通じないので恐縮だが助けてくれないか」というわけである。日頃お世話になっているフロント係だし，我が同胞が困っているのだからやむを得ない。仕事中でも，来客中でない限り，のこのこフロントへ出掛けていく。

仕事中だから，と断ってもいいのだが，昨年，日本人の客から「お腹が痛くて我慢できない。どこか病院を知らないか。」と聞かれたことがあった。この時は，通訳の王龍安さんがいたので，近くの病院まで一緒に行ってもらった。こういうのは放っては置けないので，フロントから「ちょっと来てくれ」と言われると一応顔は出す。顔は出すが，大抵はちょっと英語が話せればすぐ通じるような問題で揉めている場合が多い。明日の朝タクシーを頼みたくて，10時の飛行機に乗るのに何時にホテルを出たらいいか聞きたいのだが，これがフロント係に通じない，という場合もある。この前フロントへ行ったら，１人旅だという日本の女子大生がリュックを背負って立っていた。この女子大生は，上海で見知らぬ若い人に「困っているので，お金を交換して欲しい」と頼まれて，日本円で数万円相当の外貨兌換券を人民幣に替えたが，このホテルでは人民幣では支払いができないので困っている，とのことだった。悪い連中に騙されたらしい。日本に帰るまでの必要経費は残っているらしかった。よく聞いてみると，要するに彼女が聞きたかったのは，お土産を沢山買いたいのだが，人民幣で買えるお店を知らないか，ということだったのだ。ホテル代も旅費もなくなって困っているのかと心配していたこちらは拍子抜けしてしまった。自分が騙されてお金を換えてしまったのに，全然臆するところがない。のんきというべきか，ずうずう

しいというべきか。用件が済むと，今度はこちらに「中国は面白い物が多くて，お土産をいっぱい買いたい。手に持てなくなりそうなんだけど，どうしたらいいでしょうか？」と聞いてきた。こういう無邪気な質問をされると答えに窮する。こういう人に対しては，「『お土産』とは，日本に居住する者に寄贈される物品のうちその者の個人的な使用に供されると認められるものをいう。手で持てない程の大量の物品は，『お土産』ではなく『商業量に達する貨物』とみなされ，通常の輸入貨物と同様の手続が必要になる。」などと説明してもしょうがないので，「家まで持って帰ることも考えて買い物してください。じゅうたんや陶器等は，お店で日本までの運送を請け負ってくれるところもあるので相談したらいかがですか？」と答えることにしている。

学生達が，無邪気な好奇心と若い行動力で１人旅をするのは大いに結構なのだが，そこにはそれなりのリスクもあるということは認識すべきである。中国はかなり治安のよい国だが，それでも最近は，マネー・チェンジを要求されたとか，観光地を親切に案内した後で法外なガイド料を請求されたとかいう話はよく耳にする。夜のニューヨークの１人歩きほどではないにしても，それなりの用心は必要である。この点は，香港からの旅行客はよく心得ていて，パスポートや持ち金はベルト式のマネー・ポケットに入れてしっかりと腰の所に繰り付けてスリに備えている。日本人にはこれだけ用心している人はほとんどいない。香港人か日本人かを区別するのに，腰にマネー・ベルトをしているかどうかで判断できるくらいである。

上海以南の大都市は最近大分治安が悪くなってきたという話を聞くが，北京はまだそれほどでもない。昨年聞いた２人組の女子大生の話にこういうのがあった。彼女らは上海から北京まで17時間かけて列車で来たそうだが，列車のコンパートメントで中国人と知り合った。いろいろ話しているうちに打ち解けてきて，この中国人は「どうです。北京で特に予定がないのなら，市内を案内してあげますよ。私は仕事でちょっと抜けられないから，弟に案内させますよ。」と申し出た。北京に着いた翌日，この２人組の女子大生は顔も知らない「弟」という人に１日中北京市内を案内してもらったそうである。他の国ならちょっと危険な感じがするが，この列車で会った中国人もその弟も，本当に親切心で案内してくれたのだそうである。一度打ち解けて仲よくなると徹底的に親切にしてくれる。これが中国人なのである。この２人組の女子大生らは初めての外国旅行だったらしいが，最初の行き先が中国で本当によかった。他の国で，見知らぬ男に観光案内を頼んだらどうなったことやら。人の親切心に頼るのもよいが，それに甘えてはならない。

中国では，数千年来，多数民族の漢民族と周辺地域の各民族との抗争が繰り返し行われてきた。唐が崩壊した後，ここ北京を支配した王朝は，遼（契丹： 907年～1125年），金（1125年～1235

年），元（1235年～1368年），明（1368年～1644年），清（1644年～1911年）だが，このうち漢民族の王朝は明だけである（遼＝契丹族，金＝満州族，元＝モンゴル族，明＝漢族，清＝満州族）。王朝の交替の度ごとに，各民族の支配・被支配関係が入れ替わった。こうした厳しい歴史的環境の中を生き抜くことを通して，中国の人たちは「他人に甘えてはならない。同族同士は固く結束しなければならない」という人生訓を身に付けていった。だから，今でも全然知らない人にはあまり親切ではないが，一度仲間として認められれば極めて面倒見がよくなる。中国人は，日本人のように「他人も自分に対してある程度親切であるべきだ」という「甘え」は持っていない。異民族の「親切」に期待していたのでは，中国では生きて行けなかったのである。知らない街で知らない人に道を聞いた時「そんなこと知らない。あっちへ行って聞け」と言われたら，日本人なら「もっと親切に教えてくれたっていいじゃないの！」と怒り出すだろうが，これは一種の「甘え」なのである。中国人は「甘え」を持っていない代わりに「自分も見知らぬ他人に対しては親切にしてやる必要性はない。自分が親切にしてやりたい人にだけ親切にすればよい」と考えている。だから，中国人から親切にされたら，それは「お義理」で親切にしたのではなく，本心から出た親切である。「この程度の親切は当然だ。外交辞令だろう」などとタカを繰くっていると，相手の中国人の衷心からの親切心を無にすることになる。2人組の女子大生が列車で会った中国人や市内を案内してくれたその弟は，別に見返りを期待していたのではなく，本心から親切にしてくれたのだろう。

また，ある日，北京の街でこういう光景を見掛けた。ある人が乗っていた自転車のチェーンが外れたので歩道に腰を降ろしてこれを直していた。そこへ通り掛かりのおじさんがやってきて，立ち止まってそれを眺め始めた。そのうちおじさんは「いや，そこはこう引っ掛けた方がいい。」などと口を挟み出した。「ああしなさい，こうしなさい」といろいろ口を出して，最後には「じゃ，あんたは自転車を押さえてなさい。私がチェーンを掛けるから」と言って自分でチェーンを掛け直してやった。これが終わると，自転車の人は無言のまま立ち上がり，ズボンの裾の埃を手ではたいて，自転車に乗ってすうっと行ってしまった。おじさんの方も何事もなかったように，元のように歩道を歩き始めた。この間「こんにちは」「さようなら」の挨拶も「ありがとう」「どういたしまして」の言葉も全くなかった。自転車の人の方は「別に手伝ってくれと頼んだわけじゃない」と考えているのだろう。手伝ったおじさんの方も「別に『ありがとう』と言って貰いたくて手伝ったわけではない。ただ他人が困っているようなので助けてあげただけなのだ」と思っているのだろう。両方ともサッパリしたものである。こういう風景は北京の街で見ると，至

極当然のように感じられる。心の籠もっていない「いたわり」や，お義理だけの「ありがとう」の言葉よりも，こういう行きずりのぶっきらぼうな親切の方が，なんとなく自然な感じがする。

中国の人には，日本人にはない強さと自立心がある。このため日本人にとっては，慣れないとちょっと横柄な感じを受ける場合がある。しかし，これは大陸の厳しい自然と歴史的な抗争に揉まれて培われた大陸的な気質なのである。この辺は，シルク・ロードを通じて交渉の歴史をもつヨーロッパ人との共通点があるような気がする。

（1988年5月6日）

［ことばメモ］

中国語の「親切（qīnqiè）」は，［親しみのある，真心のある］という意味の形容詞で「親切的話」は［心の篭もった言葉］という意味である。また「親切感」は日本語の［親近感］に当たる。日本語の［親切（しんせつ）］を表現するなら中国語では「好意（hǎoyì）」を使う方が適切な場合が多い。

季節のたより　⑤（1988年5月6日）

＊　4月の最終週，柳絮（やなぎのわた）が舞いました。柳絮が終わると北京はいっぺんに夏になってしまいます。ただ，まだ空気が乾燥しているので，気温のわりにはさっぱりしています。竹園賓館のレストランでも，テーブルを屋外に出して庭園の緑を見ながら食事をする「太陽餐庁」が似合う季節になりました。6月になると，日なたでは暑すぎてクーラーの入った屋内に戻りたくなりますから，5月の1か月だけが「太陽餐庁」の季節です。

＊　先日，外国企業服務公司の紹介で，映画「ラスト・エンペラー」の試写会へ行ってきました。前に日本公開版の「ラスト・エンペラー」も見る機会があったので，どの部分をカットしたかがわかって興味深い試写会でした。実はカットした場面というのはほとんどなく，中国での試写会のものは，溥儀と皇后と第2夫人とが3人でベッドで戯れるシーンの「さわりの部分」がカットされていただけでした。裸がモロに見えるわけでもなく，大したことないシーンなんですが，現時点での中国ではあれが限界なんでしょう。一方，日本公開版の方は，話題になった南京大虐殺のシーンはカットされていませんでしたが，その直後に出てくる「満州国」が組織的にアヘンを売っているようなシーンがカットされていたような気がします（私の記憶違いかもしれません）。この2つの点以外は（当然ですが）日本公開版と中国試写会版は全く同じでした。映画の中で，満州国皇帝の溥儀が「総理大臣はどうした？」と聞くと，国防大臣が「共産党員に暗殺されました」と答える場面があります。この時は，場内がちょっとざわつきました。また，後半の文化大革命のシーンで紅衛兵たちが毛主席の肖像を先頭に「革命無罪，造反有理」と中国語でシュプレヒコールを繰り返す場面がありますが，ここでは観客席からヤンヤの喝采が湧き起こりました。「文化大革命」を批判した中国映画は沢山ありますが，やはりどこか共産党に対する「遠慮」があります。この「ラスト・エンペラー」では，何の遠慮もなくバサッと「文化大革命」を描いているので，中国人の観客は痛快に思ったのでしょう。

「ラスト・エンペラー」は，現在中国でも一般公開すべきかどうか「しかるべき機関」で審議中なのだそうです。しかし，北京で試写会が行われたのですから，遠からず一般公開に

なるでしょう。アカデミー賞を沢山受賞して中国の新聞紙上でも随分話題になりましたから，公開しなかったら一般市民から批判の声が上がるでしょう。

この「ラスト・エンペラー」は，先の全国人民代表大会で「重要文物保護単位（国宝）である故宮をあまりにも安易にロケに使わせている」としてかなり批判を浴びていました。故宮の建物はよくロケに使用されますが，建物の内部は使わせないのが普通です。しかし，「ラスト・エンペラー」では，皇帝の居所であった乾清宮の本物の玉座に俳優を座らせて撮影しています。これは異例のことで，今後は本物の玉座を使った撮影は永久に行われないかもしれません。その意味でこの「ラスト・エンペラー」は貴重な映画です。全人代で代表（議員）に追及された文化部の副部長（この副部長も実は映画にチョイ役で出演しているのだそうです）は，「撮影を許可したのは『北京市文物保護条例』ができる前だったし，イタリア共産党から中国共産党へ『よろしく御配慮をお願いしたい』という依頼状も来ていた。それにこの映画自体，我が国の歴史を世界に紹介するという点で有意義であると判断してロケを許可したのだ。」と苦しい答弁をしていました。いずれにせよ，撮影当時，中国当局が全面的に撮影に協力してのは事実です。いまさら一般公開しないというわけにはいかないでしょう。今回，試写会を行ったのも，一部の人に見てもらって反応を見たかったのだろうと思います。

さて，映画の内容ですが，現在も北京に在住している愛新覚羅溥傑氏（溥儀の弟）は「必ずしも兄の生涯を正確に表していない」とコメントしているそうです。歴史研究家の間でも「1924年以降，映画では溥儀が天津でプレーボーイのような生活をしていたと描かれているがこれは誤りだ。当時彼は経済的にそんなに自由ではなかった。」と批評する人もいます。細かく見ると「午門のすぐ外で一般市民が自転車に乗ったり子供が遊んだりしているのはおかしい。午門のすぐ外はまだ濠の中で紫禁城の内部である」とか「午門（紫禁城の南門）から入った人がすぐ次の場面で大和殿を北側から登っていくのはおかしい」とかいろいろ奇妙な場面が沢山あるのですが，　故宮をよく知らない人は気が付かないわけですから，細かいことをいうのは「重箱の隅をつっつく」類のことでしょう。むしろ，ヨーロッパ人の監督が作ったにしては，史実に忠実だ，というべきでしょう。（もっとも，それでも，溥儀が日本の敗戦の時，玉音放送のあった日（8月15日）に新京（今の長春）でソ連軍に捕らえられたように描かれていますがこれは史実と違います。溥儀が捕らえられたのは翌日の8月16日で場所も奉天（今の瀋陽）です。（こんな細かいことを気にしていたら映画なんて作れないわけですが。））

＊　日本映画「敦皇」（佐藤純弥監督）は，日本では「文部省選定」だそうですから，カットするのしないのという問題は生じないでしょう。6月25日，日本と中国で同時に一斉に封切られる予定です。外国映画としては珍しく人民日報にスチール写真入りの広告が出ていました。

＊　5月5日の昼間には中国・日本・ネパール3国共同登頂隊によるチョモランマ（エベレスト）山頂からのテレビの「現場直播」（生中継）をやりました。午後12時過ぎから5時頃までぶっ続けての生放送は中国のテレビでは珍しいことです。今回のアタックは，かなりお金を掛けたもののようで「金持ち日本の危険なお遊び」など批判が出るのではないかと心配していたのですが，中国のテレビ・新聞は，「史上空前の快挙！」と讃えていたので安心しました。中央テレビも人民日報もトップ扱いでした。ただし，中国側のアタック隊の中にチベット族の人がいたので，生中継の途中でチベット自治区人民政府代表のメッセージを放送するなど若干政治的なにおいも感じました。

日中の歴史について振り返る

中国が制作した「戦争もの」のテレビ・ドラマや映画には，当然だけれども日本軍が出てくる。時々，日本軍の将校が日本語でしゃべり画面に中国語の字幕が出たりする。ちょうど「コンバット」の中でドイツ兵がドイツ語をしゃべって英語の字幕が出るのと同じである。映画の中では，中国の住民は日本軍のことを「日本鬼子（リーベン・グィヅ）」と言ったりしている。50年前，この地では日本は「日本鬼子」だったのである。そのことをこちらの人は決して忘れてはいないはずである。しかし，だからといって中国の人は今の日本に対して反感や毛嫌いする感じを持っていないように思える。日本で作られたものを，何のこだわりもなく受け入れている。商品の宣伝文句の中でで「日式（日本式の）革靴」とか「日本の〇〇堂が技術指導した化粧品」とかいう言葉がプラスのイメージとしてよく使われている。昔の日本と今の日本は同じじゃない，と思っているのかもしれない。それより，過去の出来事は厳然たる事実で決して消すことはできないが，これから我々は何ができるか，何をすべきかを考えるべきだ，と考えているのかも知れない。「中国の経済発展のためには日本との関係が不可欠である。我々が必要なものはどしどし日本から取り入れる。しかし，何を日本から取り入れて何を取り入れないかは，これまで我々が自分の判断で決めてきたし，これからも自分の判断で取捨選択していくだろう。」こういう自信があるから，中国ではあまり反日運動が起きないのかもしれない。

前に雲南省に行った時に，昆明の街の本屋に松田聖子の自伝の中国語の訳本が出ているのを見てびっくりしたことがある。北京でも街の床屋に行くと大抵「少年隊」の写真が張ってある。王府井の外文書店（外国語の書籍専門店）の外国雑誌のコーナーでは「TIME」や「News Week 」と一緒に「ドレスメーキング」を売っている。政治とか経済とか大上段に構えたところでなく，極めて庶民的な分野で「日本」は抵抗感なく受け入れられているのである。「日本の軍国主義」と「日本」とは同じものではない，というわけだろう。こういうドライな考え方があるので，現在中国に住んでいる日本人は不快な思いをしないで済んでいる。これありがたいと思わねばならないだろう。

日本で生活していると，中国は「隣にある外国の１つ」でしかないが，中国で生活していると日本はただの隣国以上の大きな影のような影響力を感じる。日本で感じるアメリカの影響力とはまた異質なのだが，諸外国の中では日本が一番浸透力を持っているのではないだろうか。床屋の

「少年隊」や「ドレメ」雑誌などファッションに関する分野では，やはり顔形が似ているので白人のモデルよりも親近感があるに違いない。しかし，中国にいて日本の「影」をひしひしと感じるのは人種的な近さもさることながら，根本的には近代の中国の歴史において日本が決定的な役割を果たしてきたことが関係していると考えられる。

「日本と中国との歴史的な関係」というと日本では漢字その他の大陸文化の伝来や遣唐使を思い浮かべるだろうが，中国の人から見れば必ずしもそういうイメージはない。古来，中国の文字や文化を学んだのは日本だけではなく，中国の周辺にいる異民族は全てそうだったのだ。日本はたくさんある周辺異民族国家の１つに過ぎない。ただし，これは，昔の中国人が日本人のことを「夷狄」として蔑み無視してきたことを意味するわけではない。８世紀に遣唐使として中国に来た阿部仲麻呂は当時の中国の文化人達と交友を結んだが，彼の帰国に際して，詩人の王維は「秘書晁監（仲麻呂のこと）の日本国に還るを送る」という詩を送っている。また，仲麻呂が暴風雨にあって遭難したと聞いた時（結局，ベトナムに漂着し長安に戻った。この後，仲麻呂は日本に還ることなく長安で死去した），李白は仲麻呂は死んだのだと思い「晁卿衡を哭す」という詩を作ってこれを悼んでいる（なお，仲麻呂の有名な歌「天の原　ふりさけみれば　春日なる　三笠の山に　出でし月かも」は帰国の船出の時読まれたものといわれている）。このように，昔から，中国の人達は日本人を友人として遇してくれる風潮はあったわけである。

しかし，王維や李白の詩があるからといって，現代の中国人が阿部仲麻呂をよく知っているわけではない。阿部仲麻呂どころか，豊臣秀吉や徳川家康も知らない人がほとんどである。明治維新以前の日本の歴史や日本と中国との関係については，はっきりいって中国の人はほとんど知らない。それは，江戸時代以前には中国が日本に影響を及ぼすことはあっても，日本が中国の社会に影響を与えることはあまりなかったからである。（全くなかったわけではない。例えば，明の万暦帝の頃，豊臣秀吉が朝鮮出兵を行った。明はこの時李氏朝鮮の求めに応じて救援軍を派遣して日本と戦ったが，これが明の国力を消耗させその崩壊を早めた，といわれている）。中国の人が日本の封建時代の歴史を知らないのはしかたないのかもしれない。日本人だって朝鮮やインドネシア等近隣諸国の歴史をほとんど知らないのだから。

「日本と中国との歴史的な関係」は，中国にとっては日本の明治維新以後が決定的に重要な意味を持つ。日本にいると，原爆やマッカーサーのイメージが強いから「日本はアメリカと戦争して負けた」とう感じが強いが，明治維新以後の日本の戦争は大部分が朝鮮半島と中国で行われたといっても過言ではないのである。日清戦争は朝鮮における権益を巡る中国との戦争だし，日露

戦争も日本がロシアに攻め入ったわけではない。二〇三高地はロシアにあるのではなく遼東半島にあるのである。

日本は中国に対して，プラスの面も含めて様々な役割を果たした。明治維新とその後の日本の発展は中国の青年に希望を与えたことは事実だし，日本はヨーロッパ文化を吸収する窓口の役目も果たした。例えば医学用語の「神経」は日中共通だが，これは杉田玄白が「解体新書」の中で初めて使ったオランダ語「 zenuw」の訳語である。また，「革命」「経済」「共和国」等の言葉はいずれももともとの出典は中国の古典だが，これらを「revolution」「 economy」「republic」の訳語として近代的な意味で使い始めたことにはかなり日本人も係わっていたらしい。中国の近代化に尽くした指導者たちで，日本に留学したことのある人も多い。孫文や魯迅も日本で学んだ。1972年の日中国交正常化に際してのエピソードにこういうのがある。田中総理が毛沢東主席と会談した時，毛主席から「日本の当用漢字はいくつありますか？」と質問された。田中総理が答えに窮していると，同席していた周恩来総理が脇から「1850字です」と答えたそうである。周恩来総理も早稲田の聴講生だったことがあったのである。そして，結論的に言えば，戦争と革命の歴史の中で，日本の軍国主義は打倒すべき「日本鬼子」として重要な役割を果たしたのである。

解放後，1972年まで日中間はあまり交渉のない時期を経験した。今考えるとこれはやはり不自然なことで，日中両国は密接に関係することが自然なのであり，その地理的・社会的状況からまたそうせざるを得ないと言えるだろう。現在の開放・改革経済体制の下の中国は，日本の経済発展の経過に注目している。「経営の神様：土光敏夫について」などという新聞の連載記事もよく見掛ける。ただ，何となく感じるのは，中国が日本に注目している割には日本が中国に注目していないのではないか，という点である。日本は自分が思っている以上に中国に対する影響力を持っていることを自覚すべきである。

日中関係がどうなるかは，日本自身の今後と中国自身の今後に共に大きな影響力をもっている。「抗日戦争」の期間の1938年（昭和13年）に述べられた毛沢東の言葉を「毛沢東語録」の中から引用してみよう。

「革命戦争は抗毒素である。それは敵の毒焔を除くばかりでなく，自分の汚れをも洗いきよめるだろう。およそ正義の革命戦争は，その力が極めて大きく，多くの事物を改造できる。あるいは事物を改造するために道をきりひらく。中日戦争は中日両国を改造するだろう。中国が抗戦を堅持し，統一戦線を堅持しさえすれば，かならずや旧日本を新日本にかえ，旧中国を新中国にかえることができる。中日両国の人間と物は，この戦中と戦後をつうじて改造を獲得する

だろう。」（『持久戦論』1938年5月）

結局は，こういう大局的な見地が大切なのである。

（1988年5月13日）

季節のたより　⑥（1988年5月13日）

＊　まさに風薫る5月。大陸性の乾燥した空気は肌に心地よく感じます。毎日，満員電車で汗を流し「早くクーラーを入れりゃいいのに」とイライラを募らせている皆様に御同情申し上げます。

＊　さて，当地の新聞報道によりますと，5月15日から北京市では，豚肉，鶏卵，一般野菜及び砂糖が「定量配給制」になることになったそうです。どういう制度かイマイチはっきりしません。豚肉はすでに今年1月から配給制が復活していますが，これまでの配給制は，配給切符がなくても2割増しくらいのお金を払えば購入できるものでした。それが，どうも，食堂で食事する場合も含めて配給切符がないと入手できなくなるらしいのです。これだけ世の中が開放的になって，経済的にも順調に発展しているように見えますが，やはりいろいろ問題はあるようです。まさか外国人たる我々の生活まで影響してくるとは思えませんが，ちょっと憂鬱にさせるニュースです。

＊　5月10日から国際郵便料金が値上げになりました（国内料金は据え置き）。為替レートの変動に対応するためだそうです。元の対ドル・レートは変わっていないのですから，中国にいるアメリカ人にとっては気の毒な話です。それにしても，いつものことですが，まったく予告なし，しかも一気に55%という大幅値上げには参ります。まさに中華包丁で骨付き肉をバッサリ切る感じです。何も知らずに郵便局へいったら張り紙がしてありました。新聞に「来月から値上げする」とでも広告をだせばいいのに（見落としたのかなあ？）

＊　5月13日に奥野国土庁長官が「日中戦争に関する発言の責任を取って」お辞めになりました。発言自体に対する論評は控えますが，素直な感想は「ええっ，辞めちゃったの！？」というところです。別に人民日報は「奥野発言反対キャンペーン」をやったわけでもないし，テレビのニュースでは全然耳にしませんでした。（これと違って，いわゆる「光華寮問題」の時は，法律学者の論文を掲載するなど，かなり大掛かりな特集記事を組んだりしていました）。あの種の発言があったら，人民日報としては，取り上げて記事にし，論評を加えるのは当然でしょう。記事にしなかったとしたら，人民日報は中国の読者に対して責務を果たさなかったことになります。人民日報が最初に取り上げた日の紙面の別の一角には「奈良・シルクロード博を見て」という囲み記事が，奥野発言を伝える記事よりも大きな面積を占めていました。日本では「外交問題に発展した」と報道されていますが，今回の問題は，国際的な問題ではなく，「戦争に対してそういう認識を持っていることは正しいのかどうか」「国務大臣としての認識として適当なのかどうか」という日本の政治的な国内問題なのです。もし，今回の問題で日本国内に「中国に辞めさせられた」とか「中国は日本の内政に干渉した」とかいう認識が広まるのだとしたら，中国としてはいい迷惑でしょう。

北京の子供たち

北京に日本から出張で来る人の中に，ときどき「北京では子供たちの姿を見掛けませんねえ。やっぱり，１人っ子政策の影響でしょうかねえ」などと真剣な顔で話す人がいる。こういう人は，お仕事も観光も大変まじめにやるので，会議や中国側との交渉もみっちりやって，仕事が片付いた後も，天安門広場や故宮を見学したり，友誼商店（外国人用デパート）で買い物をしたり，目いっぱいのスケジュールで行動する。日曜日になれば北京市内を出て郊外の万里の長城や明の十三陵を見に出掛ける。移動するときは，自動車に乗って時間を気にしながらパーッと大通りを走り抜ける。はっきり言って，これでは子供たちに会うチャンスがないのは当たり前である。子供たちだって，平日の昼間は学校があるんだし，車がびゅんびゅん通る３車線の長安街や第２環状路の道端で排気ガスの中で遊んでいるわけではない。ちょっと車を降りて，大通りからそこいらの胡同（路地）にちょっと入れば，子供たちが，なわとびをしたりチョークで落書をしたりして遊んでいるどこの国でも同じように見られる光景が目に入るはずだ。

１人っ子政策を採っているとはいっても，子供の数が目に見えて少ないのがわかるほどではない。外で遊ぶ年齢の子供（３歳～12歳）の人口比率を見ても，日本が14.5％であるのに対し中国は19.8％である（ともに1985年）。これは農村部も含めた数字だが，北京の子供の割合が，これと大きく違うとは思えない。北京で見掛ける子供の数が少ないと感じるのは，歩く範囲や時間帯が偏っているせいである。

ただ，社会的な環境の点で，日本と中国ではちょっと違う点がある。一つは，中国の大きな工場や機関では，職員の住宅が職場のすぐ近くに隣接しており，職員住宅の中に学校がある場合が多いということである。職場，住宅，学校が１つの小さなコミュニティを形成しており，その中で大抵は用が足りるので，子供たちもその小社会の中で遊ぶ機会が多いのである。たまに来る外国人はあまりこういうコミュニティに入るチャンスはないから，子供たちを目にすることも少なくなるというわけである。もう一つは，中国では夫婦共稼ぎが普通だから，子供たちは２時や３時に学校が終わって家に帰っても家には誰もいない。おじいさん，おばあさんが同居していない家では，子供は必然的に鍵っ子になってしまうのである。そこで，普通，学校では４時半とか５時とかかなり遅い時間まで子供を預かっている。子供たちは両親が仕事を終えて迎えに来るまで，学校で遊んでいるのである。だから，平日は街で遊んでいる子供たちが少ないのは確かなよ

うである。

最近の北京の子供たちは随分きれいな服装をしている。1人っ子が多いせいか，親がいい洋服を買って与えるようである。小さな女の子たちは，どきどきグループになって，スカートの裾をまくり上げて「ひとぉつ，ふたぁつ，みっつ」と言いながらゴム飛びをして遊んでいる。もちろん中国語で言っているのだけれども，こういう光景をぼんやり見ていると外国にいることをふと忘れる。大人になるとなんとなく中国人と日本人は区別がつく場合が多いが，子供を見ただけでは，どちらの国の子かを判別するのは全く不可能である。○○民族とか△△人とかよく言うけれども，民族の違いというのは，決して血によって受け継がれるものではなく，大人が作り上げた社会の中で，その民族として育て上げられるのである。遊んでいる子供らを見ていると，民族間の争いとか国と国との紛争とかは，結局大人が自分で作り出したのだと思えてくる。

服装や顔立ちでは，中国の子供は日本の子供と区別がつかないが，学校へ行くときは首にピオネール少年団みたいな赤いネッカチーフをつけているので，ああここはやはり中国なんだ，と納得できる。このネッカチーフがいわば制服みたいなものである。中学校，高校（中国では「初等中学校」「高等中学校」という）でも普通は制服はない。最近はときどき日本の高校生が修学旅行で中国へ来るケースがあるが，日本の高校生の学生服やセーラー服の黒い集団は，異様な感じであまりイメージはよろしくない。お葬式の列か軍隊みたいで，東京のファッションに憧れ「自由の国，経済大国ニッポン」に留学することを夢見ているこちらの若者の抱く日本のイメージとは大分掛け離れている。北京では中国の学生が制服を来て列を組んで歩いているのは見たことがない（もちろん，スポーツウェアを来て，街をランニングしている学校のスポーツクラブか何かの若者たちを見ることはある）。制服を着ての集団行動があまり目立たないのは，あるいは紅衛兵時代の反省があるのかもしれない。

ただ，高校生くらいの年齢になると，集団で勤労奉仕をやることがよくある。日曜日に学校単位とか青年団単位とかで集まって，公園の清掃とか街路樹を植える作業をやるとかの活動をやっているのである。この前，日曜日に万里の長城へお客を案内して行った時には，そこで「共産党青年団」の旗を持った一団に出会った。彼らも長城へ遊びに来ているのだ。要するに「共産党青年団」と言えども，奉仕活動の後で観光地へ行くとかレクレーションをやるとかということにしないと，日曜日に多くの人に動員を掛けるのはやはり難しいらしい。革命世代から見れば「近頃の若い連中はなんと軟弱なのか！」と怒るかもしれないが，これも時代なのだろう。

1人っ子政策の進展で，4人のおじいさん，おばあさんに孫が1人，というように，1人子供

のまわりに大人が大勢いる家庭がかなり多くなっている。このため，甘やかし過ぎるとか，子供が欲しがるとすぐお菓子を与えるので肥満児が多くなっているとか，子供同士で遊ぶ機会が減ったとか，どこかの国で聞いたような現象が最近起こっている。さすがに，各家庭にテレビゲームが行き渡った，とまではいってはいないが，先日，道を歩いていたら，一人でカードゲームをピコピコやりながら歩いている小学生とすれ違った。子供は時代の流れに敏感である。

１人っ子が多い上に，ほとんど両親共稼ぎだから，日曜日は貴重な家族団欒のひとときである。緑の季節になると，北海公園の池は子供を真ん中に乗せたボートでいっぱいになる。北京動物園のパンダ舎の前に行くと，記念品としてパンダのぬいぐるみを売っていて，こちらが日本人だとわかると売り子が「パンダ！パンダ！」と日本語で声を張り上げるが，買っているのは大抵子供連れの中国人家族である。彼らの給料からすれば決して安くはないはずなのだが，子供とのきずなを確かめようとしているかのように思い切って買っていく。天安門前広場へ行けば，おとうさんが子供と一緒にタコを上げたり，一家３人で毛主席の肖像の掛かった天安門をバックに記念写真を撮ったりしている。こういう光景を見ていると，ふと，「そういえば最近は日本でこういう光景はあまり見掛けないな」ということに気がつく。「平日はお父さんは狂ったように働き，お母さんは付きっきりで子供の勉強を見てやる。日曜日は，お父さんはクタクタに疲れ切ってゴロゴロ寝ている。気分転換したい人はゴルフへ出掛ける。子供は１人でテレビゲームをしている」。日本のことを想像するとこんなことしか頭に浮かばない。「平日は子供は学校で夕方まで遊び，両親のうち仕事が早く終わった方が自転車で学校まで子供を迎えにいく。それから自由市場で野菜を買って帰って家族で夕飯を食べる。日曜日は，平日に子供と遊べない分を取り戻すように公園へ行って一家で過ごす」。これが大体中国の都市の家族の姿である。どちらがよいのかはわからない。しかし，少なくとも，１人当たりのＧＮＰの額が30：１である，という数字は，人間の家族のぬくもりとは全く別の次元の問題であることは確かなようである。

北京事務所は周りが静かだし，近くに小学校があるので，ときどきたくさんの子供たちのきゃあきゃあと騒ぐ声が聞こえる。元気な子供たちの声を聞くとなぜか安心する。東京では，ビジネスの世界と生活空間としてのコミュニティが完全に分離している。その方が経済効率がよいからなのだろう。北京は，ビジネスの点でははまだまだ効率は悪いが，生活の匂いは濃い。今度「北京で子供を見掛けませんねえ」と言われたら，逆に「東京で子供を見掛けますか？東京の子供はみんなでゴム飛びをして遊んでいますか？」と聞き返すことにしよう。逆に，東京に来た中国人が「東京はおかしな街だ。子供がいない。コンクリートとアスファルトと車と背広の人しかいな

い」と思っているかもしれないのだから。

(1988年5月20)

季節のたより ⑦（1988年5月20日）

＊ 北京で「今日はやけに暑いなあ」と思ってから2～3日すると，東京から「真夏のような暑さです」との放送が聞こえてきます。月曜日に北京で「ちょっと肌寒いな」と感じると水曜日には東京からは「急に気温が下がりました」と言ってきます。上空のジェットストリームに乗れば日本はすぐ隣です。

＊ 3月の全人代の前後から「導弾」をやる（ミサイルを研究する）のは「倒蛋」をやる（ヤミ市でタマゴを売る）のに及ばない」とか「弾鋼琴」（ピアノを弾く）のは「搬鋼琴」（ピアノを運搬する）のに及ばない」とかいう言葉が流行っています。これらは「導弾」と「倒蛋」，「弾」と「搬」の発音が似ていることからくる一種のダジャレですが，要するに「国家のために研究している研究者よりヤミ市の売人の方が収入がいい」「厳しい鍛練と高度の芸術性を要求されるピアニストよりも，ピアノを運ぶ労働者の方がお金をたくさんもらっている」という現象に対する知識階級の不満を言い表したものです。大学教授や医師の給料が一般労働者とほとんど同じで，彼ら知識階級が生活に追われて十分に能力を発揮できない，という現象があるようです。これは，中国の従来からの平均主義の基づく賃金・物価政策の結果だったわけです。

＊ 全人代の後，こういう話がよく新聞に載るので，中国の賃金・物価政策の見直しがそろそろ行われるのかな，と思っていたら，5月15日からの北京市での主要副食品の値上げの発表がありました。（前回「食堂で食事する場合も含めて配給切符がないと入手できなくなるらしい」と書きましたが，これは誤りで，制度的には今までと変更はありません。公定価格を大幅に値上げして，それに見合う補助を給料に上乗せして払う，というのが今回の値上げの方法です）。物資の供給が逼迫しているという感じはないので，市内は平静です。「中国は人件費が安い」というメリットも段々とその魅力が薄れていくのかもしれません。

＊ 奥野前国土庁長官の辞任に関連して，中国の報道振りが日本にも伝えられているようです。この中で，中国の報道の訳文として「奥野の発言について」とか「奥野は何をしようとしているのか」などと名前を呼び捨てにしているものが伝わっていますが，これは別に悪者扱いにしているのではありません。新聞記事としては普通の書き方なのです。中国の新聞などの報道では，記事の最初に出てくるところで「国務院総理李鵬説，....」と書いて，2回目以降は「李鵬説....」（李鵬総理は....と言った）とか「李鵬指出....」（李鵬総理は....と指摘した）とか書きます。見出しを掲げるときもスペースの節約のために姓名が敬称や役職名なしで裸のまま掲げられます。この方法は　小平さんとか趙紫陽さんとか国家の指導者の人から普通の公司のヒラ職員まで同じ扱いです。また，ニュースの放送のときも同じです。これは，中国では「王」とか「張」とか同じ名字の人が多いので，職場等で「王さん」とか「張処長」とかいっても誰のことかわからないことが多く，事務的に名前を呼ぶときにはフルネームで呼ぶのが普通であることに起因しているようです。フルネームに敬称や役職名を付けるのは長くなって煩わしいので，仕事で職場に電話を掛けるときなどは相手が知っている人で自分と同ランクか目下の人ならならば「楊玉玲はいますか？」と呼び捨てにするいうのが普通です。私達が外国人的感覚で「楊先生はいますか？」と聞いても相手はどの楊さんなのかすぐにはわからないので困ってしまいます。当事務所で新聞記事等の訳文を作る時には「李鵬指出....」と出てきたら，総理大臣を呼び捨てにするのは日本語としては失礼なの

で，原文には役職名がなくても「李鵬総理は....と指摘した」と訳します。今回，お送りしている新聞記事の中にも，買い物をしている男の人の話として「私は姚依林副総理の言っていることはやはり間違いではなく現実的なものだと思う」という部分がありますが，ここの原文は「我認為姚依林的講話不錯，比較実際」です。下線部を直訳すれば「姚依林の話は間違っていない」ということになります。

もちろん目上の人に面と向かって話をする時は「王局長」とか「趙総書記」とか役職名付きで言わなければ失礼です。ただ，事務的な話の中で，個人的に親しいわけではない人を第3者として話題にする時は，上記の姚依林副総理の例のようにあまり気にしないようです。第3者として話題にする時に「毛主席」とか「周総理」とか役職名を付けるのは，親しい人だとか自分がそれなりの尊敬の念を持っている場合だとかいうことが多いようです。

ちょっと細かくなりましたが，その細かいことで要らぬ感情的な行き違いを起こすのもつまらないので敢えて書きました。ロシア語では相手に呼び掛ける時に「アンドレイ・ミハイロヴィッチ！」と父称を付ければ敬称を付けなくても丁寧ないい方になりますが，このように国によって丁寧さの表現は違ってきます。中国の新聞で名前を呼び捨てにしたから，犯罪人扱いされた，と思うのは完全な「早トチリ」なのです。中国語は外国語であるという，当たり前の事実を常に念頭に置かなければならないのです。

オフィスでシャワーを

日本の企業が中国と合弁で建設中のオフィスビルの入居者募集のダイレクトメールが来た。現在，北京は建設ラッシュで，市内のあちこちで外国企業が中国と合弁で超高層ビルを建設している。中国経済は確かに発展はしているが，５～６年前までは高層ビルがほとんどなかった北京に７つも８つも霞が関ビルや新宿副都心のような建物ができても，そこに入る企業が果たしてあるのか，傍目にもちょっと心配である。ここ数年の北京のビル建設のスピードは凄まじい。ちょっと頭に浮かんだだけでも，去年，シャングリラ・ホテルと崑崙飯店が正式開業したし，オフィスビルとして29階建てのノーブルタワーの入居が開始された。今年に入ってからは，首都賓館が部分開業し，国際大飯店の建設が完了した（国際大飯店は，建設は完了したはずなのだが，なぜか開業したという話を聞かない。エレベーター等の内部設備がまだ完成していない，という専らのウワサである）。市内の目抜き通り王府井大街に隣接している和平賓館新館も間もなく完成の予定である。このほか現在建設中なのは，日本系資本による長富宮センター，北京発展ビル，国際クラブ新館，フランス系の貿易センター・ビル，さらに亮馬河ビル等中国独自で建設するものや香港資本との合弁のものなどがある。これらはいずれも，今年末から来年一杯の完成をメドに建設が進んでいる。オフィススペースが供給過剰になるのは目に見えているので，ビルを建設している各社は，中国では珍しいダイレクトメールという方法で宣伝をするわけである。

供給過剰なら値段が安くなればよいのだが，各社とも土地使用料や不足気味の建設資材の調達等のために相当な資金を投入しているから，完成してからの部屋の賃貸料をそんなに安くすることはできない。だから，住居用のビルも含めて，外人用のビルの賃貸料はなかなか安くなる気配がない。

値段の面ではどれも「高値安定」なので，利用者にとってはビルのソフト面での使いやすさが重要な選択の基準になる。今回来たダイレクトメールにも「冬季の不快な静電気を防止するため，帯電防止加工したカーペットを使用」とか「軟水処理した給水設備完備」（北京の水道は硬水なので直接には飲めない）とか，いろいろ便利なことがらがキャッチ・フレーズの中に入っていた。このほかにこのビルは「中国人従業員用の食堂やシャワールームあり」とか「地下に大きな自転車置場のスペースを確保」とか，中国人雇員に対してもなかなか配慮が行き届いている。外国企業用のオフィスビルのレストランは，外国人値段だし外貨兌換券しか使えないので，中国人労働

者は使えない。というより1回の昼食代が月給総額の1／5であるようなレストランで食事していたのでは，働いて給料をもらう意味がないのである。去年完成したあるオフィスビルには中国人雇員用の食堂がないので，不評らしい。これらの先例を知っているので，現在建設中のビルには雇員用の食堂も作ることにしたらしい。

中国人従業員用のシャワールームもある，というのは，中国の習慣や一般の職場の事情をも配慮したなかなか心にくい気配りである。中国の職場には，風呂場（シャワールーム）があるところが多い。本来は，宿直をする職員が多い職場とか，鉄工所やホコリの多い環境で作業をしなければならない工場などに設置されているものだが，なぜかオフィスワークしかない職場にもシャワールームのあることが多い。以前，日本で国鉄の職員が勤務時間内にシャワーを浴びることについて問題になったことがある。勤務時間内に風呂に入ることがいいかどうかは別としても，鉄道労働者が炎天下で作業した後，シャワーを浴びたい，と思う気持ちは理解できる。ところが，中国では事務系の人もよく職場でシャワーを浴びるのである。ある日本関係機関の北京事務所の人が，中国の政府機関（我々のカウンターパートではない）に昼間電話を掛けたところ「今，○○さんは，風呂に入ってます」と言われたそうだ。「会議中です」などとウソをつかないところは，なかなかほほ笑ましい話ではある。

勤務時間中に風呂に入る，というのは不真面目のようだが，中国の住宅事情を考えると「まあやむをえないのかな」とも思える。新しく建てられた高層アパートなら大抵風呂は付いているが旧市街地の昔ながらの家にはあまり風呂がない（統計によれば，労働者の家庭のうち，トイレと浴室があるもの 6.19%，トイレがあって浴室がないもの 29.14%，共用のトイレや風呂があるもの 22.50%，トイレや風呂がないもの 42.17%（1985年）「中国社会統計資料1987」より）。風呂のない家に住んでいる人は「浴池」と呼ばれる公衆浴場へ行く。だが，やはりわざわざお金を払って風呂屋へ通うのも面倒なので，ついつい職場のシャワーを利用したくなるのである。この事務所のある竹園賓館の職員諸君も，ときどき昼間，濡れた髪を風に靡かせて，ホテルの制服を着てタオルを持ってその辺を歩いている。ここはホテルだから，シャワーはどこにでもある。空いている客室に行けばいつでも好きなだけシャワーが使えるのである。中国人労働者の立場からすれば「都市の再開発がなかなか進まず，自分たちは旧い風呂やトイレも満足にない家に生活していながら，一方で外国企業のために小ぎれいな高層ビルをどんどん建設しているのはおかしい。中国人のために住宅建設がなかなか進まないのなら，職場で風呂に入るくらい大目に見ろ」ということだろう。

中国において職場での仕事とプライベートな用事との間にあまりビシッとした線がないのは，中国の革命の歴史とも若干関係する。というと堅苦しいが，要するに，毛沢東の行った革命は農村革命であったわけだが，もともと農民の生活においては，労働とプライベートな生活はそれほどハッキリとは分かれていなかったのだ。労働の場が生活の場でもあった。この農村の姿を理想主義的に極端にまで突き詰めたのが人民公社だったのだ。人民公社では，各構成員の生活は全て人民公社が面倒を見るが，その代わり各構成員は個人の利益を追求せずに人民公社のために働くことが要求された。この考え方を具体化させた一つの例が公共食堂制度である。各構成員には3食とも無料で公共食堂から食事が提供されることになり，女性は家事労働から解放された。しかし，この理想的な共産主義制度には，プライベートな生活への配慮が足りなかった。「メシくらい家族だけで家で食べたい」「余裕のある時間で，自分の作りたい農作物を作って，個人的な生活を向上させたい」という農民たちの自然な願望によって，高き理想に燃えた人民公社は20年余りの間に消滅していったのである。

人民公社は今では完全に解体してしまったが，「各構成員の生活は全て人民公社が面倒を見る」という感覚はまだ中国社会に色濃く残っている。というより，国民1人当たりの収入がまだかなり低く，公共の社会資本の充実が不十分な現在の中国においては，本来個人的に解決すべき問題も職場が面倒を見るよりしかたがないのである。職員の家の風呂の普及率が低かったら，職場でなんとかするのは，それなりに当然な発想なのである。土地・住宅の面での社会資本の充実が不十分な日本において，職員の住宅取得の困難さに対して職場が社宅を提供することによって面倒を見るのと同じ考え方なのである。

ただ，日本と比べて，職場の職員に対する各種補助には，昔，農村共同体が果たしていた役割が強く残っているのである。具体的な例を上げるとその雰囲気がお分かりいただけると思うが，中国の職場では，職員に奨励金の意味で，卵や鶏の現物の支給をすることが多い。この竹園賓館でも，ときどき魚や生きている鶏の支給がある。北京事務所の窓の外の中庭は，よくこれらの「現物」の置場所になる。鶏の支給がある時は，大きな金網のカゴの中に20羽くらいの鶏を入れて中庭に置いていく。職員が1人帰るたびに1羽づつカゴから出す。その都度，鶏がコッコッと鳴くので，最後の1羽がいなくなるまで3～4日は「コッコッコッ，バタバタバタッ」と賑やかである。鶏の鳴き声を聞きながらワープロを打つというのも，北京事務所ならではの風情である。政府は「会社の金で買った現物を職員に支給するのは不明朗であり好ましくない」として，止めるようにたびたび通知を出しているが，長年の習慣なのでなかなかなくならないようである。

職場で風呂に入ったり，鶏をもらって帰ったりするのは，ある意味では牧歌的な習慣であって，外国人がとやかく言う筋合いではないが，中国が，冷徹な資本主義の合理主義が支配する国際市場に進出しようとする時には，外国との競争にこれで勝てるのかなあ，と心配になってくる。

なお，表題の「オフィスでシャワーを」は北京の現実のイメージとはかなり違う。カタカナで書くより「『弁公室』で『洗澡』を」と漢字で書いた方がピッタリだったかもしれない。

（1988年５月27日）

季節のたより　⑧（1988年５月27日）

＊　先週末から今週末にかけて，しばらくぶりで雨が降りました。普通「穀雨」のあとは，夕立ちのようなにわか雨の降る日が多くなるのですが，今年はほとんど降りません。空が雲ってゴロゴロと雷がなっても雨の降らない日がありました。華北平原北部の河北省，山東省方面では，干害の心配が出ているようです。今年の春は黄砂現象が激しかったのですが，これも山西省から内蒙古自治区に掛けての降水量が例年より少なかったことが，原因のようです。これらの内陸部では「砂漠化」が進んでいる，ということが，中国国内でも関心を呼び，効果的な対策を取るよう様々な議論が行われています。　＊　前に「穀雨」のことを書いたとき，「中国では，日めくりカレンダーに載っているような，ちょっとした言葉でも韻を踏んでいる。ある意味ではこれは中国の形式主義を表している」というような意味のことを書いたことがあります。誤解なきように申し上げますが，「韻を踏む」というのは中国語だけの現象ではありません。ビートルズのヒット曲で現在ではスタンダード・ナンバーにもなっている「イエスタディ」の歌詞を掲げてみます。

Yesterday
All my troubles seemed so far away
Now it looks as though they're here to say
Oh, I believe in yesterday

Suddenly
I'm no half the man I used to be
There's shadow hanging over me
Oh yesterday came suddenly

When she had to go
I don't know she wouldn't say
I said something wrong
Now I long for yesterday

Yesterday
Love was such an easy game to play
Now I need a place to hide away
Oh I belive in yesterday

下線部の音節のところで完璧に韻を踏んでいます。しかも，詞の構成もＡＡ′ＢＡという順序になっており，教科書的な構成です。日本語ではこういう訳にはいきません。残念ながら言語のリズム性という点では，日本語は他の言語に及ばないところがあります。かつて森鷗外が日本語で脚韻を踏んだ詩を作ったそうですが，リズムが豊かになるというより，単なるゴロ合わせや言葉遊びのようになってしまい，評判は良くなかったそうです。日本語では，韻が踏めないので，575とか57577とか，音節の数でリズムを　整えざるをえないのです。中国のスローガンや中国人の演説を聞いて「内容よりもリズムの良さにばかり気を使っている。形式主義的だ」と考えるのは，リズム感の乏しい言語を持っている日本人の「ヒガミ」かもしれません。考えてみれば，アメリカの大統領の演説なども，結構，言葉の調子に気を使っているように聞こえます。

ヒーローのいない時代

日本からのニュースによれば，ジャイアンツは勝ったり負けたりだそうだ。ヤクルトの長嶋一茂は，ホームランは1本打ったらしいが，その後どうなったのか，さっぱり判らない。そのほか，大分日本と離れているので，ナイターのニュースを聞いていても，全然知らない選手の名前が随分流れてくる。いずれにせよ，どのチームにもスーパー・ヒーローはいないようである。

スーパー・ヒーローといえば，現在の中国の指導部の方々を見ると，鄧小平党軍事委員会主席を除けば，スーパー・ヒーローと言えるような人はいない。みなさんいわゆる「能吏型」の方々で，有能であることは確かだが，今ひとつ目立つところはない。中国には，ついこの間まで毛主席とか周総理とか 500年後の歴史の教科書にも名前が載るだろうと思われるような偉大な指導者たちが沢山いたので，今の指導部の方々が目立たないのだろう。中国では，もうすでに偉大な英雄が国家の行方を導いていく時代は終わった。有能な多くの人々が，それぞれの職責を果たしながら，全体として国家を進めていく時代になっている。

歴史を，世の中が全体的に落ち着かない乱世と，全体として安定していた時代（治世）とに分けると，英雄は，時代が乱世から治世へ，治世から乱世へと移行する境目の時期に現れている。そして，乱世をうまくまとめたスーパー・ヒーローの築いた体制はなぜか長続きしない。中国の歴史でいえば，春秋・戦国時代の混沌とした乱世を統一したのは，秦の始皇帝というスーパー・ヒーローだが，秦は始皇帝が死亡するとすぐに，中国最初の農民戦争と言われる陳勝・呉広の乱によって瓦解する。この秦末の混乱の中から2番目のヒーロー劉邦（漢の高祖）が出て漢を建国した。高祖が短年で崩壊した秦の欠点を反面教師として漢の基礎を築いたため，漢は 200年（後漢も加えれば 400年）の安定した政権を保つことができた。安定した漢の時代には，前漢の武帝（在位 140～87年B.C.）や後漢を建てた光武帝（在位25～57年A.D.）のような大物もいたが，西に東にヒーローが活躍するというイメージはない。後漢は2世紀の後半になって政権の腐敗によって崩壊して，また魏晋南北朝という混沌とした時代に入る。この乱世への移行期に現れたのが，「三国志」に出てくる英雄たちである。この 400年近い魏晋南北朝時代の乱世を統一したのは隋の文帝だが，隋も秦と同じように2代で滅び，No.2のヒーローである李淵（唐の高祖）に取って替わられた。安定した政権を作ったのは，この時も乱世を統一した隋ではなく2番目に登場した唐の方だった。日本の歴史を見ても同じである。戦国時代の乱世から天下統一という治世へ移行

する過渡期において，武田信玄や織田信長等の多くのヒーローが生まれた。そして天下統一を果たした豊臣秀吉の政権は10年しか保てず，満を時していた徳川家康の方が長期政権を作り上げたのである。

武将が濶歩していた昔と現代の革命とを同一視することはできないが，アヘン戦争以来の混乱期を収拾して中華人民共和国という安定した体制を築き上げるまでの過渡期の中から生まれた中国革命においても，毛沢東を始めとする多くの英雄が現れた。そして，混乱を統一した政権の宿命なのか，毛沢東が理想とした文化大革命の体制も結局比較的短い期間で終わってしまった。これを引き継いだ№2の指導者，鄧小平氏がリードしている現在の開放・改革体制は，おそらく長期的な安定が得られるのだろう。

秦の始皇帝が死んだ後，劉邦と項羽というヒーローが現れた。漢の王朝が安定してしまうと英雄はいなくなった。後漢が崩壊しそうになった時，曹操，劉備，孫権らが現れ，続いて諸葛孔明や司馬仲達らが登場した。しかし，これらの人々が死んでしまうと，これという英雄がパタリといなくなってしまった。スーパー・ヒーローは，その人の才能もさることながら「その時代」が産み出すものである。中国で毛沢東という20世紀最大の指導者が文化大革命を指導していたころ（1960年代後半），音楽界ではビートルズというヒーローが現れ，アメリカではアポロ計画が宇宙の英雄を産み出していた。そして，ジャイアンツでは王・長嶋が連続ホームランを打っていた。しかし，1970年代に入って中国が国連へ復帰し，ニクソン米大統領が訪中したりして中国を巡る国際情勢が変化し，毛沢東の死去によって文革が終了するのと同じ時期に，ビートルズが解散し，アポロ計画が終了し，長嶋・王が引退した。「英雄を産み出す時代」が終わってしまったのである。

魏の曹操が若い時，当時有名だった論者の許劭に「私はいかなる人間か？」と尋ねたことがある。この時，許劭は「子治世之能臣，乱世之奸雄也（あなたは平和な時代ならば有能な官僚になるし，乱世ならばずる賢い英雄になるだろう）」と答えている。かの曹操も「英雄を産み出す時代」に生まれなかったら，官僚として出世はしたかもしれないが，歴史に名を残す英雄にはなれなかっただろう。

「英雄を産み出す時代」が終わって，今は「治世」の時代である。（経済の方ではこれを「安定成長の時代」と言っているようである）。こういう時代に生まれた人は才能があっても英雄にはなれない。去年巨人を引退した江川も「時代」に恵まれずにヒーローになりそこねた一人である。原辰徳も20年早く生まれていたらスーパー・ヒーローになっただろう。「治世」には，派手

に目立つヒーローではなく，広島カープを引退した衣笠のように，細く長くコツコツと仕事をする人の方が価値があるし，評価されるのである。

「英雄のいない時代」は，新聞の大見出しを飾るような大事件は少ないが，次の時代へ移行するためのエネルギーが地の底に静かに蓄積されていく時代である。近代の歴史でいえば，農村に商品経済が入って，農民が商人の持ち込むちょっとした手工業製品を買うようになったとか，そのためにお金を貯める意欲が高まったとか，全く普通の庶民の日常の行動の変化の集積が，来たるべき時代の変動を推し進める原動力として蓄積される時代なのである。「英雄のいない時代」では，少数のスーパー・ヒーローはいないが，農家のおじさんとかタバコ屋のおばさんとか，個人経営の飯屋のあんちゃんとか，ごく普通の人々がそれぞれ小さなヒーローになって，チーム・プレーをしながら時代を進めていくのである。

ロシアの文学者トルストイは，大作「戦争と平和」の中で，当時最先端の理論だった気体の分子運動論を比喩として使ってその歴史観を述べている。即ち「１人１人の人間は，気体の分子と同じようにお互いに全く関係なく自分勝手な行動を取っているが，全体として見てみると，気体が体積や温度や圧力などの一定の性質を持つように，人間社会も１つの様相を示している。速度の速い分子の数が多くなれば，全体としての気体の温度が上がり圧力が大きくなるように，ある傾向を持った行動を取る人の数が多くなれば，人間社会の様子も変わり歴史も進む。ロシア皇帝とかナポレオンとかいうのも，いわば１つの気体分子に過ぎず，これらのヒーローが歴史を動かしているのではない。歴史を動かしているのは，１人１人の人間の行動の集積なのである。」

この原理は，英雄がいるかいないかに関係なく普遍的なものだが，英雄がいる場合は，彼を時代のシンボルとして捕らえて時代の流れを見ることがやりやすくなる。ところが，「英雄のいない時代」は，時代のシンボルがいないので，時代が見えなくなる。「英雄のいない時代」には，姿勢を低くして，街行く人の表情や風の中の微かな匂いから時代を敏感に感じ取らなければならない。それをしないで，人為的に無理矢理に時代のシンボルとしてのヒーローを作り出してしまったのでは，時代を見誤ってしまう。いかにヒーローを渇望していたとしても，「英雄のいない時代」においては，それは「無いものねだり」なのである。残念ながら，長嶋一茂は生まれた時代が悪かった。彼が父親を超えるスーパー・ヒーローになることは時代が許さない。周りの人が彼をヒーローに仕立てようとしても，それは単なる虚像に過ぎない。「長嶋！」「長嶋！」と騒ぐよりも，２軍から上がって来たばかりの名前もよく知らない選手に注目していた方が，結局は

今の情勢をよく理解できるし，プロ野球の勝敗の行方を的確に予想することができるのである。

（1988年６月２日）

季節のたより　⑨（1988年６月２日）

＊　林理事長を始め幹部の方々が北京事務所の開所宴に出席のため訪中されたのはちょうど去年の今頃ですが，その時に比べて今年はかなり涼しい感じです。去年は日中の最高気温が34度まで上がったのですが，今年はせいぜい28度程度で，しかも空気が乾燥しているので，真夏の北海道みたいに過ごし易い気候です。

＊　前に「北京は過剰なくらいの建設ラッシュである」と書いたことがありましたが，５月27日，国務院は建設プロジェクトの整理をするため，北京市内の33項目のビル建設工事の停止または建設のスピード・ダウンを決定しました。この中には国務院の合同庁舎や共産党関係のもの，国防科学技術工業委員会関係のビルもあります。「どの分野にも例外はない」ことを示したかったのでしょう。外国企業用のオフィス・住居用ビルも入っていて，ちょっと気掛かりですが，日本やフランスの企業が合弁で建設中の大物ビル（長富宮ビル，貿易センタービルなど）や中国資本のものでもかなり建設が進んでいるもの（亮馬河ビルなど）は除外されています。国務院が意図していたのは，自主権の拡大をいいことに自分の職務範囲を拡大解釈して不必要な投資をしている国内の機関にカツを入れたかったのでしょう。我々の常識から考えても，住宅建設公司や機械工場，北京市の水利局までがホテルを建設している現状は，やはり正常とは思えません。その一方で，国務院の合同庁舎や北京市物資局の物資交易センターなど建設する必要がありそうなものまで横並びでリスト・アップされているのは，日本の「１省庁・１機関の移転」と同じような現象でしょうか。

御旅行，御苦労様です

所長と本社から出張してきた職員と一緒に広西チョワン族自治区の資源県（桂林の北東約 100 km）の剷子坪（Changziping ）ウラン鉱床へ行ってきた。本来ならば，北京から飛行機で桂林まで行き，そこから車で資源県へ行くのだが，今回は行き帰りとも飛行機の切符が取れずに桂林まで列車での往復となった。

普通，中国民航の航空券は20日くらい前から売り出すのだが，通訳の王龍安さんに５月下旬に予約に行ってもらったら，「北京－桂林線は７月15日まで予約が満杯です」というすげない返事だとのこと。恐らく日本の旅行社あたりが押さえてしまっているのだろう。我が同胞の観光客が切符を買い占めてると考えれば，中国民航に文句をいってもしょうがない。日本人観光客がわんさと押し掛けているのに，北京－桂林間はボーイング737 かトライデント（イギリス製）で週に９往復しかない。東京－鹿児島間でもジャンボやトライスターが１日に９往復している日本と比べるわけにはいかない。しょうがないから，その足で北京駅へ行って，列車の予約をしてもらった。当初出発を予定していた６月５日の分も，その前日の４日の分も一杯なので，しかたなく３日の切符を予約した。列車の方も，北京－桂林の間の直通列車は１日に１往復しかない。しかも空調つきのＡ寝台（中国語では軟臥車という）は，この列車には１両しか連結されていない。１両には４人用コンパートメントが８つで32人しか乗れないから，列車の切符もいつでもすぐに買えるわけではないのだ。もっとも，一般の中国の人と同じように，一般席（中国語では硬座車）に乗るテもあるのだが，日中の気温が37度にもなる中国大陸のどまん中を２晩も硬い座席に座り続けるだけの体力があるかどうかの自信はないので，何としても「軟臥車」が欲しいのだ。

切符の予約をすればすぐ乗れるわけではない。乗車日の２日前に，また北京駅へ行って，今度はお金を払って切符を購入しなければならない。王龍安さんは，炎天下，朝から切符売り場で並んでいたが，お昼近くになっても順番が回ってこず，そのうちに切符売り場の職員の昼食時間になって窓口が閉まってしまった。午後もう一度出直して，３時頃になってやっと順番が回ってきたら，窓口の人から「外国人用の切符はすぐに渡せるが，同行する中国人の切符は会社（動燃北京事務所）の紹介状がなければ渡せない」と言われたそうである。列車の切符を買った経験は何度もあるので，乗車する人の身分証明書（外国人ならパスポートまたはそのコピー，中国人なら職場の発行する工作証）が必要なことは知っていたので，これらの必要文献は抜かりなく用意し

ていたつもりだった。ところが，聞くところによると，最近，列車の中で中国人がコンパートメントに同乗していたアメリカ人を殺して金を奪うという事件が発生したので，管理が厳しくなって，外国人と中国人が一緒に同じコンパートメントの切符を買う場合は，しかるべき機関の証明書や紹介状が必要なように規則が改正されたのだそうだ。こちらはそんなことは知らなかったが，規則なら従うほかはない。王龍安さんは，再び事務所へ戻って，事務所で紹介状を作って，所長のサインをもらい，事務所の公印（工商行政管理局に届けてある事務所の正式なハンコ）を押してもらって，これを持って再び北京駅へ行って，やっと全員の切符を入手することができた。こんなことがあったので，所長は今回の出張の間中，北京事務所の公印を持って歩いた。何かトラブルがあったら，これを示して，水戸黄門よろしく「これが目に入らぬか。我こそは工商行政管理局から正式に認可された北京事務所の所長であるぞ」と言うつもりだったのである。幸いなことに，今回の出張においては，これ以後，公印のお世話になることはなかった。

ともかく切符を入手して，乗車当日，夜の11時28分発，南寧行きの「特快５次」列車に乗り込んだ。桂林に到着するのは翌々日の早朝６時。30時間半列車に乗って，２晩車中泊しなければならない。列車は定刻ピッタリに出発した。発車するとすぐ服務員が茶碗と魔法瓶に入ったお湯を持ってきた。茶碗はちゃんと持ってくるかどうかわからなかったので自分達で用意していったが，その必要はなかった。中国で列車で旅行する時は，コップや割り箸，ナイフなどを用意していくと，冷たい飲み物や果物を買った時に便利である。お茶の葉っぱは忘れずに持っていく。（お茶の葉っぱは各自自分で用意するのが中国の常識）。空調も効き過ぎるくらい効いていたし，シーツなども結構清潔で，思ったより快適だった。枕灯のスイッチを入れても点かなかったが，こんなことはよくあることなので気にはならない。列車がスピードを上げると，スピーカーから車内放送が流れてくる。停車駅の案内と，タバコは決められた場所で吸え，とかトイレを使ったら水を流すように，とか通り一遍の注意事項の放送である。どうも録音したテープで流しているようだ。

朝になると，６時15分に車内放送が始まる。我々の日頃の生活パターンと比べると大分早い気がするが，中国の人にとっては普通なのだろう。６時30分になると，勇ましいテーマ曲と共に中央人民ラジオ局のニュースが流される。ゆっくり寝ていようと思っても，こうなると起きざるを得ない。８時頃になると，服務員が朝食の用意ができたことを知らせてくれる。食堂車が隣にあるのが「軟臥車」のいいところである。朝食は肉やシイタケの入ったウドンである。１人当たりのＧＮＰが日本の１／30とはいうけれど，中国の人は結構いい物を食べている。このウドンも豚

骨スープで肉が入っている割にはサッパリしていてなかなかいける。この日は朝・昼・晩と3食とも列車の中で食べなければならないが，我々は3食で1人30元（約 1,050円）のコースを注文した。北京市内のレストランよりはかなり安めである。昼，夜ともまあまあの食事が出てきた。（まあまあ，とは言っても味のレベルは東京の普通の中華料理屋の料理よりはかなり上である。品数も豊富だし，あっさりした感じでおいしい）。ビールを頼むと，お燗のついたビールが出てくる。食堂車には冷房が入っていない。気温37度の炎天下を走る鉄の箱みたいな列車に積んであるのだから，体温より暖まっていてもしかたがないのだ。以前，ある人が「中国ではビールは冷やして飲む習慣がないらしい」と旅行記に書いていたが，その人は，真夏に冷房の効いた部屋で冷たいビールを飲むのが全くの贅沢であることを忘れてしまっているのである。誰だって，ビールは冷やした方がうまいに決まっている。

車外の景色は大平原の小麦畑が続く。考えてみれば，日本の東海道新幹線の沿線は，熱海の海岸や富士山や浜名湖があってなかなか風光明媚である。それに引き換え，中国の大平原は確かに雄大だが，長い間眺めているとだんだん飽きてくる。そのせいでもあるまいが，車内放送では，切れ目なく音楽やら漫才やらいろいろなものを放送している。「軟臥車」の場合，コンパートメントにスイッチがあるので聞きたくない人はスイッチを切ればよいようになっているが，黄河や楊子江を渡る時や，鄭州，武漢など大きな都市に近づいた時は，車内放送で説明があるので，聞いていても結構楽しい。鄭州の手前で黄河を渡るのが朝の8時過ぎ，武漢市内で楊子江を渡るのが夕方の4時過ぎである。その間は平原で，淮河を渡るとそれまでの小麦畑が水田に劇的に変化する。それ以外は大体同じような風景が続く。

正午を過ぎると，服務員が通路側の窓のカーテンを閉めて，車内放送が一時お休みになる。昼寝の時間である。昼食時に飲んだビールが効いてくるし，適度な揺れがあるのでどうしてもウトウトしてくる。やはり列車だと夜はぐっすり眠れないから，昼寝の時間には素直に寝たほうがいい。

新幹線のように居眠りを邪魔するほどではないが，車内販売はある。ジュースやコーラの類は売りにこない。販売価格が決まっているから，車内販売してもマージンを取れないからだろう。売りにくるのは，朝・昼・晩の弁当とスイカくらいである。弁当は発泡スチロールの容器に入ったご飯に野菜や肉を炒めたものを掛けた中華丼みたいなものだ。車内の食堂車でパックするので，できたてなら心配はないが，車内は35度以上あるから時間の経ったものは要注意である。周りを見てみると，我々のように1日1人30元のコースを頼んで食堂車で食事しているのはあまり多く

はない。軟臥車に乗っている客でも，弁当を買って食べている人がたくさんいる。（［注］正確に言うと，弁当は「売りにくる」のではない。弁当が売れ残ると衛生上問題だから，予め客から注文を取っておき，食事の時間になると注文した客のところに配って歩くのである。）

駅に止まると，食糧や水の積み込みのため10～15分停車する。駅に降りると売店があって，そこにはジュースや果物の缶詰の類を売っている。ほとんど国産だが，これも悪くはない。天然果汁を原料にして甘さをセーブした味付けにしてあり嫌味がない。内陸部で製造している食品などでも，容器を小ぎれいでしっかりしたものにして，新鮮さを失わないようにうまく保存すれば，結構輸出できるものが多いに違いない。南の地方の特産のパック入りの荔枝（れいし＝赤黒いウロコのような硬い皮に覆われた球形の果物。果肉は白く透き通るような色をしている。楊貴妃が大好きだったと言われている）のジュースなどは北京でもなかなか口に入れるチャンスはない。こういう地方色のある食べ物を駅で買うのは，列車による旅行ならではのものではある。

駅に15分も止まると，買い物には便利だが，その間トイレを使えないのがつらい。「特快」なので，一番長い区間では4時間近く駅に停車しない。停車しない間に列車のタンクの水はだんだん少なくなってくる。特に日中は暑いと，みんな顔を洗ったりするので，すぐ水がなくなる。水がなくなるとトイレが使えなくなるので，がまんせざるを得なくなる。だから，駅に停車して水を積み込んで発車するまでが待ち遠しい。やっと発車したと思ってトイレへ行くと「有人」の赤い表示。同じような思いの人が他にもいて，真っ先に入ってしまったのだ。もうこうなると地獄の苦しみで，恥も外聞もなく，トイレのドアの前で前の人が終わるのを足踏みしながら待つしかない。

「冷房付きのA寝台車」とはいっても，空調装置が常に順調に動くとは限らない。行きの列車でも昼間2時間くらい故障していたし，帰りの列車ではほとんど効かなかった。普通の中国人の人達は暑いのをがまんして「硬座車」に乗っているのだから，「冷房が効かなかった。A寝台料金返せ！」と騒ぐのも申し訳ない。ひたすらがまんするしかない。

片道だけならよかったが，往復4晩の車内泊はさすがにくたびれた。しかも，正確だといわれる中国の鉄道だが，行きは2時間，帰りは4時間半遅れた。特に帰りの列車は3時間半遅れで北京近郊へ来たら，北京駅周辺の列車が混み合っていて，郊外の駅で1時間以上も待たされた。炎天下，冷房も効かない鉄の箱の中で，いつ動くともわからないまま待っていると，「もうどうにでもなれ！いずれにしても命に別状はないわけだ」と思えてくる。たまたまこの日は，日本からもう1人職員が来ることになっていたのだが，列車が遅れたため，事務所にも寄らず，昼食も食

べずに，北京駅から直接北京空港へ出迎えにいく羽目になってしまった。

郊外で1時間待たされた後，列車はゆっくり動き始めた。やれやれと思っていると，最後の車内放送が流れてきた。「北京は我が国の首都であり，政治・経済・文化の中心です....」。毎日，この列車で流すテープによる放送である。最後に「旅客們，旅行辛苦了。我們的終点站北京快到了」と言った。「乗客のみなさん，お疲れ様でした。我々の終着駅，北京にまもなく到着いたします」という意味だ。「旅行辛苦了」の「辛苦了」は「御苦労様」という意味でよく使うが，ここは列車の車内放送だから「お疲れ様でした」と訳すのが妥当なのだろう。しかし，往復60時間以上列車に揺られ，汗とほこりまみれになった我々の気持ちとしては，直訳的に「御旅行，御苦労様でした！」と訳した方がピッタリのような気もした。

（1988年6月17日）

季節のたより ⑩ （1988年6月18日）

＊ やはり，6月も中旬になると，猛烈な暑さがやってきました。13日の月曜日には北京の最高気温が39度を超えました。実はその前日の12日の日曜日（この日は最高気温が36度程度だった）に，日本からの出張者を案内して，北京北郊の明の十三陵と万里の長城へ行って来たのですが，炎天下，山の尾根に造られている長城のてっぺんに登るのに，相当しんどい思いをしました。そのせいで，13日の方が気温は高かったのですが，事務所にいたので，それほど暑さは感じませんでした。北京では，日中どんなに暑くても，明け方には22度くらいまで気温が下がるので，夜寝苦しいということはありません。もっとも，我々外国人のいるところにはクーラーがあるから楽なのであって，一般市民はレンガ作りの家に住んでいるので，宵のうちは相当暑いようです。今，中国では夏時間を採用しているので，北京では夜の9時ごろまで明るいのですが，みんな家に入っても暑いので，夕食を食べたあともブラブラ何をするでもなしにその辺を歩いています。テレビもさして面白くないし，ナイターもないのだから，家の中にいても暑いだけでやることがないのでしょう。若い人がいっぱいいるのだから，中国でプロ野球とかプロサッカーとかを始めたら，相当な人気になるだろうし，お金も儲かると思うのですが，中国共産党もそこまでは柔らかくなってはいないようです。

＊ 6月18日は旧暦の端午の節句でした。事務所のある竹園賓館では経理（社長）からのプレゼントとして，各部屋にチマキが配られました。餅米と小豆を竹の葉で三角形に包んで縛って蒸したものです。「チマキ食べ食べ....」という童謡は知っていましたが，子供のころチマキを実際に食べた経験はありませんでした。年配の方の中には，中国に旅行に来てすっかり中国が気に入ってしまう方が多いのですが，現在の日本では失われてしまった「旧き良きもの」を中国で発見されることが多いからでしょう。

＊ 6月18日は土曜日ですが，昼間停電をしていました。普通停電日は金曜日なのですが，時として土曜日になることがあります。中国は電力事情が逼迫しているのだから，停電があるのはしかたがないのですが，少なくとも計画的にやるとか，事前に予告するとかして欲しいと思います。この日は朝の4時50分着の列車で所長が遼寧省の興城から戻ってくるのでこれを出迎えて，その後ちょっと休んでワープロを始めました。ところが午前10時50分になって突然停電しました。土曜日に停電するとは思わずに作成した文書をフロッピーには入れてい

なかったので，午前中それまでかかって入力していた分は全て消えてしまいました。昼食を食べている間に，電気がきたので，午後「しょうがない。最初からやり直しだ」と気をとり直してワープロをやり始めましたが，２時30分になってまた停電。午後になって入れた分がまたまた消えてなくなりました。「私は今日，朝４時に起きて，今まで何をやっていたのだろうか」と思わず哲学的な思索に耽ってしまいますが，北京に長くいると，こういう事態にもかなり慣れてしまうものです。「全ては『無』なのである。宇宙の広大さに比べたら，私の１日の仕事などは，一瞬にして消えてしまうべき『無』に過ぎないのである」。そういう悟りに似た心境になります。ただ，クーラーが止まって，外の33度の熱気がじわっと事務所の中に入って来るので，悟り切った冷めた感覚もすぐ中断されてしまいます。この日は，たまたま竹園賓館から差し入れられたチマキがあったので，これをムシャムシャ食べながら，向かいの屋根を歩いているノラ猫を眺めて午後を過ごしました。

＊　先月の国際郵便料金と主要副食品の値上げに続き，６月１日からは国際電話料金が，６月15日からは市内のタクシー料金が値上げになりました。（交換手を通したステーション・コールが１分間 6.6元（約 230円）から 8.8元（約 310円）に値上げ。タクシー料金は１㎞あたり 0.8元（約28円）が 1.2元（約42円）に値上げ）。国際電話料金やタクシー代の値上げは個人的な懐にもかなり影響します。中国が低賃金・低物価政策を改めだしたことが実感としてわかるようになりました。

＊　６月初めの広西チョワン族自治区への出張は，はからずも汽車による中国大陸縦断の旅となってしまいました。往復で60時間以上汽車に乗っていたわけです。中国の鉄道時刻表には北京ーモスクワ間の国際列車も載っています。ハルビン，満州里経由で，６泊７日 9,001㎞の旅です。たまに列車の旅をするのも，昔の人の旅行の苦労を偲ぶためにも必要なのかもしれません。

犬猫診療所

毎朝，所長が宿舎から事務所へ車で出勤する途中に，比較的新しく建てられたアパートが立ち並ぶ地域を通るが，そのアパートの一つの入り口に「犬猫診療所」という手書きの看板が掛かっている。現代の中国語ではイヌは普通は「狗」の字を使う。まして「犬猫」と続けて書くのはあまり見掛けない。恐らく日本のマネなのだろう。看板が手書きだし，6階建ての普通のアパートの入り口に掛かっているところを見ると，いずれにせよ正式に認可されて開業している獣医さんではなく，ちょっと心得のある人が，アパートの自分の部屋でアルバイト的に「営業」しているのだろう。

こういう看板が掛かってはいるが，実は，北京市内にはイヌはいない。時々，北京に来るお客さんが「北京ではイヌを見掛けませんねえ。やっぱり，食べちゃうんでしょうか」と質問することがある。中国にイヌを食べる習慣があることは確かである。以前人に聞いた話だが，ある日本人が台湾省の台北に住むことになった。治安が良くない，というので用心のために番犬を飼ったそうである。ところが，ある日，その家にドロボーが入った。家の人が気が付いて，いろいろ調べたが盗まれたものはない。おかしいな，と思っていたら，番犬が盗まれていた，という話である。このドロボーはイヌが目当てだったらしい。私自身も，雲南省の昆明に行った時に，街のあちこちで「狗肉」という看板を掲げた食べ物屋を見掛けた。北京ではそういう看板にお目に掛かったことはない。イヌを食べるのは，どうやら南方の方の習慣らしい。あるいは，中国人の間でもイヌの肉を食べるのは旧い田舎の習慣であるという感覚があって，都会人たる北京っ子としては，メンツとしても食べないのかもしれない。

北京市内にイヌがいないのは「食べてしまった」からではない。イヌは道端のあちこちにフンをするし狂犬病の恐れもあるので，衛生上の理由で，北京市の当局が市街区域でのイヌの飼育を禁止しているからである。市当局は，市街区域の衛生管理には相当気を使っている。トイレのない家に住む住民のために街のあちこちに「公共厠所」があるし，車が一台やっと通れるような狭い路地の奥にも，きちんと生ゴミ収集車がやってくる。そのせいかどうかは定かではないが，北京のハエやカの類は，東京に比べるとずっと少ない。イヌもハエやカを退治するのと同時に市街区域から追放されてしまったらしい。市街区域でなければ，そんなに管理は厳しくない。北京でもちょっと市街地を離れて郊外へ行くと，農家でイヌを飼っていて，子供たちと遊んでいる風景

をよく見掛ける。

ネコに関しては，「飼ってはいけない」という条例があるのかどうかは知らない。少なくとも，竹園賓館にいるネコは今日も屋根づたいにのんびり徘徊しているから，イヌのように追放されたわけではなさそうだ。

イヌの飼育が禁止されているので，鳥を飼っている人は多い。朝になると，両手に鳥籠をぶらさげた老人たちが，公園に集まってくる。散歩がてら，公園に集まって，お互いに自分の鳥の姿や啼き声を自慢し合うのだ。場合によっては，そこが，お互いの鳥を売り買いする，臨時マーケットになったりする。趣味に凝る，という人はどの国にもいるようで，1羽 200元～ 300元（1元は約35円）という値段で取り引きされるらしい。場合によっては， 1,000元を越すものを買う人もいるという。一般の労働者の1か月の平均賃金が 100元余であるのを考えれば，安い買い物ではない。

中国は社会主義国だから，退職した後の人の待遇は悪くはない。都市に住んで国営企業等で働いていた人は，退職した時点での収入は死ぬまで保証されるのが原則である。宿舎も仕事をしていた時に住んでいた公司から支給された宿舎に退職後も住むことが許される。「日本では会社を退職したら社宅を出なければならない」という話を中国人にすると「ええっ，じゃどうするの？特に日本では住宅の値段が高いんでしょう？」とびっくりしたような顔をされる。中国では，市などが供給する住宅の数が極めて少なく，自分で住居を見付けるのはほとんど不可能だから，退職した人を公司の宿舎から追い出す，というのは非現実的なのである。いくら土地代が高いとはいえ，お金さえあれば自分の好きなところに住める日本とは違うのである。そんなこともあって，退職後の老人層は，意外にお金には困っていないことが多い。そういう人の中には，美しい鳥を飼うとかとか，珍しい盆栽を育てるとか，少々お金の掛かる趣味を持っている人が少なくない。

こういう趣味を持つ人が多いのは，ほかにおもしろそうなものが何もない，ということもその背景にある。日本と中国を比べて，生活上一番感じるのは，スポーツ産業，レジャー産業の有無である。生産や経済社会の発展を大目標とする社会主義社会においては，スポーツやレジャーは「産業」たりえないのである。要するに，そんなヒマがあったら，社会奉仕活動をしたり，学習に精を出したりしなさい，ということなのだろう。タテマエとしてはわかるが，やはり息抜きの場所がない社会には，息苦しさを感じる。「息抜き」とは「怠ける」ことでは決してない。

老人たちの場合は，鳥を飼ったり，盆栽をいじったりするのは結構なことである。お金に余裕があるならば，それを趣味に使うのも，それはそれでいい。しかし，若い連中にとっては「ほか

に面白そうなものが何もない」という現実は息苦しいものとして映る。時々，学生たちが不穏な動きをしたりする背景の一つにこのような状況があるのも確かだ。北京を見ている限り，市民の生活にはだんだん余裕が出てくるようになってきている。敢えて比較すれば，生活水準は大体日本の昭和30年代初期の程度だろうか。しかし，当時の日本には，パチンコ屋もあったし，プロ野球やプロレスもあった。当時の日本の人々は長島の登場や力道山に夢中になれた。しかし，今の中国にはそのようなものはない。

最近，若い連中の間で流行っているものは，ビリヤードである。日本でも結構流行したらしいが，中国で今流行っているのは，折り畳むと自転車に積めるような簡単なビリヤード台を道端に持ち出して屋外で楽しむものである。夏時間になって，日没が遅くなったので，最近は夕方から夜遅くまであちこちの街角で若い連中が集まってやっている。道端でやっているとは言え，若者たちは真剣な顔付きでキューを構えている。ちょっと近寄り難い雰囲気もある。見ていると，「あんなに真面目な顔をしてやっている。お金でも賭けてやっているのだろうか」とか「台の持ち主が，お金を取って道行く人にやらせているのだろうか」とかいろいろ想像してしまう。案外，彼らは単に楽しんでいるだけなのかもしれないけれど。

北京にも，若者が遊べるようなところがないわけではない。ディスコもある。しかし，普通ディスコは1回30元程度かかるから，全くコネのない人（従業員の中に知り合いのいない人）が行って気軽に遊べるようなところではない。また，北京にはゴルフ場も3つある（18ホール2か所，9ホール1か所）。共産党の趙紫陽総書記は時々ゴルフをするそうだが，これらのゴルフ場のお客はほとんどが日本人である。1日で 400元， 500元もかかるゴルフを一般の中国人ができるわけはない。一般の中国人向けレジャー施設を作っても，外貨兌換券は稼げないから，そういう分野に投資する外国企業はない。また，当然ながら，そういう投資をしようとする中国人の投資家はいない。中国には資本家はいないからである。かくして，一般の人々が気軽に楽しめるような場所が中国には極めて少なくなってしまうわけである。だから，人々は，道端でビリヤードを楽しんだり，鳥を飼うとか盆栽をやるとかいう，公認された趣味を楽んだりするしかないのである。

北京の市街区域では，イヌの飼育は禁止されているけれども，「犬猫診療所」が看板を掲げて商売しているところを見ると，ひそかに飼っている人が意外にたくさんいるのかもしれない。様々な制限の中で，外国人の目には見えないところで，中国の人々は，自分だけの楽しみを持っていて，生活をエンジョイしているのかもしれない。

（1988年6月24日）

季節のたより　⑪（1988年６月25日）

＊　国家エネルギー部が正式に発足しました。核工業部が「中国核工業総公司」になりましたが，我々の仕事に具体的にどのように影響してくるかは，まだはっきりしません。人事の面では，今までの核工業部からの横滑りですので，急激な変化はないものと思われます。

＊　今週も，金曜日の午前中と土曜日の午前及び午後が停電でした。いずれも昼食時間には電気がくるので，需要オーバーで自動的に切れるわけではなく，午前と午後の電力需要のピークをカットするために人為的に供給をカットしているのです。毎度のことですが，時間を決めるとか，予告するとかしてほしい，と切に思います。今週も３回ともワープロの記憶をパーにしてしまいました。

＊　北京周辺には，香山公園の南の山の陰に火力発電所があります。万里の長城の向こうには「官庁水庫」という人造湖があって，北京に水ガメの役割を果たすとともに，水力発電もやっているようです。週によって停電があったりなかったりするのは，需要の変動よりも供給能力の問題のようです。最近，雨がほとんど降らず，水庫の水位が下がって水力発電の能力が落ちているのではないかと思われます。普通，雨の少ない冬場は停電が多くなります。今年の夏は雨が少ないので，それが夏になっても改善されないようです。いずれにせよ，停電が多くなっても「なぜ最近は停電が多いか」などという発表は行われませんので，こちらとしてはこれから改善されるのかどうかの見通しも立ちません。記者発表が行われるのは「今年は去年より電力供給が15%伸びた」などというプラス面の発表を行うときだけです。それにしても，節電キャンペーンなどをほとんどやらないのは解せません。必要ならいつでも供給を止めればよい，などと考えているのでしょうか。冷蔵庫がかなり普及してきましたから，停電というのは一般家庭の生活に対する影響も大きいはずです。中国の市民は何の声も上げませんが，がまんしているのでしょうか。物価も急激に上がっているし，市民の中に不満が鬱積しなければよいがな，と思います。先月は四川省でサッカー見物の市民が騒いだりしましたが，変な騒ぎになって，乱暴狼藉ざたにならないとよいと思います。

7月7日の話

高校生の頃聞いていたラジオの英語会話講座の中に，日本人がアメリカ人に七夕について紹介する場面があったのを思い出す。「日本には，織り姫と牛飼いの悲しい恋愛物語があって....」などと説明するわけである。七夕は「棚機」とも書く。竹に飾り付けをしたり供え物をしたりする「たなばた」の習慣は日本に古来からあったらしいが，織女と牽牛の物語は中国の言い伝えである。中国の伝説と日本の古来の習慣が結び付いて現在の日本の七夕の習慣ができたようだ。だから「日本には古来こういう言い伝えがあって....」と前置きして織女・牽牛の物語をするのは正確さに欠ける。「日本には中国から伝わったこういう言い伝えがあって....」というべきである。他国の伝説をあたかも自国の独自ものであるかのように何も知らない第三国の人に説明するのは，誤解のもとであるし，中国に対しては失礼な話である。こういうことを長年繰り返してきたから「香港は日本のどこにあるのですか？」などと質問するアメリカ人が中中なくならないのだろう。

織女と牽牛の話は，よく恋人同士の話だと勘違いしている人がいるが，本当はこの「2人」は夫婦である。織女は天上界の機織りの上手なお姫様で，一方の牽牛は地上に住む普通の農夫である。ある日，織女はお付きの天女たちと一緒に地上の川に水浴に降りてきた。水浴している織女を草むらの陰から見ていた牽牛は，彼女にすっかり夢中になってしまった。すると傍らで草を食んでいた牛がのっそりと頭を上げて「今のうちに彼女の着物を隠してしまえば彼女はあなたのものになりますよ」と囁いたので，牽牛はその通りにした。水浴が終わって天女たちは次々と天に帰っていったが，織り姫は着物が見つからないので天に帰れず途方に暮れていた。そこへ牽牛が出ていってプロポーズした。織女は頬を赤らめてこれを承諾したのである。2人は牽牛の家で3年暮らして，1男1女の子供が生まれた。織女はこのまま一生農家の妻として過ごそうと思っていたが，3年経ったある日，ついに天帝の知るところとなった。織女は牽牛と2人の子供を残して天上に召し返された。天帝は織り姫を家に閉じ込めて機を織らせようとしたが，毎日嘆き悲しむばかり。困った天帝は，年に1回だけ7月7日に逢うことを許したのである。そこで，1年に1度，織女は2人の天女を従えて天と地の境である天の川を渡ろうとし，牽牛も2人の子供を日頃使っている肥桶に入れて天秤棒の先につけ，これを担いで天の川を渡ろうとした。2人の気持ちに心を動かされた天の川に住む「かささぎ」が翼を広げて天の川を渡れるようにした。夏の夜

空を見上げると，織り姫星が小さな２つの天女の星を後方に従えて正三角形を形作っているのがわかる。天の川の反対側には，織女星と牽牛星とを結ぶ直線上の前後に小さな星を伴って，牽牛星が光っているのが見える。この２つの小さな星が子供たちである。間に横たわる天の川には「かささぎ」が大きな翼を広げている。（この伝説にはいろんなバージョンがある。ここで紹介したのはその中の１つである。）

理科年表によれば，織女星（こと座－α星。通称ヴェガ）は地球から25光年，牽牛星（わし座－α星。通称アルタイル）は地球から16光年離れている。この２つの星間の地球からみた見掛けの角度は約35度だから，余弦定理を使えばこの２つの星の実際の距離は簡単に計算できて，約15.1光年であることがわかる。つまり光のスピードでいっても15年以上かかるわけで１年に１度の逢瀬など無理な話なのである。雄大な宇宙のスケールの考えると，地上の雑事など忘れてしまいそうだが，昔の人の想像力はなかなか現実的である。日常の生活にしっかりと立脚しているような感じがする。牽牛が肥桶に子供を入れて織り姫に逢いに行く，などというのは，ロマンティックというより，いかにも中国の民衆の生活臭があって興味深い。

中国では今でも旧来からの行事は旧暦でやるから，こちらの日めくりカレンダーの７月７日の項目には七夕とは書いていない（旧暦の７月７日は今年は８月18日）。そうではなく「中国人民抗日戦争記念日」と書いてある。「盧構橋事件」のあった日なのである。1937年（昭和12年）の７月７日夜10時40分頃，北京近郊の盧構橋付近で夜間演習をしていた１箇中隊の日本軍の中に10数発の小銃弾が撃ち込まれた。これをきっかけとして，日本軍は大部隊の移動を行い，翌朝から日中両国軍の衝突が始まったのである。10数発の小銃弾が誰によって発砲されたのかは，今もわかっていない。研究者の間では「この発砲は日本軍の謀略ではなかったらしい」というのが定説になっている。日本軍が最初から計画的に発砲したのならすぐに行動を開始したはずだが，この時は翌朝までかかって戦闘準備をしており，必ずしも大きな軍事衝突を事前に予想していたとは考えにくいからである。（これに対して，1931年（昭和６年）の柳条湖事件（「満州事変」の勃発）は関東軍の謀略であったことが明らかにされている）。この意味で「盧構橋事件は偶発的に始まった」という言い方は的外れではない。しかし，「外国駐在員」として赴任している我々が感じることは「なんで外国のこんなところに日本の軍隊がいたのか」ということである。我々は日頃「日本を遠く離れて外国に赴任しているんだ」という気持ちを抱きながら仕事をしている。その同じ場所に50年前には日本の軍隊がいた，というのは，考えれば奇妙な話である。日本軍がいた頃，北京の市民たちはそれをどう感じていたのか，と考えてしまう。盧構橋は北京の南西の

郊外，この事務所から行っても車で小一時間のところにある永定河に架かる橋である。元の時代に創られたもので，大理石の欄干がある。マルコ・ポーロもこの地を訪れた時，その美しさに驚嘆したという。そのような所でなぜ日本は軍隊の夜間演習をしなければならなかったのか。人の家の中に火薬やガソリンをたくさん持ち込んでおいて「火事になったのは偶発的に火が点いたからなのだ。悪いのは私ではない」と言っても誰もそんな言い訳は納得しない。もし，仮に頼みもしないのに外国の軍隊が日本にやってきて，東京の近くで軍隊の夜間演習を始めたら我々はどうするだろうか。盧構橋での最初の発砲が，もし仮に中国側がやったのだとしても，北京の市内の事務所の中に座ってこうして考えてみれば，それを非難はできないような気がする。

7月になるとテレビ等で抗日戦争の時の映画をよくやるようになる。日本で8月になると原爆や戦争に関する番組が多くなるのと同じである。日本のテレビが毎年8月に広島・長崎の原爆のことを取り上げるからといって，日本人の間に反米感情が高まるということがないのと同じように，7月7日の「抗日戦争記念日」になったからといって，中国人の間に反日感情が高まるということはない。逆にアメリカのある高校が原爆のキノコ雲を学校のシンボル・マークにした，というニュースを聞くと日本人としてはいささかカチンとくるとの同じように，日本人が50年前に行ったことを忘れたような言動をとると，中国の人としては一言いたくなる気持ちになるのである。

日本の人は8月6日の広島の日も，8月9日の長崎の日も，8月15日も知っている。しかし，8月15日を韓国では光復節（独立が回復した日）と言っていることを知らない人は多い。7月7日も七夕であることは確かだが，中国ではそれ以外の意味もあることは忘れてはならない。

解放前の諸外国による半植民地化の歴史は，現在の中国の政策決定にも影響している。中国では，鉄道や通信網等のインフラ・ストラクチャーの整備のために，日本からの円借款をはじめ世界銀行などから借款を導入しているが，外国企業による大きな投資はなかなか進展していない。外国企業に対して，まだ様々な制限があるからである。もっと外国企業に自由に投資させて，例えば，外国に中国での鉄道の建設のための投資とその管理・運営をすることを許したとしたら，鉄道網の整備はもっと進むかもしれない。しかし，現在そのようなことは許されていない。それは，解放前，外国資本による鉄道の建設と管理を許したために，諸外国がその鉄道における権益の保護を名目として中国を半植民地化していったことを，中国の人は忘れていないからである。「少しくらい時間が掛かってもいい。少しくらい貧しくても当面はがまんしよう。我々は，我々の手で，我々の国を建設するのだ」。彼らはそう思っている。現在の借款による鉄道建設も，外

国側はお金を貸したり技術面で協力しているだけで，建設と開業後の運営は完全に中国側が管理している。

七夕の話から話題を変えて戦争のことを書いたのは，別に日本の軍国主義を糾弾しようと思ったからではない。現在の開放・改革体制の中における様々な経済改革の中でも，中国の人たちの胸の中には，解放前の半植民地のような状態に戻りたくない，という気持ちが色濃く残っていることを知ってもらいたかったからである。中国の投資環境がなかなか改善されないのは，一つの背景としては，中国側に「経済力の差が歴然としている現状において大幅な自由化を行えば，中国の経済が外国資本に支配されるのではないか」という不安があるからである。これからの中国は外国との経済関係をますます活発化させ，経済の自由化を進めていくだろう。その過程においては様々なことがあるだろうが，中国が過去において何を経験してきたかを常に念頭においていれば，現在の中国として譲れない一線がどの辺にあるかは自ずと明らかになるはずである。

中国の人は意外に現実的である。日本が昔中国で何をしたかについてこだわったりはしない。日本側が謙虚な気持ちを持って，過去のことを忘れなければ，中国との関係は今後もうまく行くだろう。日本が過去に行った行為の背景には，他国の国民の気持ちを無視するという不遜な気持ちがあったのだ。日本人が西洋人に七夕の話をするときに織女・牽牛の伝説が中国から来たものであることを無視してしまうことの中にも，案外こういう不遜な気持ちが潜んでいるのかも知れない。

（1988年７月１日）

季節のたより　⑫（1988年７月２日）

＊　前回，「核工業部が『中国核工業総公司』になりました」と書きましたが，厳密にいうと「核工業総公司」はまだ設立されていません。かといって国家エネルギー部は設立されたわけですから，核工業部がなくなったのは確かです。だから，日本では「核工業総公司」として扱ってかまわないものと思われます。厳密にいうと，現時点では「核工業部」も「核工業総公司」もどちらも存在しないわけですが，職員はいつもの通りに働いて，いつもの通りに給料を貰っているのです。日本ではちょっと考えられない事態ですが，こちらでは不思議でもなんでもないようです。「核工業総公司」の正式な発足は９月頃になるのだそうです。外部への書類にはまだ「核工業部」のハンコを使っているようです。現時点では，国家エネルギー部のハンコと核工業部のハンコが両方使　われているわけですが，権限関係などどうなっているのでしょうか。日本にいる人は　「国家の重要な機関が１日たりとも重複したり，空白になったりすることがあるハズがないとイライラするでしょうが，中国の人に聞くと「今，そんなこと聞いてどうするんです？９月になればハッキリするんだから，それでいいじゃないですか」と言われるだけです。

＊　北京は西瓜の季節になりました。日本語の「スイカ」は中国語の西瓜[xigua]（シーググァ）がなまったものじゃないかと，勝手に想像しています。街にはいろいろな種類の西瓜が山積みになっています。ラグビーボール型で模様のないものやまん丸で黒い筋の模様の入った日本で見掛けるのと同じものなどいろいろなものがあります。「鄭州３号」という品種のものが人気があるようですが，値段は１斤（ 500ｇ）で２角５分（0.25元＝約 9円）程度です。

＊　最近，街で白人の観光客を多く見掛けるようになりました。欧米からの観光客は結構多いのですが，今年は去年より目立つような気がします。円高で日本を敬遠した人達が中国に流れてきているのでしょうか。北京のホテル事情は緩和された，というのを通り越して少し過剰気味になっているようです。３～４年前までは，航空券の手配とともに北京でのホテルの確保が至難の技だったことを考えれば夢のような話です。今なら，お金さえあればいつでも泊まれます（ただし，安い手頃なものは少ない）。６月26日付けのチャイナ・ディリー（ビジネス・ウィークリー）の記事によれば，北京には 190のホテルがあり，35,000室の部屋があるそうです。これは年間 400万人を受け入れることが可能な数ですが，昨年は外国からの訪問者は約 100万人で，供給能力の26％しか使用されなかったそうです。

＊　１日の金曜日はかなり雨が降りました。北京には梅雨はありませんが，時々低気圧が通ったりすると，上海あたりにある梅雨前線による雲が，北京のあたりまで運ばれてきて雨を降らせます。こういう日は，南の湿った空気を一緒に連れてくるので，湿度の高いむっとするような，ちょうど日本の梅雨時と同じような天気になります。今週は雨が降ったので，金曜，土曜の停電はありませんでした。

地下鉄に乗って

北京事務所では竹園賓館の乗用車を毎日１台借り上げているから，北京市内どこへ行くのも不便はない。月曜日の朝などそれなりに車の渋滞はあるが，北京は，東京に比べたら問題にならないくらい自動車が少なく，朝夕の自転車のラッシュアワーにぶつからなければ，車で市内の大抵のところへ30分以内で行ける。ただ，北京のタクシーはかなり少ない（北京のハイヤー，タクシーの総数は12,491台。東京は個人タクシーだけで19,422台（いずれも1986年））から，事務所の車を使わずに個人的にフラフラと街へ出掛けるというのにはそれなりの覚悟が必要である。走っているタクシーを手を上げて捕まえられるのは，よほど運のいい時だ。観光客の多い夏場になると，北京飯店など大きなホテルでさえ，タクシー待ちの客の行列ができる。もちろんバス（中国語では「公共汽車」という）はたくさん走っている。北京に来た当初は「なんでも乗ってやろう」という意気込みがあったからバスにもときどき乗ったが，いつ来るかわからないのをイライラしながら待って，その上スシ詰め状態に詰め込まれるのを考えると，今は敢えてバスに乗ろうという元気はない。北京市内のバスは，普通のバスとトロリーバス（中国語で「電車」という）があるが，いずれも自動車の渋滞と自転車の洪水の中を「危ないからどけ！どけ！」とワァワァわめきながらノロノロ走るので，急いでいる時はあまり当てにならない（実際，車掌が車外インターホンで「道を空けるように！」と叫びながら走っているので，「バスがワァワァわめきながら走る」と表現するのは間違っていない）。スシ詰め状態には日本でも慣れているからどうということはないが，いつくるかわからない，というのはせっかちの日本人には耐えられない。ただし，ここで断っておくが，「中国人は日本人のようにせっかちではなく，のんびりとしていて気が長い」と思っている人が多いようだが，それは善意の勘違いである。中国の人の中には日本人と同じように，あるいはそれ以上に，イライラし，すぐ怒り出す気の短い人が多い。ただし，イライラしようと，怒り出そうと，バスが来ないのはいかんともできない。我々外国人は事務所の車を使ったり気軽にタクシー代（１kmあたり 1.2元＝約42円）を払ったりできるのに対し，中国の人はそうはいかないだけの話である。別に気が長くてのんびりとバスを待っているわけではない。

バスにはあまり乗りたくないので，最近はときどき地下鉄（中国語では「地下鉄道」略して「地鉄」という）に乗る。北京の地下鉄は，北京の西郊外の苹果園から市内へ向かい第二環状路の南半分を回って北京駅に至る１号線（1971年初めに開通）と復興門から第二環状路の北半分を

回って北京駅の隣の建国門までの逆U字型の路線を走る2号線（1984年に開通）がある（29駅，総延長39.4km）。1号線と2号線は昨年（1987年）の12月まで繋がっていなかった。1号線の車輌折り返しポイントが北京駅の東側にしかなかったので，西から来た車輌が折り返すには，北京駅まで行かねばならず，このために環状の運転ができなかったためだという。ほんの数百mの接続部分と折り返し地点の工事を残すだけで，3年以上も環状運転ができなかったのは，地下鉄の営業面から考えれば相当にもったいない話なのだが，社会主義の国では「もうちょっとここを工夫すれば儲かる」という発想はなかなか生まれないようだ。

この事務所がある竹園賓館は，この地下鉄（環状線）の鼓楼大街駅から歩いて7～8分のところにある。しかし，昨年までは環状になっていなかったので，鼓楼大街からは前門（天安門の南側）等の市の中心部へは行けなかった。北京に来た最初の頃，好奇心もあって，地下鉄の駅に行って切符を買おうと思って「前門まで1枚」と言ったら，女性の係員に「えっ！なんだって！なんでそんなところに行けると思っているの！」と頭から怒鳴られてしまった。あの頃はまだそうやって怒鳴られるのに慣れていなかったので，ショックを受けてスゴスゴ事務所に帰って来てしまった。そんなことがあったので，地下鉄に乗るのにはなんとなく心理的な抵抗があって，それから1年半ばかりは全く地下鉄には乗らなかった。

昨年の12月24日になって1号線（東西線）の復興門駅での折り返し地点の工事が完成したので，ようやく環状線だけ独立して循環運転ができるようになった。（従来の1号線は朝晩を除き西の苹果園から復興門までの間をピストン状に運行し，環状線の各駅へ行く乗客は復興門駅で乗り換えることになった）。こうなると，地下鉄の駅に近いという我が竹園賓館の利点が生かされるようになる。市の中心部に近い前門や日本レストランのある新僑飯店等へも気軽に行けるようになった。地下鉄はタクシーに比べれば値段が安いし（環状線内で 0.2元＝約7円，東西線に乗り換えると 0.3元。バスは距離によって，0.05元～0.15元）待つ必要がないので（ラッシュ時は4分間隔）バスに比べたら断然便利である。

北京の地下鉄の車体は水色とアイボリーホワイトのツートンカラーのなかなかモダンなデザインで，長さが比較的長くて東京の千代田線の車輌くらいある。ただ，4両編成なので東京の地下鉄ほど輸送能力は大きくない。電力はパンタグラフではなく，東京の銀座線や丸の内線と同様にレールの脇にある第三の軌道から取り入れている。駅の構内には落書の類はないし，ゴミも落ちていない。ただ，中国の建造物は押し並べてそうだが，建設されてからあまり時間が経っていない割には，全体的に色がくすんで若干年期が入ったような感じを受ける。

車内に乗り込んで東京にいるつもりで，ドアに寄り掛かっていたら「危険防止のため寄り掛からないように」と書いてあった。日本では想像だにしたことはなかったが，走行中にドアが開くようなことがあるのだろうか。中国ならばそういうことがありうるかもしれない，と思って寄り掛かるのは止めにした。乗客はつり皮につかまって新聞を読んだりして，日本と同じ風景なのだが，車内がなんとなく異様な雰囲気である。なぜかと思ってあたりを見回すと，広告が全くないのだ。「車内禁煙」という表示と地下鉄の路線図を示す地図が張ってある以外は，ペンキを塗った車輛の鉄板がそのまま無愛想にあるだけである。日本の地下鉄の中に賑々しく氾濫している広告も，冷たい鉄の箱を飾って，車内を明るくする役目を持っていたことに初めて気が付いた。

北京の地下鉄というと，本当の役目は核シェルターなのだろう，と考える人がいるかもしれない。建設を開始した時点では，おそらく明らかにそういう発想はあったと思われる。核シェルターとしてどのくらいの深さが必要なのかも知らないし，地下構造物の専門知識もないので，今の北京の地下鉄が核戦争になった時に本当に役に立つのかどうかはよくわからない。現在地下鉄の走っている場所の地上には，建設を始めた時点ではまだ城壁が残っており，道路を地上から掘下げる開削工法を取るのは難しかっただろうから，トンネルの位置が東京の銀座線や丸の内線より深いとしてもそう不自然ではない。鼓楼大街駅の場合，地上からコンコース（切符売り場と改札口のある階）までは階段で65段あった。今度，お近くの地下鉄に乗る機会があったら，比較してみれば必要以上に深いのかどうかわかると思う。いずれにせよ「地下鉄＝核シェルター論」は，文革時代の過度の「対ソ核戦争脅威論」の産物であり，今まじめにそれを考えている人はいない。当時確かにいくつか核シェルターが作られたが，それらは現在は地方から出てきた人のための宿泊施設になっている。一部は公開されていて，国際旅行社に事前に頼んでおけば，外国人でも見学できるそうである。

核シェルターであるとかないとかいう話があるせいか，どうも地下鉄に関しては，はっきりしない，よくわからないことが多い。北京で市販されている地図で，どこを地下鉄が通っているのか地図の上に明確に記載してあるものに出会ったことがない。このため昨年末に環状線が開通するまでは，市販されている地図を見ても，どこがどう繋がっているのかよくわからないことが多かった。日本で発行されている旅行案内書の中には，編集者の早トチリで勝手に環状線を繋げてしまって，自由にどこへでも行けるように書いてあるものもあった。そういうのがあったから，駅の係員に「バカなことを言うな！」と怒鳴られるような気の毒な旅行者が出てきてしまったのである。北京には17年前から地下鉄があるのに，日本で発行される旅行案内書や地図の中には，

今だに，地下鉄が記載されていないものが多い。これらの現象は，もっぱら中国側で発行される地図や案内書に地下鉄が明確に掲載されていないことによるものである。（もっとも，日本で発行されるこのテの案内書や地図の中には，有名な旅行社が出したものであっても，結構いい加減なものがある。縮尺が「約20,000分の１」と書いてあるのに実際の距離と比較してみたら本当の縮尺は　40,000分の１程度だった，という地図もあった）。「よくわからない」ことの中には，先程書いたように，なぜ２号線が完成してから環状線の輪が完成するまで３年以上も掛かったのか，という疑問もある。これについては，地下鉄の工事そのものよりも，電力の供給能力に問題があったのだ，という説もある。

過去のいきさつや裏の背景はともかくとして，便利になったのは結構なことである。新聞報道によれば，現在，東西線を東へ延長して天安門前を横断して東郊外まで伸ばす線と，西北の頤和園付近から環状線の北半分を串差しにして東へ抜けて東北郊外にある北京空港までを結ぶ線，天安門を中心に北京を南北に縦断する線の３つの新しい地下鉄路線が計画されているという。新聞には「1990年代内の完成を目指す」と書いてあった。中国の人に言わせると「つまり完成は20年後でしょうね」ということになるが，目一杯機能化され尽くしてしまった東京と比べてみれば，北京は，やるべきことがたくさんあって，未来を語ると楽しくなるのは，羨ましい感じがする。

（1988年７月８日）

季節のたより　⑬（1988年７月８日）

＊　今週は相当雨が降りました。１日中ザァーザァー降っていた日もありました。７月のちょうど梅雨の末期に当たる時期が，北京では１年中で最も雨の多い時期です。この時期に北京に来られるお客さんはお気の毒で「万里の長城へ行ったはいいが，雨で石段はツルツル滑るし，苦労して上まで登っても霧が懸かっていて何も見えなかった」ということになります。今週の雨で華北平原北部の山東，河北地方は今年はほぼ干ばつの恐れがなくなりました。

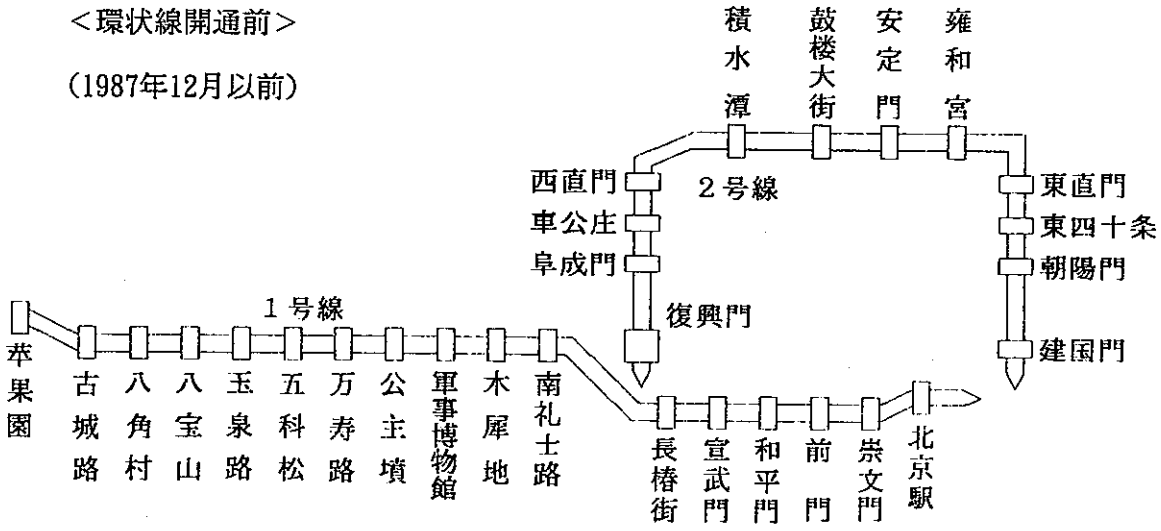
＊　７月７日は七夕でしたが，またまた，ラジオ・ジャパン（ＮＨＫの国際放送）の英語放送では，「この日は星がデートするというJapanese legend があります」とやっていました。間違いではないにしても，こちらの人が聞いたら「あれ？」と思うでしょう。お正月の時も「日本では今年はドラゴンの年です」と放送していましたが，中国でも韓国でもシンガポールでも今年は龍年なのです。はっきり言って，ラジオ・ジャパンを欧米の人が一生懸命聞いているかどうかは疑問で，むしろアジアの人が一番熱心に聞いているのだと思います。露骨に言うと「島国に住む少数民族の国がよくいうよ」という感じです。中国からみれば，モンゴルも朝鮮（韓国）もフィリピンもタイもインドネシアも日本も基本的には同じなのですから。

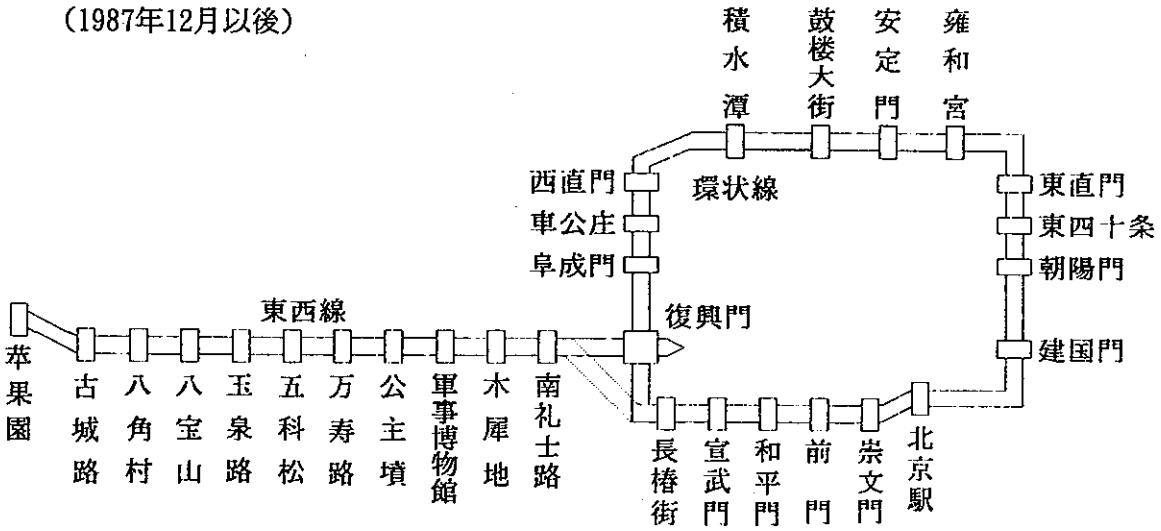
＊　ＮＨＫで思い出しましたが，８日，北京日本人学校の新校舎の竣工式があって当事務所からも出席しましたが，在北京の報道機関の方も来ていました。ＮＨＫの北京事務所の園田さ

んも来ていました。この方とは面識はありませんが，テレビのレギュラー番組でキャスターをやっていたこともある方なので，顔は知っています。出席者として来ていたのではなく，カメラを担いで撮影に来ていたのです。日本から応援が来ないような時は，自分でカメラを回す（回すといっても今はビデオですが）らしいのです。李鵬総理へのインタビューから，カメラマン役から，運転手の雇用契約までおそらく１人でやっているのでしょう。どこの会社でも同じですが，いろいろ大変なんだろうなあ，と思いました。ただし，報道機関の記者の方は，もともと１匹狼的なところがありますから，東京で大きな組織の中に埋没してしまうよりは，こういう外国で，のびのびやりたいようにやる方が楽しいのかもしれません。

＊　特派員で思い出しましたが，先日M新聞に香港特派員電として「中国・重慶で卓球とばくが大ブーム」という記事が載っていました。「『ピンポン外交』で名をはせた中国の卓球も，自由化の波の中で『とばくの風』を防ぎきれなかったらしい」とその記事にありました。でも「ピンポンが大流行」というのはちょっと聞いたことがありません。今，中国で流行っているのは「ビリヤード」です。「ビリヤード」は中国語では「台球」と書きますが，人によっては卓球という人もいます（ただし，卓の字体は中国語では少し異なる）。ピンポンのことは「兵兵」と書き，卓球とは言いません。ビリヤードで賭博が行われていることについては，北京でも問題になっています。もしかすると，本当に，北京ではビリヤードが流行って，重慶ではピンポンが流行っているのかもしれませんが，どうやらこの記事は記者の勘違いの匂いがかなりします。当北京事務所で書いている報告の中にもときどきトンチンカンな勘違いがあろうかと思いますが，プロの記者でもこういう勘違いをするのですから，その辺は御容赦戴きたいと思います。（このM新聞の記事は中国通訊社電の紹介という形になっています）。

（参考）環状線が開通する前と後の北京地下鉄の路線略図





2,000回に1回のミス

お客さんの来ない北京の夜はすることがない。日本から誰かが来ていれば，中国側の歓迎宴だの日本側の答礼宴だのがあるし，宴会のない日でも，お客さんは北京ダックが食べたいとか夜景の見える展望レストランへ行きたいとかいろいろ御要望が多いのでそれに付き合わなければならないから，お客さんが北京にいる間はほぼ完璧に夜は潰れてしまう。しかし，お客さんが帰ってしまうと，北京の夜はポッカリと空白ができたようになるのである。

お客さんがいなくて，何もすることがない夜は，大抵ポケット・コンピューターを相手にしている。東京にいると，何かとやることが多いし行くところもたくさんあるので，コンピューターを買ってもホコリを被ったままになりがちであるが，北京に来ると，夜にまとまった時間が取れるので，長年作ろうと思っていたプログラムも作れるのである。もっとも，プログラムとはいってもゲーム・プログラムばかりだ。今凝っているのは，野球ゲームである。ピッチャーとバッターのデータを予めインプットしておいて，コンピューターに乱数を発生させて，そのデータに従った確率でヒットやホームランが出るようにしてある。人間は，監督になったつもりでバントやヒットエンドラン，盗塁などの指示を出す。ピッチャーはバッターと対戦する数が多くなると，疲れて打たれ易くなるように設計してあるので，ピッチャーをどこで交替させるかが，監督たる人間の腕の見せどころである（［ピッチャーの打たれ易さ係数］＝Ko＋Kv×［対戦打者数］。KoとKvはともに定数で，乱数によってコンピューターに設定させる）。チーム名やプレーヤーのデータは，いろいろ変えられるので，様々なチームの対戦をシミュレートすることができる。先日は［ジャイアンツ（監督は人間）］と［V－9メンバー（監督はコンピューター）］との対決をやった。はじめのうちは［V－9メンバー］の3番打者の［オオ］が［ジャイアンツ］の先発ピッチャー［ガリク］から2打席連続ホームランを打って［V－9］がリードしていたが，［V－9］の先発［ホリウチ］は調子が悪く，5回の裏に［ジャイアンツ］のキャッチャー［ヤマクラ］に逆転3ランを打たれて負けてしまった。なお，この試合で［ジャイアンツ］のピンチヒッター［ロ］は途中から出場して3打席で内野安打1本，［ジャイアンツ］の［クワタ］と［オオ］との対決はセカンドゴロと三振で［クワタ］に軍配が上がった。人間はピッチャーの交替などに関して「2アウトだからあと1人くらいなんとかなるだろう」とか「次の攻撃ではピッチャーから始まるので，今交替させたくない」とか余計な思惑が入るので失敗することが多い。それに対し

て，コンピューターの監督は，データに基づいて「打たれ易さ係数」が規定された基準を越えると，情け容赦なく交替を命じるので，失敗が少ない。

この「野球ゲーム・プログラム」はBASIC で書かれているが，データの部分も含めると約30バイトの分量がある。つまり文字にして３万字，Ａ４版の紙にアルファベットでびっしり書いて10枚分以上ある。これだけ分量が多いのは，人間の場合は野球のルールが頭に入っているからすぐ反応できるが，コンピューターにはこれを全てプログラムとして指示してやらなければならないからである。コンピューターには，ランナーの状態８種（ランナーなし，１塁，２塁，１・２塁，３塁，１・３塁，２・３塁，満塁），アウトカウント３つ，打球の種類13種（内野ゴロ，外野フライ，シングルヒット，２ベースなど），それに打球の方向（内野の場合12方向，外野で９または13方向）及びランナーの状態（ヒット・アンド・ランが掛かっているのかどうか）の全ての場合について，どう対応するのかをいちいち教えておかなければならない。（方向を12種類だとすれば，状態の数は８×３×13×12×２＝ 7,488通り）。30バイト もあるとプログラムを入力するだけで週末が潰れてしまう程である。個人的に作成したプログラムでもこの程度だが，市販されてるプログラム・ソフトはもっと分量が多い。カセットテープ方式のマージャンゲームでも 60バイト以上あり，しかも簡単な BASICではなく機械語で書かれている。いま流行のファミリー・コンピューターはテープではなくＬＳＩのＲＯＭを使ったものだから，もっと容量は大きいだろう。商売とはいえ，これを作った人は相当苦労したに違いない。プロの場合，納期が限られているし，ちょっとしたプログラムミスも許されないのだから，本当に血の滲むような作業に違いない。だから，プログラム・ソフトは本当は 6,000円とか 7,000円とかいう値段で買えるような代物ではないのだ。（もっとも，百万個でも二百万個でも，ほとんどタダのような値段でコピーできるわけだから，6,000円でも高い，という議論は当然成り立つわけだが）。

このように長いプログラムを人間の手でインプットしようとすると，どうしても入力ミスが生じる。人間が不注意によって生じるミスは数千回に１回と言われているが，コンピューターのプログラムを入力しているとそれを肌で実感することができる。「絶対間違えないぞ！」という決意の下に，慎重に１つ１つ入力していても， 2,000回に１回は単純ミスを犯してしまう。 2,000回に１回というと，そうは多くはないように見えるが，３万字分のプログラムでは15箇所の間違いが発生することになる。15箇所も誤りがあれば，プログラムは正常に動くはずがない。この誤りを見付け出して訂正する作業（デバッギング）が結構やっかいなのである。こういう人間による誤り（ヒューマン・エラー）はダブルチェックでかなり少なくできる。ただし，１／2,000 の

確率で起こるエラーを2人の人間がダブルチェックすることによっても，ミスは（1／2,000)×（1／2,000 ）＝（1／4百万）にはならない。人間がミスを犯し易い箇所は大体決まっているからである。「：」と「；」を間違う，「，」と「．」を間違うなどである。これらの間違いはA君が見誤ったとしたら，B君も見誤る可能性がある。だから，一般に，2人によるダブルチェックを行っても，ミスが発生する確率は期待するほど小さくはならない。

プログラムを実行する場合にも，人間によるミスは生じる。「よいプログラム」では，そういう人間のミスを救済するような処置も取られていなければならない。ゲーム・プログラムの場合は，人間が間違ってルールに反するインプットをした場合でも，すぐ正常な状態に戻れるようになっていないと，ゲームの流れを阻害しておもしろくなくなってしまう。人間というものは勝手なもので，例えばピンチヒッターを出そうと思って，残りのプレーヤーのリストを表示させた時点で，考え直してピンチヒッターを出すのを思い留まることもある。そういう場合にちゃんと元に戻れるようにプログラムしていないと，ゲームプログラムとしては失格である。プログラムに合わせて人間が操作するのでなく，人間のミスや気まぐれにも対応できるような柔軟性のあるプログラムでなければならないのである。

1／2,000 という人間の不注意による単純ミスの確率はそれほど小さな数字ではない。タイピストがプロとして商売が成り立つのも，このミスの克服が一般の人では難しいからである。ワープロが普及したのも，ワープロでは，人間による単純ミスを簡単に修正してくれるからである。先日の新聞報道によると，日本のあるビール会社が輸入したある種の缶ビールの一部にガス漏れが発見されたので，この会社はこの製品を全品回収したそうだが，ガス漏れが発生した確率は0.001％だったそうである。食品の場合は，容器の不備は商品の安全性とその会社の製品全体への信頼性に影響するから，食品会社はこうした問題に極めて敏感なのである。前に，清涼飲料水のガラス瓶を製造している会社の人に聞いた話だが，清涼飲料水では1億本に1本でもキャップからのガス漏れ発見されると，食品メーカーからガラス瓶メーカーに強烈なクレームがつくそうである。比較するわけではないが，この間中国の新聞に次のような記事が載っていた。それは「北京市当局は，北京で販売されているジュース，コーラの類の衛生検査が実施した。その結果，商品の合格率は88％だった。これは昨年の82％よりもかなり向上している」というものだった。合格率が向上しているのは結構だが，今年の場合も商品の12％不合格なわけである。北京に来るお客さんが「暑いからジュースを飲みたい」とせがんでも「ま，今はよしときましょう」と軽くいなすのは，こういう理由があるからなのである。様々なミスに対する対策としては，いかにし

てミスを少なくするかという方法と，ミスが発生した時にいかにしてスムーズに現状に復帰できるかのシステム，の２つがポイントであるが，その大前提として，どの程度のミスならば許容するのか，どの程度のミスは避けなければならないのか，という判断が必要である。この判断は，技術の問題ではない。食品の販売ならば，販売戦略の問題である。野球ゲームならば，どうやったら最大の「おもしろさ」を演出できるか，というゲームの設計思想の問題である。

最近は，大人でもファミリー・コンピューターで遊ぶ人が多いらしい。画面に表示されるキャラクターの活躍に一喜一憂するのもいい。子供が無邪気に遊ぶのならそれだけでもいいだろう。しかし，運動神経の鈍くなった大人が遊ぶ場合は，そのゲームを作った人の設計思想や人間のミスや気まぐれにどう対応できるようなシステムになっているのか，をちょっと考えて，そのゲームソフトの値段が妥当なものであるのか，子供に説明してやった方がいい。そうすることが，大人としての「威厳」を保つ唯一の手段なのである。

（1988年７月15日）

季節のたより　⑭（1988年７月15日）

＊　今週も雨の日が多く，その上かなり蒸し暑くなりました。中国の人は「夜寝苦しくてたまらない」と嘆いています。我々は，これだけ電力事情が逼迫しているにも拘らずクーラーを使わせていただいているので，全然こたえません。「外人」としての特権を享受している我々も，日本へ帰れば「タダの人」で，満員の地下鉄で通勤しなければならないわけですが，その辺が，こちらの運転手さん等にはよくわかって貰えないところです。こちらの人は日本人は皆金持ちだと思っているようです。実を言うと北京に来る前，東京で生活していた時には，宿舎にはクーラーもなかったし，車も持っていないし（レンタカー主義なので），ビデオも持っていませんでした。ところが，こちらでは「日本の方はみんなクーラーや自家用車やビデオを持っているんでしょう？」と聞かれます。その度に冷汗が出ます。「日本に帰国したら，絶対ビデオくらいは買うぞ！」と今から思っています。

＊　北京の７月の雨に関しては，解放前から北京に住んでいる山本市朗さん（『北京の三十五年』（岩波新書）の筆者）が月刊誌「人民中国」の７月号で次のように言っています。「.....ところが，ここ十年らい，その北京の雨期の様相が，何か大分変わってきたんですね。あの威勢のいいスコールが，ほとんどなくなっちゃって，じめじめしとしとと降る，日本の入梅のような雨が続くようになったんですよ」。今年は，まさにその通りで，全く日本の梅雨時のような天気が続いています。

＊　先日，長城飯店で外人用の映画会があって，話題の中国映画「芙蓉鎮」（謝普監督）を上映していたので見てきました。香港・海外華僑用の漢字と英語の字幕によるものでしたが，中国語を聞いて漢字を見ていたら大体わかりました。（香港や広東の人など「普通話」（共通語）がわからない人はセリフを聞いても理解できないので，普通話のセリフをそのまま漢字で書いた字幕をつけるのです）。文革時代の激動の時代を悲劇に会いながらも生き抜いてきた庶民の話で，決しておもしろおかしい映画ではありません。ずっしりと見応えのある映画でした。何よりも，この映画が現在の中国で制作され，中国の各地で上映されている，と

いう事実そのものが感動的でした。というのは，この映画は「共産党が指導したあの文化大革命」の非人間性を庶民の立場から徹底的に断罪したものだからです。この映画に出てくる共産党員は善玉ではありません。庶民に「ああしろ，こうしろ」と指図しながら，自分も時代の波にもまれ，その中で巧く世の中を渡っていく存在として描かれているのです。こういう党員は実は今もたくさんいます。この映画は中国でのファン投票でも断トツのトップを獲得したそうですが，中国の観客もこの映画のそういう党員を皮肉った点において，一種の「痛快さ」を味わったのでしょう。（新聞の映画案内欄によれば，「芙蓉鎮」は東京でもまだ神保町の岩波ホールで上映されているようですから，興味のある方はどうぞ。一般の中国の田舎の人々がどういう生活をしているのかもわかるので結構おもしろいと思います。）

＊　前に「黄色い大地」（陳凱歌監督）も見たことがあります。この作品は，革命期の陝西省の貧しい農村地帯を描いたものです。この場合に出てくる共産党員は善玉でも悪玉でもなく，善意をもって村の若い娘を助けようとはするのですが，結局貧しさのために娘は他の村へ売られるようにして嫁に行ってしまう，という話です。共産党の力を持ってしてもいかんともしがたい，中国の絶望的な貧しさと自然の厳しさを描いた作品でした。黄土大地の遠景と民族歌謡を織り混ぜた非常に美しい映画でした。外国でかなり賞を取った作品ですが，中国国内での評判はイマイチだったようです。美しいのはいいが「痛快さ」がないので，庶民受けしなかったのでしょう。「黄色い大地」は確か３年位前の作品ですが，その後，共産党員を描くのにも，別に「善意を持って」というふうに描かなくとも，全く客観的に描いてもかまわない，というような雰囲気が映画界の中にも出てきたのかもしれません。いずれにせよ，「芙蓉鎮」を見て，中国の人々は，ちょうど日本で昭和20年代に人々が感じたような一種の解放感を感じているのかもしれません。表現したいことが表現できない社会はどんなに理想的な社会であっても，解放感は感じないものです。

＊　今，中国では，初めての原子力発電所の建設が行われています。中国のエネルギー事情は逼迫していますが，原子力発電については，ようやくその歩みを始めたばかりのところです。原子爆弾の製造に成功した後，文化大革命の影響もあって，発電のための原子力利用の研究開発が十分進められなかったために，原子力発電が他の国より遅れてしまったのです。中国は濃縮の技術は持っているわけですから，文化大革命の時期にもっと「まじめ」に原子力発電の研究開発をやっていれば，現在のように遅れた状況にはならず，エネルギー事情も少しは改善されていたろうに，と思われます。原子力の分野においても，中国はある意味で20年前の文革の時期の「ツケ」を現在払わされているわけです。

＊　中国は産油国ですが，石油は可能な限り輸出して外貨を稼ぐ政策を採っているので，国内での石油の供給は潤沢ではありません。ガソリンは配給制で，街角のガソリンスタンドでは毎日順番待ちの車が列を作っています。日本で，原子力発電を止める，というのも一つの政策の選択枝であるわけですが，原子力発電を止めたら，日本の石油の輸入量は増え，世界の石油需給は逼迫するでしょう。そうすると，おそらく中国からの輸出も増えることになるでしょう。現在のところ，中国の油田はフル生産状態ですから，そうなると中国国内向けの石油製品の供給は現在以上に逼迫するでしょう。ガソリンスタンドの行列も今より長くなるかもしれません。日本が原子力発電を止めることにしたら，中国の人はきっとこう言うでしょう。「日本がどういう政策をとろうと日本の勝手だが，せっかく利用できるエネルギーがありながらそれを利用しないのはもったいない。『持てる者』の一種の贅沢なのではないか。」

＊　「人民中国」７月号の山本市朗さんの話は次のように結ばれています。「なにはともあれ，皆が，本音を吐く世の中に変わってきた。これは好い事ですね」。言いたいことを言える，ということは，その言いたいことの内容いかんにかかわらず，ものすごく貴重なことなのです。

ディオックス（ＤＩＯＫ’ｓ）

中国はＯＥＣＤなどからは一応「発展途上国」に分類されている。１人当たりのＧＮＰが 300 ドル程度という数字を機械的に当てはめれば，そういう分類になってしまうのである。しかしながら，「中国は日本よりも『遅れた国』である」と考えるのは完全に間違っている。宇宙開発や原爆の所有等の面で「普通」の発展途上国と違うのはもちろんであるが，一般経済の面でも「遅れている」という指摘は必ずしも的を得ていない。最近では，例えば，ソ連・東欧諸国の人が中国に来た場合，中国製の電化製品をお土産に買っていくそうである。西側の製品は高くて手が出ないが，中国製のものなら手頃な値段のものがある。中国製でも，最近は西側からプラントや技術を導入しているから，結構いい性能のものもある，というわけである。ソ連と中国を単純に比較することはできないが，ソ連を米国と並ぶ「先進国」と位置付けるのならば，同じ尺度で中国を「発展途上国」に分類するのは適当ではない。

中国は社会主義国ということで，社会の最貧層にもそれなりの援助が与えられており，都市の中にスラム街のようなものはない。西側の口の悪い人は「ナニ，中国はまだ国全体がスラム街のようなものなのサ」などと言ったりするが，「最も貧しい階層・地方を切り捨てないで歩いてきたので，経済発展のスピードが遅かったのだ」という中国側の説明にはそれなりの説得力がある。

特に年配の方には，解放前のイメージが強いので，中国の旧い側面の印象の強い方が多いと思うが，毛沢東が指導した革命は共産主義革命であると同時に一種の社会革命でもあったわけで，敗戦によって大きく日本が変わったように，中国の社会も革命によって大きく変わった。それまで社会の表面に出ることのなかった女性が社会の前面に出てくるようになったのもその変化の一つである。

中国の街を歩いていて気が付くのは，バスの運転手さんに女性が多いということである。トロリーバスの場合等，電気取り入れのためのパンタグラフが何かの拍子に外れてしまうことがあるが，そういうのを直すのも女性の運転手さんがやっている。仕事上で会う人達の中にも，部長とか課長とかいうランクの職務に女性がついているのは珍しくない。また，外国との関係で宴会を行う場合も，特殊な例を除いては，中国側が夫妻で出席することはない。それは中国側の男性の幹部の夫人もそれなりの地位についている場合が多いので，夫妻で仕事上の宴会に出るのがそぐわない場合が多いからである。例えば，○○石油化学工業公司の董事長（社長）の奥さんが△△

市交通局の次長をやっていたりするので，外国の石油化学の会社が宴会を行った場合，関係のない「交通局次長」が出席するのはあまりふさわしくなくないのである。極端な場合は，奥さんの方が偉くて，例えば，その地区の共産党の書記だったりすると，奥さんを列席させることは，董事長にとってはあまり愉快なことではなくなってしまうのである。

年配の人で定年退職した人を除けば，家庭にいて家事だけをやっている女性はほとんどいない。「李さんは，結婚してまだ子供がいないんだけど，家にいるそうですよ」という話を聞けば，こちらの人は「えっ，どうしてですか？お体でも悪いんですか？」と心配そうな顔をする。妊娠中や子供が乳児期にある人を除いて，女性でも普通に働くのが，この国では普通の感覚なのである。

それは，一つには中国が社会主義国で，働く女性に有利な制度がいろいろあるからである。中国では，出産前後の出産休暇・育児休暇の制度が比較的整っているし，幼児の保育所も比較的整備されている。出産・育児休暇の制度は職場によっていろいろあるので一概には言えないが，給与の 100%を保証して6か月間程度の休暇がとれるタイプ（休暇が終わっても3年間程度育児手当てが支給される）や給与が何割かカットされ育児手当ても支給されないが3年間程度休暇をとれるタイプなどいくつかのタイプがあって，本人の都合で選べるようになっているらしい。いずれにせよ，出産・育児期間が終わったら，女性は元の職場に復帰できる。さらに，大抵の国営企業などでは，企業が保育所を持っており，学齢に達しない子供達を預かっている。また，学齢に達した後でも学校側が低学年の子供達を親の仕事が終わる夕方5時ころまで学校で遊ばせてくれるので親は安心である。

中国の人々が，女性の働くのを当然と考えるようになった背景としては，もちろん「天の半分は女性が支える」という共産党の指導理念の果たした役割が大きいが，根本的には，中国は古来農耕社会であり，全人口の中で農民の占める割合が高かった，という点も影響している。農村では，男も女も同じような労働者であり，女性は育児・家事と耕地での労働との両方を担当していた。女性が農地で働くのは当然であり，労働をしない女性は1人前とはみなされなかった。現代の中国の社会においても，そのような農村社会的な発想が色濃く残っているのである。そうした状況に加えて，最近の1人っ子政策の進展により，生涯において女性が出産・育児のために割かなければならない時間が減少したことも，女性の社会への進出の意欲を促進している。

今，日本では，夫婦とも職業を持っている子供のいない夫婦を表す言葉として「ディンクス（ＤＩＮＫ's＝Double Income No Kid）ということばが流行っているそうだが，これを当てはめれば中国の一般的な夫婦は「ディオックス（ＤＩＯＫ's＝Double Income One Kid)」である。

「ディンクス」という言葉は，ごく最近アメリカあたりから流行し出したらしいが，中国では，かなり以前から「ディオックス」という状態は常識的なものになっている。

中国の女性は，経済的に独立しているだけでなく，精神的にも男性に従属しているという感覚はない。中国では結婚しても，夫婦は元の姓を名乗って，夫婦別姓である。子供は，どちらの姓を名乗らせてもよい。男の子なら父親の姓，女の子なら母親の姓，などというように便宜的に子供の姓を決めているようである。これは，社会主義とは関係なく，中国古来からの習慣である。この夫婦別姓の習慣は，特に東北地方では，結婚しても女性は同族の列に入れず，死ぬまで生家の姓を名乗らねばならない，という意味があり，元来はむしろ女性を蔑視する考え方から来ているようであるが，中国では，日本のように結婚して改姓することによってせっかく獲得した顧客を失う，というような不合理は生じないのである。

制度的な面や，女性の意識の点からいうと，中国では日本より女性の社会進出が進んでいるが，男性側からの意識の点から見ると，日中間ではさほど違いはないようだ。男性が家事や育児をあまりやりたがらず，女性にまかせっ切りにしようとする傾向は中国でも同じである。特に開放政策の進展によって，経済活動が活発化し，残業時間も多くなるにつれ，家事・育児の負担は女性の肩に大きくかかるようになってきている。若い奥さんが御主人の誕生日のプレゼントとしてエプロンを送った，などという笑い話もよく聞く。

中国では，同じ職種ならば男女間の賃金格差はない。従って，労働者を雇用する企業の側から純粋に経済効率の着目して見ると，女性は例え有能だとしても出産・育児休暇を取る可能性があるから，同じ能力ならば女性を採用するより男性を採った方が企業にとっては有利である。経済改革が進み，企業の独立採算制が強化され，労働者の雇用に関する自主権も拡大するにつれて，女性の採用を嫌がる企業が多くなって，最近社会問題化している。また現在までの「男女の機会均等」を厳密に検証してみれば，多くの企業で課長，部長クラスの女性はたくさんいるものの，社長クラス以上のトップはほとんど男性である。先の全人代で選出された，国務院の各部長・主任（大臣）のリストを見ても，41人の部長・主任のうち女性は２人だけである。しかも，その２人も紡織工業部長と国家計画生育委員会主任であって，この２つの役所は女性に縁の深い部署である。その他の「普通」の部署には女性のトップがいない。いわゆる革命第一世代には，女性のトップも結構いたが，世代が替わって，いわゆるテクノクラートの時代になると，女性のトップの数が減ってきているように思える。

中国のテレビのコマーシャルを見ていると，洗濯用洗剤や食器洗いの洗剤のＣＭでは，若い女

性がエプロンをしてニコニコしながら洗濯や食器洗いをやっている。冷房・暖房兼用の空調器の宣伝では，冬に男性が外套の雪をはたきながら家に帰って来たり，夏に炎天下の外から汗だくで家に帰って来たりすると，家で待っていた女性が優しく空調機のスイッチを入れてこれを迎えるシーンが流される。洗剤のＣＭでは，ヒゲ面の「おっさん」が出演するよりも美しい女性が出てきた方が商品の売行きはよくなるだろうということは理解できるし，空調機のＣＭにはコマーシャル制作者の「願望幻想」が出ているような気もするが，「家庭内での平等」を主張する立場からすればちょっとクレームがつきそうなＣＭである。こういうＣＭがなんの抵抗もなく流されるところに，中国における時代の流れを感じる。ある意味でこれも「西側かぶれ」の一つかもしれない。

一企業にとっては女性が労働生涯の一時期，出産・育児休暇を取ることが経済的な不利益を呼ぶのだとしても，社会全体からみれば，女性の社会への進出は有益であることは間違いない。現在の中国の「ディオックス」達のライフスタイルが，21世紀の世界において中心的なものになるのかどうかはわからないが，典型的なライフスタイルの一つになるだろうということは想像できる。中国でも，仕事の都合による夫婦別居の問題など，様々な問題が生じている。日本として，お隣の国の先進的な部分に注目することも，これからの社会を考えて行く上で大いに参考になるだろうと思う。

（1988年７月22日）

季節のたより　⑮（1988年７月22日）

＊　今週も雨。いったいどうなっているんでしょうね，今年は。聞けば（同じ気団が日本へ流れているので当然ですが）日本の梅雨空けも遅れているようです。ほとんど高低差のないこの華北平原に，こう毎日どしゃ降りが続いたら，本当に洪水が大丈夫か心配になります。古来，「黄河を治めた者は天下を治める」という言葉がある通り，平原地帯での洪水対策は，旧くて新しい問題です。

＊　７月10日から月極めタクシーが値上げになりました。距離単価は１キロ 0.8元から 1.2元（１元＝35円）と50％の値上げですが，カークーラー付きの車だと，なぜかこれに30％の「サービス料」が追加されます。だから，結局は約２倍の値上げなわけです。こちらの値上げは，郵便料金にしろ，国際電話料金にしろ，ドラマチックに値上げするので「しのびよる物価高」という感じはしません。鉄砲水のようです。北京発東京行きの航空運賃（北京で購入した場合）も８月１日から値上げになります。（エコノミー往復 3,336元→ 3,670元（10％の値上げ））。

＊　最近，友誼商店で，日本の講談社文庫を売出しはじめました。これまでは，角川文庫のちょっと旧い版のが売っているだけでしたが，講談社シリーズは吉川英治の「三国志」や「宮

本武蔵」，山岡荘八の「徳川家康」などがまとまって売り出されました。外国にいると日本語の本は貴重です。新聞・雑誌類は容易に手に入りますが，単行本や新書・文庫などは入手できません。ＯＣＳなどで，新刊書の広告等が新聞の折り込みで送られてきますから，それを見て日本から送ってもらうことはできるのですが，本屋にぶらっと立ち寄って，パラパラとページをめくって気に入った本を選んで買う，という楽しみは，どんなに情報化社会になっても，外国にいる限り無理な望みです。ちなみに「宮本武蔵」第１巻は定価 530円のところ北京では28元(980円相当）で，約85％割高です。ま，日本からの輸入商品としては，こんなところでしょう。なお，蛇足ですが，日本たばこの「マイルドセブン」は日本では１個 220円だそうですが，こちらでは 3.5元（約 123円）と約半値です。日本で買っている皆さんは「タバコ消費税」を日本国に納めているわけです。また，スコッチ等外国の酒類も中国では，日本の免税店で売られているのと同程度の値段で買えます。中国では，一般国民と外国人との実感物価が掛け離れており，輸入関税をかけなくても，一般の中国人には外国のお酒は高くて買えないので，税金をかける必要がないのです。諸外国は「日本の市場は閉鎖的だ」と非難しますが，北京にいると，そういう非難もそう的はずれではないかもしれないなあ，と思います。ま，日本には，国内で，いろいろ事情があるのでしょうけれども....。

野菜の話

北京に駐在していると言うと，よく「おいしい中華料理が毎日食べられていいですね」と言われる。中華料理がおいしいかどうかは好みの問題だが，野菜にしろ卵にしろ中国では料理の素材自体が意外においしい，とは思う。よく「日本料理は素材の味を大事にする料理です」というが，中華料理も素材の味を大事にする，という点では同じである。例えば，野菜炒めにニンニクを入れる場合，こちらの一般的な方法では，野菜を炒めた後，最後にスライスしたニンニクをサッと入れて火を止める。これは生ニンニクの野性的な風味を生かす方法である。日本では一番最初にニンニクを炒めたり，「おろしニンニク」を使ったりするが，そういうやり方をすると，ニンニクの成分が酸化されてあの独特の嫌な匂いになってしまう。ニンニクが本来持っている風味を生かすには，あまり火を通さない方がよい。こちらではギョウザにニンニクを入れることもあまりしない。臭みが出てしまうからである。ニンニクの好きな人は，ギョウザを食べながら生ニンニクを丸ごと噛るそうである。こちらの料理で「おいしい」と感じるのは，味付けの問題よりも素材の味が生かされている時である。野菜炒めでも，調味料の味ではなく，野菜自体からほのかに甘みを感じるような味に仕上がっている時が一番おいしいと思う。

概して，中国の野菜や果物は，その素材自体が日本のものよりもおいしいのではないか，と感じることが多い。「外国人はいつもいわゆる『外人用』のレストランで食事をしているので，一般の中国人が食べているのとは違う高級なものを食べているのでそう感じるのだ」と言う人がいるかもしれない。それはある面では事実である。しかし，路端で売っている自由市場のスイカなどは，一般の中国人と同じものを買うが，日本のと比べると甘みが強くておいしい。冬のサツマイモもおいしかった。甘みが強くホクホクしていて，色艶までいいような気がした。サツマイモは中国でもあまり上品な食べ物とはみなされておらず，いわゆる「レストラン」では注文しても出てこない。街に売りにくる近郊のお百姓さんから買うのだが，なぜか日本で食べるものよりおいしいと感じた。これはどうも農業のやりかたの問題に関係してくるらしい。

中国でも都市近郊ではビニール・ハウスがあり，冬でもキュウリやトマトを食べられる。しかし，基本的には，街の自由市場には，その季節，季節の野菜が並ぶ。竹園賓館のレストランのメニューには「炒青菜」という料理があるが，これを注文すると日によって出てくるものが違う。冬は，日本でいう「チンゲンサイ」のような青菜や白菜が出てくるし，春から夏にかけてはキャ

ベツが出る。夏にはキュウリの炒めたのが出ることもあるし，名前をよく知らない「ドクダミ」のような独特の野菜が出ることもある。要するにコックさんがその日安く買ってきた野菜を出すわけである。この辺は客の自由はきかないわけで「キャベツが食べたい」と思っていたのにキュウリが出てきたり，「チンゲンサイが欲しい」と思っていたら「ドクダミ」が出てきたりするわけである。客はレストラン側の御都合と御意向に従うほかはないのである。欲しい野菜がない，というのは，一面では不便なわけだが，ある一面では，いつでもその時期の一番安い野菜，即ちシュンのものが出てくるわけで，それはそれで結構なものである。どうやら，中国に来て料理の素材がおいしいと感じるのは，「いつもその時の一番安いものを出す」という行為を通じて，結果的に常にシュンのものを食べているからしい。野菜類は，品種改良をやったり，ハウス栽培の技術が進歩したりするよりも，やはりシュンの時期に食べるのが一番おいしいようだ。

今はスイカのシュンの時期で，街のあちこちでスイカが山積みになって売られている（1㎏で0.4元（14円）程度）。日本ではスイカはかなり品種改良も進んでいるし，様々な栽培技術の改良も行われているが，それでも中国のシュンのスイカの方がおいしいと思う。スイカはもともと西域の野菜で，昼と夜の温度差が激しい乾燥地帯に育つ植物である。スイカの甘みにはこの温度差が非常に重要な役割を果たすらしい。日本では，昼夜の温度差が少なく湿潤な環境でも甘みが出るように多くの人が品種や技術的な改良を行ったのだろう。しかし，それでも本当のおいしさは，その野菜が生まれ育った土地の気候ではないと出ないように思われる。

日本では，世界各地の野菜や果物を持ってきて改良し，しかもシュンをずらして出荷するようにしている。いろいろなものは食べられるのは結構だが，シュンのおいしさからは却って遠退いてしまったような気がする。中国では，まだハウス栽培ものは贅沢品である。中国の人に言わせれば，何も高くて味もよくない時期はずれのものを食べる必要はないのであって，時期ものを安い時に買えばよいのだ，ということになる。

もっとも，生産者の立場を考えれば，ある種の野菜がある特定の時期に一斉に市場に出回るというのが好ましくないのは確かである。冬の白菜にしろ，夏のスイカにしろ，中国では，ある時期になると特定の野菜が街に溢れんばかりに出回る。値段もかなり安くなるので，道端に山のように積まれて売り出される。サツマイモなど1㎏で 0.1元（約 3.5円）くらいである。消費者としては安いのは有り難いが，ちょっと農家の人が気の毒になる。農家の生活向上を計ろうとしたら，やはりシュンの値崩れを防ぐことが最も重要なのだろう。日本でも農家の経済効率を向上させるため「シュン」の概念が段々薄弱なものになっていったのだと思われる。

北京で売られている野菜や果物は，泥のついたままのものや虫の食ったものが多い。農薬がまだ普及していないということもあるが，基本的に中国の人はそういうのをあまり気にしないのである。虫の食ったものは買う時に選別すればよいのだし，泥は自分で洗い流せば何でもない，というわけだ。中国の人はかなり細かく店を選び時間を掛けて品物を選ぶ。外国人は言葉もよくできないし，行きつけの店もないので，外人用の友誼商店などで買うことが多いが，国営の友誼商店には，ハッキリ言ってロクなものは置いていない。国営の流通ルートでは品質にはあまり関係なく1kgいくらで値段が決まるから，品質のよいものは国営ルートには乗らない。いいものは優先的に自由販売ルートに乗るのである。その方が農家としては儲かるからだ。その上，国営ルートの販売店では売れようと売れまいと従業員の給料に影響しないから，概して品質管理が悪い。従って，野菜や果物のように国営ルートと自由販売ルートの両方のルートで同じように流通している品物は，断然自由販売ルートの方が安くていいものがある。中国の人はその辺をよくわきまえていて，慎重に店を選ぶ。

外国人の駐在員で単身赴任している人は，あちこち店を回って選ぶ時間はないし，1元や2元値段が高くても構わない，と思っているので，つい国営の友誼商店などで買う機会が多くなる。友誼商店は国営とはいっても外人用だからかなり品質はよく，泥など落としているが，やはり管理が悪くて萎びてしまったような野菜や果物が多い。したがって，選んだり洗ったりするのが面倒で，少しぐらい高くてもいいから生きのいい洗浄した野菜が欲しい人は，合弁ホテルの中の外人用スーパーマーケットへ行く。合弁ホテルはきっちりと消費者のニーズを把握しているから，日本と同じように，虫の食っていないものを選んで泥を洗ったものをラップで包んで売っている。ただし値段は普通の店の倍ぐらいする。中国の人から見ると，贅沢というよりは，同じ野菜や果物を倍の値段で買うなんて理解できない，ということになる。

外人が外人用スーパーで野菜や果物を買うのをいぶかる中国の人達の気持ちは理解できるが，外人の立場から言わせてもらえば，外人の知りうる範囲内には，虫の食っていないリンゴや泥の付いていない生きのいいホウレンソウを売っている店などないのである。同じリンゴならやはり虫の食っていないのを食べたいと思うのが人情である。そのために少しくらいお金を払ってもいい，とも思っている。今，日本では，管理された農業への反省から「有機肥料栽培」とか「無農薬野菜」とかが脚光を浴びているようで，虫食いリンゴも自然な証拠だとして評価されるのかもしれない。が，北京の国営商店で手に取るリンゴがことごとく虫食いだったりすると，「虫の食っていないリンゴが食べたい！」と叫びたくなる。少しひがんだ見方をすると，「有機肥料栽培

で無農薬で栽培すべきだ。少しくらい虫食いがあってもいい」というのは，ハッキリ言って金持ちの贅沢遊びのような感じがしないでもない。「有機肥料」と聞くと，その辺をパカパカ走っている馬車（マチャー）に積んである肥桶を連想してしまうのがいけないのかもしれない。

中国は，化学工業がようやく発展して農薬や肥料が広く使われるようになった段階に来たところである。10億の人々がようやく食べることに対する心配から解放されて，面白いテレビが見たいとかきれいな洋服が着たいとか思う余裕が出始めたところである。しかし，生活に余裕が出てきても，中国の人々は「冬にキュウリが食べたい」とか「夏にミカンが食べたい」とか思うことはあるまい。彼らは，時期ものの食べ物をおいしく食べるのが一番の贅沢だ，と考えているからである。基本的に中国は農民の国である。時代が変わっても，人々は毎年の季節のサイクルの中に順応しながら暮らしている。本当の「おいしさ」とは，そういう自然に密着したサイクルの中にあるように思う。日本では最近「グルメ・ブーム」なのだそうだが，この中国の広い大地の中で生活していると，その「ブーム」も単なる空騒ぎのように聞こえてくる。

（1988年7月29日）

季節のたより　⑯（1988年7月29日）

＊　上海はじめ華南の各地は相当な猛暑のようですが，幸い北京はそれほどでもありません。その代わり毎日，雨，雨，で湿度が高くてやりきれません。これでは東京と同じです。もっとも今年の東京は冷たい雨ばかりで夏の日差しがない，とか，まだセミの声を聞いていない，とか異常気象のニュースが伝わってきます。その意味では，北京はちょっと雨が多い感じですが，セミしぐれは五月蝿いくらいですし，それほど「異常」という感じではありません。

＊　今週も値上げがありました。今度は酒とタバコです。日本の「柔和七星」（マイルドセブン）が1個 3.5元から 4.5元に値上がりしました。マオタイ酒をはじめ中国酒も上がりました。最近は，街中にかなり物価値上げに対する不満が蓄積しているようで，酒とタバコの値上がりに際して，当局は「今年はもう値上がりの予定はない」と発言して，市井の不安を消そうとしていました。この夏は，このほか，利用が逼迫している一部の路線の国内航空運賃について，中国人の運賃を外国人と同じに引き上げる（国内航空賃の外国人値段は内国民の約3倍）処置が取られました。個人の金で飛行機に乗る中国人はいませんから，これは個人の懐には響きませんが，企業活動にはある程度の制約効果があるでしょう。更に，先日，経済日報に「鉄道運輸の状況が逼迫していて，切符もまともに買えない状況だが，これは鉄道運賃が船や自動車に比べて安すぎるせいである」という記事が載っていました。ということは近々鉄道運賃の値上げもあるのかもしれません。

＊　日本の人は物価高には慣れっこですが，中国では解放後それほどの物価値上げを経験しておらず，今年のこの値上げラッシュはかなり人々を驚かせているようです。値段が上がったといってもモノは十分にあるので，そう大きな騒動は起こるとは思えませんが，中国製品の輸出競争力にはかなり影響が出そうです。ハッキリ言って，中国の製品は安いところが魅力

なのであって，韓国製や香港製と同じ値段だったら誰も買わないでしょう。日本は今かなり景気がいいようですが，第二次石油ショック以後，日本経済がそれなりに健全に推移してきた背景としては，中国が開放政策を採って経済規模を拡大してきたことも小さくはないと思います。中国の現在の賃金・物価政策が失敗して，輸出が激減し，中国経済が全体的に弱体化したら，日本経済もかなりの影響を受けると思います。来年は日本経済もかなりの落ち込みを経験するかもしれません。

＊　中国でも７月15日前後から９月初旬まで学校は夏休みです。そのためこのところ平日の昼間でも街を歩いている小中学生をよく見掛けます。会社や政府機関には夏休みはありません。ただ，この時期になると共産党関係を初め多くの機関が渤海湾沿岸の北載河などで会議を開きます。北載河は海辺のリゾート地で，解放前は外国人や資本家がよく行ったところだそうです。会議をやりながら夏休みをやるようなもので，ちょうど日本で軽井沢などで「○○研修会」をやるのと同じ発想です。一般の機関や公司は夏休みはありませんし，日本のようなお盆の習慣もありませんが，夏の期間は就業時間が 8:00 ～15:00 までに短縮になります（普段は 8:00 ～ 17:00）。暑くて夜眠れないので職員の健康を維持するため，というのがその理由です。規則で決まっているわけではないようですが，ほとんどの機関が運用でやっているようです。中国では，規則できっちり枠をはめる，ということをせず，各職場の実情に合わせて「運用する」ということが多いのです。社会全体がそれでスムーズにいっているわけですが，この「運用」というのが外部の人間にはわかりにくく，なんとなく不透明な印象を与えてしまいます。

＊　中国では，土曜日の午後は，多くの職場では「学習」の時間になっていて，共産党の文献などを「学習」することになっています。昨年の党大会の前には，本当に「○○○共産党委員会第××回大会勝利開催！」などとタテ看板を立てて「学習大会」を開いている職場を見掛けたこともありますが，全ての職場で毎週まじめにやっているかどうかは若干疑問です。どうも話を聞いてみると，表向きは「共産党の歴史を学ぶ」ということになっているが実はみんなで戦争映画を見に行った，などいろいろあるようです。その辺は正に「運用」なわけです。毎週しかつめらしい顔をして「学習」している人達よりは，毎週「運用」によって映画を見に行っている人達の方が付き合い易い気がします。こう考えると「運用」というのもあながち悪いことではないなあ，と思えてきます。

＊　最近，当事務所にもいろいろダイレクトメールが来るようになりました。供給過剰気味のオフィスビルからテナント募集の案内も来ますし，先日は「タクシー代が値上げになりました。タクシーを毎日借り上げるより，日本車を輸入した方がお徳です」という日本の輸出代理店からの手紙が来ていました。今も服務員がメールを一つ持って来ました。「日本平和友好訪中団」の一員として歌手のチョーヨンピルさんが北京に来るので，レセプションに出ませんか，という招待状でした。商売や催し物がいろいろ自由にできる，ということは結構なことです。特にチョーヨンピルさんは韓国人ではありませんか。（「なぜチョーヨンピルさんが『日本平和友好訪中団』の一員なのか」などとかんぐるのはこの際野暮というものです）。台湾の人も実質的には（第三国を経由すれば）自由に北京に来れる御時世ですから，韓国の歌手が北京に来ても何の不思議もありませんが，いろいろな分野の人が出入りできる，というのは楽しいことです。開放が進んで，中国の公司からも当事務所にダイレクトメールが来るようになれば，中国の開放路線も本物ということになるでしょうが，今のところほとんどありません。中国の公司からのダイレクトメールは，中国国際旅行社からの外人用国内パック旅行の案内くらいです。印刷屋さんから「名刺，各種印刷承ります」というのが１つ来たような気もしますが，その他はほとんど印象には残っていません。

＊　いずれにせよ，物価値上げとか，いろいろありますが，世の中全体としては，ソフトな方向へ向かっていることは確かです。土曜日の午後の「学習」の時間も，数年のうちにはなくなってしまうでしょう。中国の物価と賃金の上昇も，結局は中国と外国との経済的なミゾを埋めるために必要なことなのです。次の世代の自由で開放的な社会を作るための「産みの苦しみ」と言えるのかもしれません。

旅行中に病気をしない方法

本社から来られた理事御一行と一緒に瀋陽で行われた会議に出席したら，途中でお腹をこわして下痢をしてしまった。中国に駐在していながら，面目ない次第である。同行された方々に御迷惑を掛けてしまった。この場でお詫び申し上げる。

健康にはそれなりの自信はある方だった。北京に駐在して2年近くになるが，北京で病気らしい病気になったのは1度カゼをひいたくらいである。それも1日寝ていたらすぐに直った。北京にいるときは何ともないのだが，地方へ行くと何かと体調を崩すことが多くなる。日本から出張で来た時や，プライベートな旅行も含めて，中国国内の地方旅行は8回経験があるが，そのうち，今回の瀋陽行きも含めて3回病気になっている。1度は上海から約 100kmはなれた江蘇省の南通へ行った時で，片道8時間楊子江を船で上り下りしたのだが，船の旅が珍しくてずうっと甲板にいたらカゼを引いて熱を出してしまった。もう1度は河北省の石家庄へ行った時で，この時は車の中で飲んだ缶ジュースが悪かったらしく，中国側の人も含めてジュースを飲んだ人全員が下痢をした。もっともこの時は，日が暮れてから，ちょっと道端のとうもろこし畑を失敬して用を足したらすぐ直ってしまったので大したことはなかった。今回の瀋陽行きでは，異常気象の影響か，瀋陽ではいつになく気温が高く蒸し暑かったところへ持ってきて，宴会の時に出た氷に当たったらしく，かなり強烈な下痢に悩まされた。中国側から「黄連素」という漢方薬を貰ったら何とかよくなった。旅行中に病気になると，スケジュールも詰まっているし，やらなけらばならないことも多いので辛いものである。同行の人にも迷惑を掛けてしまう。

北京にいる時はなんでもないのに旅行に出掛けると病気になる確率が高いのにはいくつか原因がある。

1つはスケジュールがタイトなことである。遊びにいく場合は別にして，仕事で出張する場合は，会議とか視察とかやらねばならないことがびっしりスケジュールに組まれており，その上接待側の人は「せっかくここまで来たのだから」とその土地，その土地の名所・旧跡を案内したがる。こちらも「そう何回もこれないのだから」と無理していろいろなところを回ろうとしてしまう。その上，日本から来る場合を考えると，時差がない（夏は0，冬は＋1時間）ので，日本からの行き帰りの移動日にも会議や宴会のスケジュールを組む場合が多い。このため時差のある国よりも，却ってスケジュールがきつくなるようである。

2つ目は宴会が重なることである。中国ではお客が来たら宴会をやってもてなすのが礼儀であり，お客の方も答礼の宴会をやるのが一般的である。宴会は「もてなし」とは言っても相手方との意思疎通をスムーズにするための仕事の一環である。地方を点々と移動する場合，原則として各地点で歓迎宴と答礼宴があるから，ほとんど全ての食事が仕事の場と化してしまう。会議室を離れて相手方とテーブルを囲む，というのは確かに有益なのだが，宴会が続くと「メシくらい仕事を離れた場で食べたい」という思いが募ってくる。しかも，中国の宴会の場合，招待側が歓迎の意を込めて，最高級の料理を大量に出してくる上に，「皆様の健康を願って」とか「日中友好のために」とかいろいろ名目を付けて「乾杯（カンペイ）」をやる。中国式の乾杯は，アルコール度40～60％の白酒（バイジュウ）を本当に「乾す」ので，あまり飲めない人にはこたえる。地方に旅行する場合，これが毎日，毎日続くので，ほとんどの人の場合，胃腸の受容能力を超える。宴会の機会の多い中国側の幹部の方を見ていると，ちゃんと食べる量も飲む量もセーブしている。慣れない外国人の場合，その場の雰囲気に合わせて飲んだり食べたりしてしまうので，胃腸の負担が過大になるのである。

3つ目は，特に地方はやはり生活施設や衛生の点で少し劣るということである。探鉱現場など，本当の「田舎」に行く時はこちらもそれなりに警戒しているからさほど問題はないが，地方都市に行く場合，警戒心が薄いとやられてしまうことが多いようだ。中華料理はほとんど熱を加えたものばかりだから，料理だけを食べている分にはまず心配はない。ジュースとか氷とか冷たいものが要注意である。また，料理を食べる時には食器の衛生状態には気を付けた方がいい。かなり名の通ったレストランでも，出された食器に中に洗った時の水が残っている時がある。これは布巾で拭いた時にばい菌が付かないようにわざと拭かないで出すからのようだが，あまり気持ちのいいものではない。気に入らなければ，ナプキン・ペーパーで食器を拭いてもよい。日本人はレストランの人に失礼だと思って遠慮することが多いが，この際遠慮することはない。中国の人も気に入らなければ堂々と食器を拭いている。その際，食卓に出ている酢を食器に入れて拭くと殺菌効果が上がるそうだ。この酢で拭く方法は方法は中国の人から教わった。こちらの人はそれなりに自衛のための手段を心得ている。中国に来る人で，本当の庶民の味を知るには街の小ぎたない食堂に入るのが一番，などと言って，大衆用の食堂に入りたがる人がよくいるが，これはあまりお勧めできない。中国の人でも自分の行きつけの店でない限り，あまりそういう店には入らない。毎日，職場の職員食堂で食事をする場合も，みな自分専用の食器を持っていて，それを持って食堂へ行く。中国の人自身も普通の食堂の食器や箸の洗い方をある意味で信用していないので

ある。北京に駐在していても，露天で売っている焼き鳥や春巻き，アイスクリーム等は食べない。だからである。時々，こちらに出張にくる人に付き合って，アイスクリーム等食べることもあるが，内心はいやいや食べているのだ，ということをこの場で申し上げておきたい。

東京の夏は蒸し暑いので，カやハエ，ゴキブリなどはたくさんいるが，東京に比べたら北京ではこれらの害虫はあまり多くない。解放後，大々的に駆除作戦が行われたためだと言われているが，東京に比べれば湿度が低いので，元もとあまり多くないのかも知れない。ただし，人々の衛生意識は残念ながらイマイチという感はまぬがれない。道を歩いていて，平気で痰を吐くし，手鼻をかんだりする。当局は躍起になってこういう習慣を撲滅しようとしているが，まだまだ道のりは遠いようである。

中国全体としては，衛生状態ははっきり言ってよくないと思うが，その割には肝炎とかその他の伝染病などの重大な病気についてはそれほど心配はしていない。中華料理では，一部の野菜や果物を除き，絶対になまものは食べないからである。今年の冬，上海でＡ型肝炎が大流行したが，これは貝類をさっとあぶって表面だけ熱を通した状態で食べる上海人特有の習慣が災いしたようである。要するに，各人がちゃんと自衛手段をとっていれば大丈夫なのである。

万一病気になっても，北京にいる限りそれほど心配はない。首都病院にはかなりの設備があるし，外人の扱いにも慣れている。また，日本の無償援助で建てられた中日友好医院（日本人同士では「日中友好病院」といっている）もあり，ここにはＪＩＣＡの協力により，日本語のできる看護婦さんがいるので，いざとなれば頼りにできる（もっとも，あくまで「中日友好医院」は中国人の診療のために建てられたのであり，北京在住の日本人があたかも自分のものであるかのように利用するのは好ましくない，というのが大使館やＪＩＣＡの気持ちのようだが）。本当にどうしようもなくなれば，飛行機に乗れば４時間で成田へ着くのだから，他の外国にいるよりは安心感がある。こういう安心感があるので，却って北京にいる時は病気をしないのかもしれない。

今回，瀋陽に行って体調を崩した原因の一つに，東北地方にしては異常な蒸し暑さがあった。中国では電力事情が厳しいから，公的機関であっても，特別な貴賓室以外は冷房は入っていない。また，暑い期間が短いから東北地方を走る列車にはそもそも冷房装置が付いていない。そのために暑さがモロに体に影響したらしい。健康管理にはそれなりに自信があったつもりだが，北京での冷房付き・事務所専用自動車付きの生活に慣れてしまって，意外に体の適応能力が弱くなってしまっていたのかも知れない。それにしても，６月に広西チョワン族自治区へ行った時の方がスケジュール的にはきつかったし，暑さも厳しかったはずだが，この時は何ともなかった。「南の

方は暑い」という警戒感があったからだろう。今回は「東北地方は涼しいはずだ」という油断があった。病気というものはちょっとした油断に付け込むようだ。その意味で，何かと教訓の多い今回の瀋陽行きだった。これからは油断せず，付け込まれないようにしようと思う。

（1988年８月12日）

季節のたより　⑰（1988年８月12日）

＊　７月29日に上海の錦江飯店で日本人旅行者が殺されました。金目当ての犯行だったようです。これだけ日本人観光客が増えればいつかは起こるとは思っていましたが，やはり若干ショックです。今まで，解放後の中国で日本人が殺人事件に巻き込まれたことはありませんでした。中国が「普通の国」となった今では殺人事件があっても何の不思議もないわけですが，事件のあった錦江飯店というのは，上海の民族系（合弁でない）ホテルの中でも由緒のある最高級クラスのホテルです。東京で言えば，帝国ホテルとかホテル・オオクラとかいう感じです。私も泊まったことがあります。事件の現場が街外れの場末の安ホテルでなかったところに，やけに身近なものを感じます。

＊　それにも拘らず，中国は世界で最も治安のよい国の一つであることは確かです。中国にパック旅行で来る場合，添乗員の人は団体のメンバーに「明日の朝８時までに預けるトランクを自分の部屋の外の廊下においておいて下さい。後で係員がまとめて空港まで運びます」などと説明します。そしてメンバーは荷物をホテルの廊下に置いたまま午前中の観光へ出掛けてしまうわけです。一時「いくら中国でも荷物を廊下に置きっぱなしにするのは危険だ」という話もありましたが，現実的には今もこういうことは行われているようです。旅行のプロたる旅行社の添乗員が言っているんだから，これで問題はないのでしょう。飛行機に乗った際にロスト・バゲッジになった，という話も中国国内では聞いたことがありません。反対に以前「不要になった荷物や袋をホテルの部屋に置いていくときは，大きな字で『不要』と書くようにして下さい。そうしないと，服務員が忘れ物だと思って，空港まで追い掛けて持って来てしまいますから」と言われたことがあります。開放体制が進むにつれ，こういう牧歌的な風景は段々なくなっていくのでしょう。「ホテルでドアをノックされても，誰か確認するまでは開けてはいけない」という忠告は，これからは中国でも実行した方がよさそうです。

＊　今，北京では流行性病毒性結膜炎（通称「紅眼病」）が大流行しています。実は，当事務所のある竹園賓館の服務員の中にも４～５人かかって休んでいる人がいるので，こちらも戦々恐々としています。細めに石鹸で手を洗うようにするとともに，タオルは自分専用のもの使わないようにしています。北京市内には市民用のプールがいくつかありますが，最近はみんな結構生活に余裕があるので，プールに行く人も多いらしく，それでかなりの流行になっているようです。竹園賓館の服務員の間に流行しているのは，みんなホテルで（つまり職場で）シャワーを浴びるからなのです。今，心配なのは，私が瀋陽へ出張している間，私の部屋のシャワーを服務員が使っていなかったかどうか，ということです。事務所のビデオはいじられて壊されると困るので，テープでしっかり封印していきましたから大丈夫でしたが，部屋のシャワーのことまでは考えが及びませんでした。ある意味で，彼らにとって私も外国人ですから，彼らも外国人の使うシャワーを使う気にはならないかもしれません。（もっとも，私の部屋のバスルームのトイレは出張中に使われた形跡がありました。形跡というよりは，トイレの床に私がとっていない中国の新聞が落ちていたのです。用を足しながら読んでいたのでしょう。お客の部屋のトイレを使うのはいいとして，読んでいた新聞をそのまま放ったらかしにしていくところなどは，ちょっと日本人にはマネのできない神経の図太さです）。

私としても「結膜炎になったら，その時はその時よ。結膜炎で死ぬことはあるまい」と思うことにします。回りの人々がみな図太いのに自分だけ神経細やかになるのはバカげた話です。

＊　北京事務所のある竹園賓館では，係の人に，テレックスは重要だから，テレックスが入ったらすぐ連絡するように，といってあります。このホテルの人はテレックスの重要性をよく知っているので，テレックスが入った時はすぐ知らせてくれます。ただし，平川，渡辺，動燃，といってもこちらの人は［Pingchuan］［Dubian］［Dongran］だと思っていますから，HIRAKAWA，WATANABE，PNCといっても何のことかわからない場合があります。ですから，当事務所へテレックスを打つ場合は ROOM NO.401を必ず付けていただきますようお願いいたします。（もっとも，もう事務所を設置して２年以上になるのでフロントの方でも心得ていて，宛先のわからないテレックスが入った時は，まず「お宅あてではないか」と聞いてきます。

北京という街

中国国内のそれほど多くの地方を旅行したわけではないが，それでも１泊以上した場所の数は北京も含めて16か所になる。最近ではどの街に行っても，なんとなくどこも同じような感じに思えてあまり新鮮味を感じなくなってしまった。中国の街についてどこでも共通して当てはまる言葉がある。それは「雑然としている」ということである。東京や大阪だって雑然としているのは同じだが，日本の場合，歴史のある地方の都市に行くと，なんとなくしっとりと落ち着いた感じを受ける場合があるが，中国の場合，地方の小さな街へ行っても，小さいなら小さいなりに雑然としている。好意的に言うと「庶民の活気があふれる」とか「親しみの持てる」とかいう形容詞がつくわけである。どこへ行っても活気がある，人間の生活臭がある，というのは悪いことではない。

北京もそうした多くの中国の街の一つである。市の北東部にある北京空港から市内までの約30㎞の道はほとんど一直線で切れ目なく緑の街路樹が続いている。市内に入ると，まず第３環状路と交差するが，この交差点は北京の中でも一番立派な立体交差になっていて，まわりには最近建てられたばかりのアパート群が並んでいる。このため，初めて中国へ来て，空港から第３環状路に入りそのまま合弁ホテルに入ってしまうと「へ～っ。中国っていうのも中々整然としたところですね」という感想を抱くのである。動燃の関係者はもっと「庶民的な街」にある当北京事務所に来るから，幸いなことに，それだけの感想で終わってしまうことはない。「庶民の活気がみなぎる」朝夕の自転車通勤風景も「親しみの持てる」「生活臭のあふれた」自由市場の雰囲気も，好むと好まざるとに拘らず，経験することができるのである。

行政区域としての北京市はかなり広い。北京原人の発見された周口店や万里の長城のある八達嶺なども全て北京市内である。東京の場合の「都」と同じだと考えればよい。この周辺部も含めた北京市の人口は 975万人，市街地部分だけの人口は 655万人である（1986年末現在）。年平均気温は11.5度（東京は15.3度，以下（　）内は東京の値），１月の平均気温－4.6度（＋4.7度），８月の平均気温24.4度（26.7度），年間降水量644(1,460)，年間日照時間数 2,780時間(1,942時間)(いずれも1951年～1980年の平均）。冬少し寒くなりすぎることを除けば北京は気候的には暮らしやすい街である。人口密度は 580人／㎢（東京は奥多摩地区や伊豆諸島を含めても 5,402人／㎢）。生活する上で東京よりは相当に楽である，はずである。しかし，実際にはそうではない。

経済の発展の程度が違うのだから，東京と北京を比較するのは無意味な話だが，気候や人口の話が出たついでに事実だけを書いて置くことにする。まず，北京には日本の大都市にあるＪＲや私鉄の電車に相当するものが全くない。地下鉄が環状線と東西線の２路線あるだけである。路面電車もない。あるのはバスとトロリーバスだけである。市民は地下鉄，バス，トロリーバスに乗るか，そうでなかったら自転車で通勤する。東京で山の手線と中央線を除いて他のＪＲ線と私鉄を全てなくしてバスしかない状況を想定してみれば，これが大変なことであることがわかるだろう。北京がこれでなんとかやっているのは自動車が少ないからである。北京の自動車の数（軍用を除く）は 184,503台で東京の20分の１である（東京は 3,655,721台）。しかもこのうち自家用車（外国企業，外国人駐在員が所有しているものも含む）は 5,122台しかない（数字は北京が1986年，東京が1987年３月31日現在）。通勤による車のラッシュはないのである。それが証拠に，北京でも月曜日の午前中は車の渋滞が起こることがあるが，それは８時前後ではなく，各事業所が活動を開始した後の10時ごろである。ほとんどの人が自転車通勤だが，自転車による通勤距離はせいぜい15kmくらいが限度である。それ以上だと北京には坂道がないとはいってもかなりしんどい。北京市当局は現在郊外にどんどん立派なアパート群を建てているが，設備が充実しているわりにはあまり人気がないそうだ。それは時間通りに運行されないバスに乗るのも嫌だし，１時間以上かけて自転車で通勤するのもきついからしい。公共交通機関が発達していないのも北京の発展にとっては大きな足枷である。

もう一つ北京で暮らしていて気が付くのは，人口が多い割にはデパートなどの集まった繁華街や銀行等の公共機関が少ない，ということである。北京の繁華街としては，北京飯店のすぐ東側にある有名な王府井（ワンフーチン）やこれと対称の位置の北京市中心部の西側にある西単（シータン），古くからの老舗が多い前門（チェンメン）がある。「繁華街」と言えるのはこれくらいである。しかもこれらも「繁華街」とは行っても 700～ 800mの道の両側に店がならんでいるだけである。デパートとしては王府井に北京百貨大楼（４階）がある程度である。これら３つの地区のほかにも天橋百貨公司など結構大きなデパートはあることはあるが，それでもやはり東京と比較するのは気の毒である。東京の場合，銀座，新宿，渋谷，池袋などいくつかの繁華街があって，それぞれに巨大なデパートが５つも６つもある。今，北京にいて考えると信じられないほどである。

北京は，中国の中でも，人口の割には商業面が発達していない街で，商品の数も種類も少ない，と北京市民はぼやいている。確かに，北京は政治都市であって，買い物をするには不便なところ

である。北京市民は知り合いが出張で上海や広州へ行くと聞くと，お金を渡してセーターやTシャツを買って来てもらう。彼らに言わせると，北京のファッションは「ダサイ」のだそうである。そういえば，この間桂林に行った時，その中心街にあるデパートへ行ってその品数の豊富さと内部の雰囲気のモダンさにびっくりしたことがある。北京にはああいう「ナウい」店はない。北京から同行していった中国側の人が自分のサンダルか何かを買っていた。何も 2,000kmも離れた桂林くんだりまで行ってサンダルを買うことはないのだが，北京の店の「ダサさ」を考えたら買いたくなる気持ちはよくわかる。桂林は人口30万程度の小さな地方都市だが，観光地で外国人も多く来るから，アカぬけた感じになるのだろう。もっとも，その桂林の「品数豊富な」デパートでも，日本の，例えば「イトーヨーカドー武蔵境駅前店」に比べたら完全に負けてしまう。北京に住んでいると「せめて東京の近郊の駅前にあるデパートが一つでいいから北京にあったらなあ。デパートが無理なら小さなコンビニエンス・ストアでもいいから，いつでも新鮮な商品が豊富にある店があったらなあ」という思いが切実なものとなる。

公共的な施設も少ない。鉄道のターミナル駅も北と南へ行く場合は北京駅一つしかない（北西の方向へ行く場合は西直門駅という別のターミナルがある。近郊の短区間の列車や貨物のためには別のターミナル駅がある）。東京で言えば東京駅と上野駅が一つになったようなものである。完全に処理能力の限界を超えている。切符売り場もこの駅の１か所しかないから，切符を買うにはいつも「艱難辛苦」に耐えなければならない。出口と入り口も１つづつしかない。列車が着くたびに出口は重い荷物をもった人々が殺到して大変な騒ぎになる。その変わり「５時の汽車で着くんだけど，出迎えは八重州側？丸の内側？丸の内なら北口，中央口，南口？」などと確認する必要はない。北京駅で出迎える，といったら１か所しかないのだから。

中国民航の航空券を買えるところも，国際郵便局も１か所しかない。外貨（日本円など）を貰おうとしたら空港の銀行以外では中国銀行本店の１か所しかない。個人の費用を日本から送金して貰っている人がお金を受け取る場所は，阜成門にある中国銀行本店の２階ロビーの５番，６番窓口１か所しかないのである。だから，中国銀行では知り合いの日本人によく会う。北京では外国人は「知っている人に会わずにひっそりと暮らす」というのはほとんど不可能である。

銀行などが１か所しかないのに，それはそれでなんとかみんなうまくやっているのは，北京における経済活動がまだそれで十分な程度にしか発達していない，ということを表している。国際郵便局が１つで済んでいるのもその例の一つである。外国からの郵便小包みはごく小さいものを除いて全て建国門にある国際郵便局に届けられるが，各家まで配達はしてくれないから，受け取

り人は各自で国際郵便局まで取りに行く。窓口は1つしかないが，多くの受け取り人が殺到してどうしようもない，ということはない。国際郵便小包みの量が人口9百万の北京市でも窓口が1つあればそれで十分な程度なのである。国際郵便局だけでなく，市内電話の料金を支払う窓口も1つしかない。事務所の電話の電話基本料金と国内通話料金は毎月市内電話局（長途電話局というのが別にある）に支払いに行くが，窓口の人はもうこちらの事務所の名前を覚えていて「ああ，動燃さんね」と領収書の束のなかから当事務所の分を引き出してくれる。見ると領収書の束はせいぜい数十枚しかない。電話料金は銀行口座からの自動引き落としにしている会社が多いからかも知れないが（当事務所も国際電話料金は銀行口座からの自動引き落としにしている），それにしても首都北京に1か所しかない市内電話局としては，なんとなくさびしい感じである。田舎の電話局みたいに，窓口へ行って「やあ○○さん，お元気？」などと言われるような雰囲気も，素朴でいいもんだが，中国の電話の普及率がまだこの程度なのか，と思うと若干溜め息が出る。（中国の電話普及率は 100人当たり0.67台。日本は39.2台。いずれも1986年）

それやこれやといろいろあるので，人から「どうです？北京での暮らしは？」と尋ねられると，「う～ん，そうですね。まあまあですかね。」といって笑ってごまかすことが多くなってしまうのである。

（1988年8月19日）

季節のたより　⑱（1988年8月19日）

＊　8月17日になったら急に空がスカーッと晴れ渡り真っ青な青空になりました。空気もすっきり乾燥して，日差しが強くて気温が高いはずなのですが苦になりません。「北京秋天」として有名な秋の青空です。その前の日まではジメジメと日本の梅雨時のような湿っぽい蒸し暑い日が続いていました。青空そのものを全く見ることができなかったのです。結局，7月初めから1か月半，ほとんど雨ばかりでした。夏の青空を見ないうちに「北京秋天」になってしまったようです。今年は本当に変な夏でした。

＊　筆者は東北の仙台の出身ですが，8月のある日突然空がスカーッと晴れ渡り，秋のような青空が広がる，というのは仙台の秋の始まりと全く同じです。太陽の日差しはまだまだ強いのですが，これ以後は蒸し暑さがなくなるのです。東京ではまだ残暑が厳しいでしょうが，北京では，もう「不快な暑さ」はなくなるでしょう。これから9月一杯が，年中で一番の北京の観光シーズンです。10月に入ると急速に寒くなっていきます。去年の初雪は10月31日でした。

＊　8月1日から「交通管理条例」が施行され，交通取り締まりが厳しくなりました。これまではスピード違反の罰金は2～5元でしたが，これが一挙に50元～百数十元になったということです。中国の値上げはどれも中華包丁でバッサリ切ったようなドラスティックなものが多いのですが，この罰金の値上げの仕方は極端です。もっとも，この値上げはこちらには何

の影響もありません。運転手諸氏は，新しい交通管理条例に関する試験があったりしていろいろ大変なようです。

＊　大変と言えば，この間，事務所の近くを走っていたら，乗っていた竹園賓館の車の運転手さんが，交通取り締まりをしている人に向かって「ヨッ！ご苦労さん！」と声を掛けていました。わけを聞いてみたら，この取り締まりをやっていた人は，実は竹園賓館の中に事務所を設置している中国のある公司の運転手さんなのだそうです。「交通管理条例」の施行を機に「各機関から１名の運転手を出し，10日間，実地に交通取り締まりの手伝いを行って，交通管理条例の実際を学習すべし」とのお達しが出たのだそうです。この中国の公司には運転手さんが１人しかいないので，有無を言わさず10日間の「実地学習」に駆り出されたそうです。この公司では相当困っていたようです。

交通管理条例を学習するのはいいとしても，１人しかいない運転手を10日間も「学習」のために駆り出されたのでは公司としては仕事ができないでしょう。10日間の「学習」について交通管理条例かその他の法令に書いてあるのかどうか，と聞いてみたら，そういうのはないのだそうです。当局からの「通知」があるだけのようです。この「学習」は拒否したら罰金を払わねばならないのだそうで，出さざるを得ないようです。公司としては，営業上実害があるわけで，この公司が外国系の企業だったら，極端な話，裁判ざたになってもおかしくないケースです。実際には，これらの「通知」は大抵外国系企業や合弁企業は対象外になっていますから，問題にはなりません。しかし，合弁企業の担当者など話を聞くと，この種の「学習」とか，緑化・植林のための「勤労奉仕」とか，根拠のはっきりしない「労役の義務」がいろいろあるようです。

本来（というより西欧型議会民主主義国家，言葉をかえればブルジョアジー国家の常識では）国民の権利や義務に係わる事項は，国民の代表たる国会で制定される法律によって決められなければならないはずです。例え10日間という短い期間であるとは言え「仕事をしないで『学習』しなさい」という命令を，法律に明示されているわけではないのに，当局からの「通知」だけでされるのはちょっと納得できません。まあ，中国の人の権利や義務がどうなろうと，はっきり言って外国人たる私としてはどうでもいいことなのですが，ことは経済活動に関係してくるとなると，関係ない，とは言えなくなります。竹園賓館には運転手が４人いますから，今回の「10日間の学習の務」は当事務所には直接影響はありませんでしたが，もし運転手が１人しかいなかったら，10日間は通勤の足の確保もままならないところでした。各企業に直接的な迷惑を掛けるということが「通知」を出している関係者の認識にはないようで，中国の開放体制もまだまだこれからという感じがします。

＊　「学習しろ」とか「勤労奉仕に行け」とかいってもその目的が，交通ルールの理解とか緑化・植林運動とか，まあ，平和な目的なわけで，その意味では，現代はいい世の中です。また，こういう若干批判的なことを書いても全然心配する必要がない，という情勢にまでなったのも，有り難いことです。先日の「北京週報」には，台湾の野党の人が大陸へ来て「大陸の経済がこんなに遅れているのを見て驚いた。このような状況では，我々は大陸に復帰するのを反対せざるを得ない」と述べたのを，ちゃんと報じていました。ちょっと前までは考えられなかったことです。なんだかんだとは言っても，中国が前へ向かって進んでいることは確かです。

あべこべの世界

前に読んだことのある推理小説に「あべこべ殺人事件」というのがあった。誰の作品だったかは忘れた。アメリカかイギリスか，いずれにせよ欧米の作家の作品だった。ある人が部屋の中で殺されて，探偵が調べてみたら，花瓶とか電気スタンドとか灰皿とか，殺人現場の部屋の中の全てのもの全てがひっくりかえしに置いてあった，これは何を意味するのか，という話だった。部屋の全てのものをひっくりかえすには相当時間が掛かるわけで，これは犯人が何かを言いたいがために，わざとそうしたのに違いなかった。主人公の探偵は，いろいろ考えた結果，「これは中国が何か関係しているらしい」という推理を導き出すことになる。この主人公の探偵に言わせれば次のようになる。「中国という国は我々（つまり欧米の人々）から見れば，全てがあべこべなのだ。我々は，夏の暑い時にはアイスクリームや冷たいものを欲しがるが，中国人はむしろ熱いお茶を飲む。汗が出るのでかえって涼しくなるというのだ。また，中国人を『英語がお上手ですね』と褒めると，『いえいえ下手です』と答える。これはその中国人が英語に自信を持っている証拠で，彼らは実際に口にする言葉と本当の気持ちとはあべこべなのだ。我々は古いものより新しいものの方が良いと思うが，中国人は古いものの方に価値を見い出す。中国人の間では，上古の昔が理想の社会であり，人間の歴史は段々堕落の一歩をたどっている，とする考え方が一般的だ。これは人類の進歩を信ずる我々とは全く逆の見方だ。中国における常識は，我々のそれとはあべこべである。この殺人犯人は，部屋の中のものをあべこべにすることによって，何か，中国に関係することをいいたかったに違いない」。この推理小説は，この後，いろいろドンデン返しがあって，この部屋の中の「あべこべ」が真に意味するものは何か，というのが最後にはわかるのだが，まだ，読んだことのない人もいるだろうから，ここでは種明かしはしないでおく。

西洋人から見たら，確かに中国という国は，彼らの常識から考えたら「あべこべ」なところが多いのかもしれない。日本人から見ても「感覚が逆だな」と思うことがある。日本人が見て「あべこべ」だと感じるのは，西洋人が東洋古来の伝統的なものに違和感を感じるのと違って，中国と日本との社会的・経済的な違いからくるものの方が多い。

例えば，今の日本では家具・雑貨類の場合，プラスチック製品は「安物」，木製品・竹製品や籐製品は「高級品」のイメージが強いが，現在の中国では必ずしもそうではない。街で見掛ける赤ちゃん用の乳母車は，竹製のものがまだ多い。スチール・パイプ製のものも最近出初めている

が，まだ少数派である。ホウキの類も農家の人がホウキ草か何かを束ねて作ったものの方が安い。安いというより，合成樹脂で作ったホウキは中国にはまだ少ない。中国は産油国だが，石油は大事な輸出資源なので，国内消費に回される分はあまり多くない。従って，石油化学製品もそんなに潤沢ではない。

また，日本では普通，人手の掛かったものは高い，工場で作られる工業製品は安い，というイメージが強いが，これもまた中国では必ずしも当てはまらない。高い機械を導入して作るよりも，たくさんの人を使ってコツコツ作った方が結局は安くできる場合が多いからである。冷蔵庫やテレビなどの工業製品は 1,000元 2,000元単位で売られているのに，非常に手の込んだ工芸品や刺繍などが数元で売られていたりする。

これらは中国の経済段階が日本のそれとはまだかなり掛け離れていることに起因するので，しかたがない面もある。こういう経済段階が違うことに原因があるものは納得できるが，社会制度が違うために起こる「あべこべ」には戸惑うことが多い。例えば，資本主義社会では，従業員の数が少ないほど優秀な企業である，と言われるが，中国では，従業員が少ないことはほとんど評価されない。むしろ，多くの従業員を抱えていた方が，雇用機会を増やす観点から上部機関からの「受け」はよい。中国でも，いくつかのスーパーマーケットが試行的に開店したが，そのうちほとんどのものは経営に失敗して店を閉めてしまった。セルフサービス・システムを導入しても，従業員の数を減らしてもそれほどのコストダウンにならなくてスーパー方式の利点が生かされなかったのと，流通機構が整備されていないので，新しい商品を定期的に入荷することができず，店頭の商品棚が売れ残りの商品で溢れてしまい，客から見放されてしまったからである。普通の社会では効果的な方策が，中国では却って逆効果となることが多いので，合弁等で中国で企業を経営するのは大変なのである。

「あべこべ」の世界に長くいると，それに慣れてしまう，というところがある。最近では，店でものを買うとき，お金を払って品物を受け取る時に「謝謝」と言うクセがついてしまったが，よく考えれば日本の（というより世界の）常識から言えば，店員の方が「ありがとうございました」と言うべきなのである。客の方が「ありがとう」を言うような雰囲気に慣れてしまっているのだ。また，ある日本人が，去年開店した前門のところにあるケンタッキー・フライドチキンの店にいって，フライドチキンを注文した。チキンを持ってきた従業員から「コーヒーはどうでしょうか？」と聞かれて，はじめは意味がわからなかったそうだ。「コーヒーの何が『どう』なのだろうか？この従業員は何を言いたいのだろう？」と気味が悪くなったのだそうだ。よく考えた

ら，これは「コーヒーはいかがでしょうか？」とコーヒーを勧める意味だったのだ。中国では，店員の方から「〇〇はいかがでしょうか」と商品を勧められることは滅多にないので，理解するのに時間が掛かったらしい。中国に長くいると「商品を注文する時は，お客が店員にお願いするもの。店員はイヤイヤながら，お客に売ってやるもの」ということが「常識」になってしまうので，最近の開放政策によって導入されている「外国の経済常識」に出会うと戸惑ってしまうのである。北京空港のレストランも以前は「遅い・サービスが悪い」ということで評判だったが，去年，外資が導入されて店も改装して随分雰囲気が変わった。まず，入る時に案内の係の人に「幾位？」（何名様ですか）と聞かれてびっくりする（合弁以外の普通のレストランでは「幾個人？」（何人？）と聞かれる）。そして，お金を払って出る時に「ありがとうございました。またおいでください」と言われる。これを聞いた時は，思わず耳を疑った。日頃聞き慣れない言葉だったので，気味悪く思ったくらいだ。

最近，このテの話はよく聞くようになった。どうやら，旧来からの，この「あべこべの世界」は大きな力で確実に逆転をしはじめている，つまり，「正常な」方向に戻り始めているらしい。友誼商店などで売っている外国人へのお土産用の手の込んだ刺繍製品は急速に値上がりしている。また，キッチン用のザルなどの日用品は，竹製のものからプラスチック製品にだんだん代わってきている。「従業員の多い企業がいい企業だ」という状況も，最近の物価・賃金の高騰によって変わっていくだろう。あと10年もすれば，事前知識なしに中国に来る人も，そう違和感は感じなくなるかもしれない。

ただ，この「あべこべを逆転させる力」はかなり大きいが，何せ中国という国は大きい。日本のようにクルクルと価値観を逆転させることは，そう簡単にはできまい。社会・経済的な変革はともかくとして，中国のお店やレストランの全ての従業員がお客に対して「ありがとうございました」という日は来るのだろうか。そう考えると，この国が，ほかの国の人から見て「あべこべではない」と思われるようになるのは，まだまだずーっと遠い先の話のように思える。今の感覚からしたら，中国の全てのお店の人がニコニコと「ありがとうございました」というのだったら「中国らしさ」がなくなってしまうような気もする。地球の上に「あべこべの国」が一つくらいあってもいいじゃないか，そんな気さえする。いずれにせよ，中国という国は，「あべこべ」なのか「あべこべでない」のか，決定的な結論をなかなか出さない推理小説のような国であることは確かなようである。

（1988年8月26日）

季節のたより　⑲（1988年8月26日）

＊　処暑（23日）を過ぎて朝晩はかなり涼しくなりました。早朝など半袖では少し肌寒いくらいです。ニュースによれば，東京は今ごろ真夏の暑さだそうですが，北京は秋はどうやら平年通りに「まともに」やってきたようです。太陽の角度が段々低くなってきているので，事務所の机の上にも日差しが入ってくるようになりました。

＊　日が短くなると，暗くなるのが早いので，日本の中波のラジオ放送が入ってくる時間が早くなります（電離層の関係で，日没後に中波の伝わり方が格段に良くなる）。おかげでナイターが8時半ごろから聞けるようになりました。6月ころは9時過ぎまで明るいので，雑音が多く，満足に聞けないのです。今年のお正月に「セは中日，パは西武」を「予言」しましたが，どうやらその通りになりそうです。ただ，せっかく聞こえやすくなったのに，ペナント・レースがもう一つ盛り上がりに欠けるようでちょっと残念です。

＊　米国の総合貿易法案が可決されましたが，それに対して「我々は，この法案が濃厚な保護主義的色彩を持つものであり，米国政府が一貫して示してきた自由貿易の立場と符合しないものであって，ガット（関税と貿易に関する一般協定）の基本原則とも相容れないものだと考えている。この法案が実施されれば，我が国と米国との経済関係の発展に対してよくない影響を与えるであろう」との外務省スポークスマンの談話が出されました。この外務省スポークスマンとは日本の外務省の人でも韓国の人でもなく，中国の外交部の「発言人」のことです。「自由貿易」とか「ガットの基本原則」とか「あれ？中国は社会主義だったんじゃなかったっけ？」と思わせるような発言ではあります。現在の中国だからこんな発言は「当然の発言」と受け取られるでしょうが，20年前に中国外務省がこんな談話を出したら，相当なビッグ・ニュースだったでしょう（中国はガットに対して加盟申請中。但し，1984年11月から理事会等への出席は認められている）。

＊　今週，竹下総理が訪中され，その機会に日中投資保護協定が調印されました。協定の本文はまだ見ていませんが，報道によれば，いわゆる「内国民待遇」が条件つきながら認められたようです。「内国民待遇」とは，一言でいえば，自分の国の国民と外国人とを差別しない，ということです。これは画期的なことです。しかし，この協定が発効したら，中国民航の国内線航空賃や万里の長城，明の十三陵などの入場料などにおける「外国人差別料金」（外国人は中国人の3倍程度の料金）は一体どうなるのでしょう。それよりも，この竹園賓館で昼食の食事代を払う時「あなたは外国人だから，外貨兌換券でないと受け取れません。人民元はダメ」と言われるこの差別待遇は一体どうなるのでしょう。

＊　それは冗談として（本当は冗談ではなく，外国人への経済的差別政策の一貫なのですから，問題であることは間違いないのですが），いままで経済関係については，日中間は無条約状態のようなものでしたから，この投資保護協定の締結は画期的なことです。投資保護協定は，一面では通商航海条約的な意味も含んでいますから，極端に言えば，日中間は，やっと日米関係における1853年のペリーの黒船来航の時点にたどり着いたことになります。（厳密に言えば1954年の日米修航通商条約は全くの不平等条約だったのに対し，今度の日中投資保護協定は近代的な平等互恵の条約ですから，「黒船来航　の時点にたどり着いた」というのはもちろん正確ではありません。一つの話の例えで　す）。ある意味では，外国人であろうとその国の国民であろうと，同じ人間ならば全く同じような待遇が与えられるべきだ，というのは当然の主張なわけですが，経済的に弱い立場の国から見れば「同じ待遇が与えられたら，金持ちの国の方が強くなってしまう。だから，一見それはフェアなように見えて実はアン・フェアだ」ということになります。ですから，中国は今まで「内国民待遇」を受け入れることには難色を示していたのです。それを今回，日本に対して受け入れることにしたのは，中

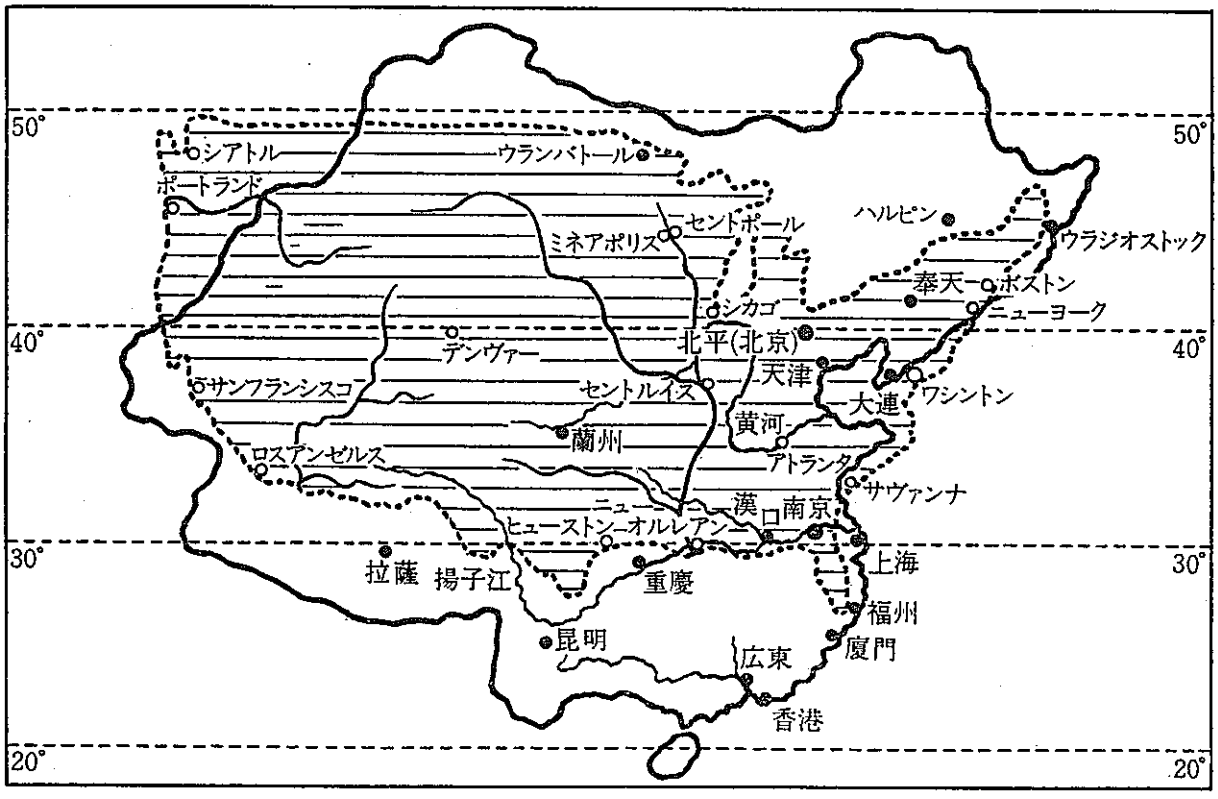
国自身，ある程度経済的な力を持ってきたことと，いつまでもかたくなな態度では国際社会への参加の障害になる，と判断したからでしょう。

＊　この「内国民待遇」の話といい，さきの米国の貿易法案に対する談話といい，中国が「普通の」経済ルールに完全に乗ってきた，という感を強くします。考えてみれば，ここ10年来，中国が「普通の」経済ルールに乗ろうと努力し，その結果それなりの成果を挙げていることが，ソ連にペレストロイカをやろうと決意させた，と言っても過言ではないでしょう。こうやってみんなが「普通の」経済ルールに乗ってしまえば，経済的には国境のカベは極めて低いものになり，国同士で戦争をやろう，という気も段々薄れます。だから，本当は，戦車を造ったり軍艦を造ったりするよりは，「普通の」経済ルールに乗っかって「普通の」商売をやってる方が，戦争を防ぐためには効果があるような気がします。こう考えると，毎日北京事務所で仕事をしていても，本来の仕事の目的以外にも「それなりに世界の平和のために貢献してるのかな，な～んてネ」などと思ったりして，少しは元気が出てくるような気がします。

＊　中国が「普通の」経済ルールに乗ってきた，とは言っても，まだまだ，常識的に見て「おかしいなあ」と思うことによく出くわします。この間，街を歩いていたら，電子機器用品店があったのでフロッピー・ディスク（ワープロ用）を買おうと思って店に入りました。たまたま日本製の 3.5ｲﾝﾁ のミニフロッピーがあったので買いました。1枚26元（約 910円）でした。ふとショーケースのとなりをみたら，同じミニフロッピーの「MS2501－系統片」がありました。MS2501というのはおそらくコンピューターの名前でしょう。ということはこの「系統片」というのはシステムフロッピー（コンピューターを作動させるプログラムが記憶されているプロッピー）です。値段をみたら1枚27元（約 945円）でした。ミニフロッピーディスクでも記憶容量は1メガバイトくらいありますし，システムプログラムといったらそのコンピューターにとっては命のようなものです。ところが，このお店では，このプログラムの入ったフロッピーと何も入っていないフロッピーとの値段の差はたった1元（約35円）です。このお店の人は「プログラムといっても，キーボードのボタンを2つか3つ押すだけですぐにコピーできる。やろうと思えばいくらでもコピーできる。でも，生のフロッピーと同じ値段というわけにはいかないから，1元くらい高くしておこうか」とでも思ったのでしょう。しかし，プログラムの値段がたった1元とは....。失礼ながら，コンピューター用のフロッピーを売っていながら，このお店の人は情報の価値を全く理解していないようでした。「このお店の人」だけではなく，中国では全体的に情報の価値に対する認識が極めて低いような気がします。中国の「普通の」経済ルールに乗りたい，という意思は高く評価しますが，道のりはまだまだ遠いものがあるようです。

この地図はボンヌ図法にならい、対比しやすいように、緯度をずらして重ねたもの。縮尺は約4500万分の１。（竹内実『中国の思想』ＮＨＫブックスより）

竹内実『現代中国の展開』（ＨＨＫブックス）



緯度によってかさねあわせたアメリカと中国

ラティモア『中国―民族と土地と歴史―』（岩波新書）

5年前，2年前，そして今

初めて中国に来たのは1983年の2月だったから，もう5年以上も前である。その頃は北京には合弁ホテルは建国飯店くらいしかなかった。タクシーはあることはあったが，屋根の上に「的士」とか「出租汽車」（いずれもタクシーの意）とかいうライトを点灯させていなかったから，なんとなくさびしい感じだった。5年前には，北京でも，裏通りを背広を着て歩くと，街の人々からジロジロ見つめられたものだ。外国風の服装がまだ珍しかったのである。ところが最近はそうはいかない。背広を着て，日本製のカメラを首からぶら下げていても，街行く中国人から「○○はどこにあるんですか？」と道を尋ねられる。「私は外国人だ！外人に道を聞かないでほしい！」と叫びたくなる。服装を見ただけでは，外国人か中国人かの区別がつかなくなっているのである。

5年前には，北京市内のCITIC（中国国際投資信託公司）の高層ビルもないし，三元橋（第三環状路と首都空港路が交差する立体交差）もなかった。今，北京に観光旅行に来る人が万里の長城へ行く場合は，幅の広い専用道路を通って，すーっと長城まで行けるが，5年前には昔からの山道しかなかった。明の十三陵の入口に並んでいる有名な象や麒麟，武士や文官の大きな石像も，近付いて手でペタペタ触れることができた。今は一つ一つの像の回りに鉄で柵が作られているので，触ることはできなくなっている。また，北京の西南近郊の盧溝橋を渡ったところには検問所があり，人民解放軍の兵士が守っていて，「この先，外国人は許可なく立ち入ることを禁止する」と中国語と英語とロシア語で書かれた立て札が立っていた。この当時はいわゆる「開放区」は北京の市街地だけで，外国人は特別な許可がなければ郊外へ行くこともできなかった。外国人の通行は「原則禁止，例外自由」だったのである。今でも，一応制度上は「開放都市」とそれ以外の「非開放地区」とがあるが，多くの地方で外国からの投資の誘致のため，例えば「遼寧省は，今後，省全体を開放地区にする」などという宣言が行われたりしているので，今では，国境地帯や軍事施設の近辺でない限り，原則通行は自由である，と考えてよい。

現在の中国は，ある面では，かつての日本の高度経済成長期に相当している，と言ってもよい。時々中国に来る人は，皆「来る度に中国は変わっている」と感じるらしい。北京事務所勤務として北京に住むようになったのは2年前からである。この2年の間にも随分変わった，と感じることがある。一番大きいのは国際電話の掛かり方が格段に改善されたことである。当北京事務所を開設する直前（1986年の夏前）までは，東京から北京に電話を掛けるのは1日仕事だった。朝，

ＫＤＤに申し込んで，結局その日一日掛からないこともあった。今でも，日中間の回線が塞がっていることもあるが，８割がたは一発で通じる。市内の電話もつながり易くなったし，通話中の雑音もだいぶ少なくなったように思う。「電話が一発でつながるなんて当たり前だ」と思っている方々にはなかなか御理解いただけないと思うが，必要な時にすぐに電話が通じるようになったことは大進歩なのである。市民生活も大分変わった。前は「北京市民もビールを飲むようになった。毎日，ビール販売店には薬缶をもってビールを買いに来る市民の行列ができている」というのがニュースになった。今では市民がビールを飲むのは日常の当たり前のことである。「ひしゃく」で「薬缶」にビールを入れる「ビールの計売り」が行われていた時代は極めて短かった。ビールの工場が雨後のタケノコのように増えたのと，電気冷蔵庫が普及したため，みんな缶ビールや瓶入りのビールを買ってきて自分の家で冷やして飲むようになったからである。冷たいビールを飲むのはもはや中国でも特権階級の独占物ではなくなった。日本では，昔，氷冷蔵庫があって，自転車で氷屋さんから大きな氷の塊を運ぶのが夏の風物誌だったが，中国では「氷冷蔵庫の時代」はなかった。ほとんどの家庭では最初から電気冷蔵庫を買ったからである。

服装も変わった。これは人から聞いた話だが，10数年前は，中国の最もファッショナブルな都市である上海でも，日本人の女性が歩くと，見知らぬおばさん（おじさん，ではない）が寄ってきて，スカートの裾をちょっと触ってみることがあったそうである。奇麗な服地なので，どんな生地を使っているのか，ちょっと触れてみたくなるのだそうだ。今では考えられない話である。一昨年は真っ黄色のワンピースが流行った。去年は明るい赤系統が目立った。今年のファッションはバラエティーに富んでいて傾向を一言でいうのは難しい。今年あたりは，特に夏の間の若い女性の服装は日本とあまり変わりはない（とは言っても，今年の日本の流行がどういうのか知らないわけだが）。ただ，日本だったら原宿を歩いているような格好をしながら自転車に乗ったりスイカを買ったりしているのが日本と違う。

文化・風俗と一緒に，一部の人達の間で「商売っ気」が出てきたのもこの２年間の大きな変化だろう。この「商売っ気」のエネルギーは，正常な経済発展の原動力，というよりは，101騒動に見られるような場当たり的なヤミ商売的なものに向けられて空回りしている部分がまだ多いような気もするが，一部では，まともなビジネスとして成長してきている部分もあるように思う。最近，街には「○○搬家公司，電話：000-****」と大きく書かれたトラックが走っている。「搬家」は引っ越しのことで，この公司は引っ越しサービス会社である。トラックに宣伝が書かれているところを見ると，個人営業らしい。こういうビジネスが盛んになれば，北京も随分暮らしや

すくなるだろう，と思う。

但し，日本の高度成長時代と違って，中国には，2年たっても5年たっても，あまり変わっていない点も多い。電話に関しても，国際電話は相当よくなったが，国内の長距離電話は相変わらずである。北京から中国国内の地方へ電話するのは，それこそ1日仕事である。回線数が足りないので，申し込んでもなかなか回線が空かないのである。中国の公司や機関では，急ぎの用事の場合はよく電報を使う。電話だと申し込んでから相手方につながるまで受話器の前でじっと待っていなければならないが，それで1日が潰れてしまったのではあまりにも非能率的だからである。電報をよく使う，などというのは，シャーロック・ホームズがいたロンドンか，ワイアット・アープ保安官がいた西部の街みたいだが，1980年代後半の中国では，今もってそれは現実である。

合弁や外国資本の導入によって，一部の外国系企業や個人経営の企業は，かなりビジネス・ライクな仕事をするようになったが，大部分の国営企業は，あまり変わっていない。数千年の歴史を持つ中国は，日本のようにその時代の情勢に合わせてコロコロ変身することはあまり得意ではないようである。

社会や市民生活が変わっても，そこに生活している人間自体もそれほど変わったとは思えない。ただ，最近ちょっと感じるのは「対不起」（トイプチー＝I'm sorry.の意味）という言葉を聞く確率が高くなったような気がするということである。中国の人は，精神構造の点からいったら日本人より欧米人に近いから，本当に自分に非がある場合以外は絶対に「対不起」とは言わない。というよりは，明らかに自分に落ち度があっても，決して「対不起」と言わない人がかなり多い。それはわかっているのだが，それでも以前は，間違い電話が掛かって来て，何も言わずにプツッと切られたりすると，頭に来たものだ。ところが最近は，「あっ。間違えました。ごめんなさい」とちゃんと言う人が多くなった。（電話局の交換機のせいか，誤接続による間違い電話は相変わらず多い）。一つには，仕事の関係で外国人と付き合う機会が多くなったので，以前のように，ぶっきらぼうな応対では，対応しきれなくなった，ということもあるのだろう。テレビで外国の映画を多くやるようになったからかもしれない。しかし，一番大きな理由は，よく考えてみたら，最近はこちらの方が中国語でちゃんと応対することが多くなったからのようだ。間違い電話が掛かってきても，こちらが日本語や英語でガチャガチャ言うと，掛けてきた人はわけがわからずにあせってしまって，ガチャンと受話器を置いてしまったに違いない。こちらがちゃんと中国語で「誰をお捜しですか？いいえ。違います。こちらの番号は○○です。」と言えば，例えたどたどしい中国語であっても「対不起」とあやまる雰囲気になるらしい。

つまり「中国は変わった，変わった」と人ごとのようにいうが，案外，一番変わったのは，というより，中国に対する見方が変わったのは，結局は自分自身なのかもしれない，そう思ったりした。

この事務所のある竹園賓館は「旧鼓楼大街」にあるが，この通りの名称は元の時代に「鼓楼」（時刻を知らせるために太鼓を打った建物）があったことに由来している。今ある鼓楼（つまり「新鼓楼」）が明か清の時代にできて，それまであった元の時代の「鼓楼」は「旧鼓楼」と言われるようになった。この竹園賓館のかいわいは，「旧鼓楼」のあったころ，つまりは元の時代から，同じように北京の一角の街だったのである。日本で言えば，元冦のころ，つまり北条時宗の鎌倉時代から，ここの周辺はこんな様子だったのだろう。「時代が変わった」といっても，街自体は変わったりはしない。ただ，そこを通り抜ける人々の身振り手振りがちょっとずつ変わっていくだけの話である。

（1988年９月２日）

季節のたより　⑳（1988年９月２日）

＊　この間タクシーに乗ったら，運転手さんが頼みもしないのにミュージック・テープをかけました。日本のアイドル歌手のテープでした。「やあ，ひさしぶりに「演歌」以外の日本の歌を聞いたなあ」と喜びましたが，テープが３曲目くらいに入っても知っている歌が出て来ません。歌手の声をいくら聞いても誰だか全くわかりません。「菊池桃子？」「南野陽子？」。名前だけは新聞のテレビ欄で見たことがありますが，顔も声もヒットした歌も全然知りません。別にアイドル歌手に興味があるほど若いわけではありませんが，ミュージック・テープを聞いても完璧に何もわからないので少しさびしくなりました。２年も日本から離れていると，やはりかなり取り残されてしまう感じがします。

＊　このテの情報は，日本と中国ではもうほとんどタイム・ディレイはないといっていいでしょう。むしろ，日本国内における新人類と旧人類の間のタイム・ディレイの方が大きいと思います。もっとも，最近，また，中国のテレビ（中央電視台）で連続テレビ・ドラマ「紅色冲撃」（赤い衝撃＝山口百恵主演）を始めました。なぜ，今，山口百恵なのか，とちょっと疑問に思います。「また」と書いたのは，４年前にも「紅色疑惑」（赤い疑惑）をやっていたからなのですが，この４年間というタイム・ディレイは何を意味するのでしょう。最近の日本のドラマには中国の担当者の目に止まるような秀作がない，いろいろ当たったがいいドラマがない，しかたがないのでちょっと古いが「赤い衝撃」を放映することにした，ということでしょうか。中国でも，アメリカのテレビ・ドラマ「大草原の小さな家」をやっていました。いいものはどこの国へ行っても人気が出るものです。

＊　ラジオの方では９月１日から中波とＦＭで夜7:30から１時間，日本語とドイツ語の国内向け放送が始まりました。（英語の放送は前からやっている）。外人向けというより，外国語を勉強する中国人を対象にしたもののようです。内容は，日本向けの日本語の北京放送を聞いていただければ想像できる程度のものです。ま，勉強にはなりますが，また，聞こう，と思うかどうかは個人差があると思います。内容よりも，アナウンサーの声を聞いてちょっと

思い出すものがありました。明らかに中国人なのですが，全く完全なイントネーションの日本語を話す男のアナウンサーです。「思い出した」というのは，1976年9月9日に毛沢東主席が亡くなった時，日本向けの北京放送でそれを伝える「全党，全軍，全国各民族人民に告ぐる書」という発表文を読んでいたアナウンサーの声だったからです。あの当時，筆者はこの北京放送を仙台で聞いていましたが，その人の声をここ北京で聞くと，なんとなく心にせまるものを感じます。12年前といえば，それほど昔の話ではありません。日本ではロッキード事件があった年で，9月といえば，長島ジャイアンツが初優勝へ向けてタイガースと競り合いをやっていた頃です。日本ではその頃と今とではそれほど世の中が変わっていない感じがしますが，中国にとってのこの12年の変化は，日本における昭和20年からの12年間と同じだ，といっても過言ではありません。毛主席の死去を伝える「全党，全軍，全国各民族人民に告ぐる書」では，「プロレタリア文化大革命の偉大な勝利をかち取り」とか「劉少奇，鄧小平の修正主義路線に打ち勝ち」とかいう表現が出てきます。このアナウンサー氏にとってもいろいろあったことでしょう。そんなことを考えていると，こうして北京に事務所を置いて仕事ができる現在の状況に感謝したい気持ちになります。

＊　先頃，新聞などに「日，米，中国の青年の尊敬する人に関する世論調査」の記事が出ていました。中国で青年に「尊敬する人は誰か」と聞いたら，1位が周恩来，2位が魯迅，3位が鄧小平だったそうです。毛主席はどこへいったのでしょう。確かに「全党，全軍，全国各民族人民に告ぐる書」の内容や毛主席が亡くなって1か月後に「四人組」が打倒されたことを考えれば，文化大革命を推進したのは毛主席自身であったのは確かです。しかし，文化大革命を否定するあまり一貫して革命を指導してきた毛沢東主席をちょっと過小評価し過ぎているような気がします。「実権派」として排撃されていた鄧小平氏を「いや，彼は有能な男だ」として復活させたのは他ならぬ毛主席だったのです。その意味で，12年前とは逆の意味で，毛主席は，まだ「正当な評価」がなされていないようです。毛主席がカリスマ的な「虚像」から離れて客観的・科学的に評価されるためには，もう少し時間が必要だ，ということでしょうか。

＊　物価の値上がりは一応峠を越したようです。先日，政府は「今年いっぱいはもう値上げはしない」と発表しました。よほど国民の間に不満が高まっているようです。こちらの新聞は，4月の全人代のころは結構いろいろ批判的なことも載せていたのですが，値上ラッシュについては「我が国の経済状態では価格調整（「値上げ」とは絶対言わない）もやむをえない」とか「以前に比べれば生活レベルは上がっており，現在の値上げは忍耐の限度内と言える」とか政府弁護の記事しか載せません。はっきりいってこれでは読んでいて面白くありません。「ウサ晴らし」にならないのです。新聞というものは「強いものいじめ」をやってウサ晴らしの要素が入らないと，面白くないし，売れないのです。「強いものいじめ」の対象が本当に「強いもの」かどうかとか，「ウサ晴らし」が社会の進歩にとって必要なのかどうか，というのは，これはまた別の次元の話です。

夏が終わり，街行く人の着ているものも長袖が見られるようになりました。女性の中には早くもスカートを止めてズボン姿になる人もいます。（朝，晩スカートで自転車を漕ぐと，ちょっと寒い）。毎日毎日バタバタして，ふと気がつくと，秋になっていた，というのもさびしい話です。「とにかく季節に合わせた自分の生活がまずあって，その手段として仕事がある」というこちらの人々の考え方にも学ぶべきものがあるような気がします。「我々は日々時間に追われて生活している。それなのに，なぜこういうゆったりした国に 8,100億円も援助しなければならないのか」と若干怒る人がいるかもしれませんが，それとこれとは，これまた別次元の話です。日本人は別に強制されて時間に追われているわけではないでしょう。好きでやっているんです。日本には，ゆったり暮らす権利もそういう自由もありますが，ただそういう選択をする人が少ないだけの話です。「自分と全く異なった生活哲学を持った人達が周囲にたくさんいるので，自分の生活を違った目でじっくり見直すことができる」という点が，外国で生活する者の特権の一つです。

北京で考えたこと

中国以外の外国に長期的に滞在したことはない。だから「国際的な常識」というものがどういうものか，よく知らない。ホテルやレストランへ行ってもチップをやったことはないし，警察は110番，火事になれば119番というのが世界的に共通なのか，単に日本と中国だけなのか，よく知らない。だから「世界の中の日本について，という題名で論文を書け」と言われても，日本にいた時とそれほど違った観点で文章が書けるとは思えない。

ただ，長く中国にいると，やはり日本にいただけでは感じない，いくつかの点について考えるところがある。それをちょっと書いてみたい。

(1) 日本は数ある「少数民族国家」の一つである，ということ

中国にいると，日本人としてのアイデンティティに対して大きな揺さぶりを受けることをよく経験する。友誼商店や北京飯店に入ろうとして，守衛の人に「身分証明書を見せろ」と言われたり（一般の中国人は用がなければ入ることができない），日本料理店で店員に中国語で話し掛けられたりするのはまだがまんできる。しかし，「しゃぶしゃぶ」とか「らっきょう」とか「ちまき」とか「たなばた」とか，日本的なものだと思っていたものが，結局は中国にもある，というのがわかると，なんとなくがっかりする。これらは，中国にもある，というより，もともとは中国のものなのである。こういう経験を何回もすると，「一体私は何なのか。日本とは一体何なのか」と考え込んでしまう。現在，日本人と中国人を区別する時に着目する点は，人と会う時におじぎをするか，という点と，外貨券を持っているかどうか，という点である。もし，日本人であることの唯一の明かしが，外貨券を持っているかどうか，だとしたら，さびしい話である。

そもそも国というのは，ほぼ連続的に分布している人間の集団を人為的に線引きして地球の表面を区分したものに過ぎない。日本人と中国人が区別できないとしても，無理はないのだ。「売国奴」とか「非国民」とか言われるのを覚悟で言えば，日本というのは，激しい大陸での民族間の抗争に負けて東の海に押し出されてしまった北方系や南方系の民族が，東海に浮かぶ島に吹き溜りのように集まってできた国なのである。だから，日本には北方系の要素もあるし，南方系の要素もある。例えば，日本語というのは北方系の民族の言語のようだし，稲作は南方系の産業だ（中国でも淮河以北には水田はほとんどない）。江差追分は北方系のモンゴル族の音楽に極めて

似ているし，日本の将棋は南方系に属するのだそうだ（将棋はタイあたりから伝来したらしい。中国や朝鮮の将棋は日本のとかなり異なっている）。一方，日本に住む人々の祖先が東の海に押し出される原因となった「大陸での民族間の抗争」というのは，取りも直さず，ここ中国を舞台として起こった。だから，現在中国に住んでいる人々も北方系と南方系が適当に入り混じっている。つまり，漢民族も日本民族も北方系と南方系が混ざってできている，という点では似ているのである。だから「日本人としての血を受け継いで」などと言うのは，本当はナンセンスなのだ。もともとの祖先は中国の人の祖先と同じなのだから。

日本はたまたま島国だったので一つの独立国になっているだけで，陸続きならば「大和民族自治区」であったに違いない。1億 2,000万人という人口は，かなり強力なマジョリティだが，数ある民族の中の一つに過ぎない，という点では，モンゴル族や満族や朝鮮族と同じである。だから，日本国政府は大和民族自治区の人民政府，というわけだ。右翼の人からは「日本民族の尊厳を傷つけるものだ」と怒鳴られそうだが， 500年後の世界を考えれてみれば，恐らく，今の日本は「地球連邦共和国」の中の一つの「地方自治体」になっているだろうから，「民族自治区」といってもそう的外れではあるまい。

最近の世界を見ると，どうやら世界的な戦争はなくなりそうである。今の日本で東京都と山梨県が戦争する，と言ったら「そんなバカな」とみんな笑うだろうが， 400年ちょっと前の戦国時代まではこれは当たり前のことだった。日本と中国に関していえば，現在既に，日中が戦争をする，といったら，みんな「そんなバカな」と一笑に付すような雰囲気が醸成されつつある。だから「地球連邦共和国」の中の「地方自治体」同士が殺し合いをするなんて，考えられない，という日は，そう遠からずやってくるような気がする。

(2) 「世の中，甘くはないよ」ということ。

この間，日本の新聞の投書欄にこういうのが載っていた。ある人がセルフ・サービスのファースト・フードの店へ行った。その人の向かいに座っていた人が，食べ終わって，食器をそのままにして帰ろうとしたら，店の人がカウンターの向こうから「セルフ・サービスになってますから，食器はあちらへ片付けてください！」と怒鳴ったのだそうだ。怒鳴られた人は，びっくりしてオロオロしてしまったそうだ。この投書を書いた人は，「いくらセルフ・サービスとはいえ，お客に対して怒鳴るというのは失礼だ。もっとやさしく声を掛けるべきだ」と書いていた。これを読んだ時，思わず溜め息が出た。「日本の人ってどうしてこんなに他人に甘えるのだろう」と。中

国では，これくらいのことでオロオロしていたのでは生きていけない。日本文化における「甘えの構造」については，いろいろな人が論じている。なぜ，店の人がお客に対して「やさしく」する必要があるのか。サービスが気に入らなければ，もうその店へ行かなければいいだけの話である。「やさしさ」とは，本来，何ら見返りを期待しないで行う行為であるはずである。相手が自分の予想するとおりに自分にやさしい態度をとることを期待する，というのは，甘えであると同時に，相手の自主性を無視した一種の不遜である。北京に来る日本人観光客の中には，店の人に大声で「すみません！これください！」と日本語で言う人がいる。観光客相手の商売なのだから当然日本語ができるはずだ，と考えているからのようだが，これは甘えというより，不作法な態度である。（もっとも，相手がわかろうとわかるまいと，日本語でまくしたてるくらいの度胸がないと，中国の人とは対等に渡り合えないのだが，それとこれとは別の次元の問題である）。

(3) 中国は現在「高度経済成長期」である，ということ

「高度」がつくのかどうかは，いろいろ議論のあるところだが，中国経済が現在成長期であることは間違いない。従って，安定成長期に入った日本との間には，様々な感覚的ギャップが存在する。30年前の日本を想像すればすぐわかると思うが，例えば，看板の中で煙を吐く工場の煙突を経済成長の象徴としてプラスのイメージとして描くとか，化学調味料をたくさん使った方がお客を親切にもてなした，と感じるとか，現在の中国の人のイメージと日本の人のイメージとが逆の場合がある。文化的な原因によるイメージの逆転（日本人がよくやる過度の謙遜は中国の人にはかえってイヤミに映ることがある，など）もあるが，そういうカルチャー・ギャップを取り去ってもなお経済発展の時間的ずれによるイメージの逆転が残る。例えばそれは，工場の煙に対するイメージとか，中国では農業製品より工業製品の方が割高である，とかいうところに表れる。

日本では青函トンネルの開通に際して「果たして資金を投下しただけの効果があるのか」などという議論がなされたが，北京から見ていると，これはなんとも不遜な議論に思える。中国の人はメンツがあるから絶対に口に出して言わないが「そんなに必要ない投資だったのなら，中国やもっと貧しい国の鉄道建設の資金に使えばよかったのに」という呟きが聞こえてきそうである。最近の日本では，需要が頭打ちになった分野では，新しい商品を作り出して，今までにない需要を掘り起こそうとしているようであるが，相変わらずエネルギーや物資の供給能力に限界がある中国から見ていると，なんとなくもったいない，という気がする。最近は情報が発達しているから，そういう状況はすぐこちらにも伝わってくる。何か，喉が乾いて死にそうな人の目の前でバ

シャバシャとシャワーを浴びているようで，犯罪行為のように思えなくもない。

いずれにせよ，日本経済は今が一つの絶頂期のようである。日本経済が下り坂になることはないと思うが，日本の中で「経済成長のおもしろみ」が段々少なくなってきたのは否定できない。（「経済成長のうまみ」と言い換えてもよい。だから，財テクのような，あまり建設的でない利殖が流行るのである）。それに引き換え，今，中国は一番将来が楽しみな国の一つである。日本にこれからも住んでいたい人は「成長経済のおもしろみ」以外にも別の「おもしろみ」を見付けないとやっていけない（経済と違って科学や文化は限界がないから，いつまでも「成長のおもしろみ」を追求できる）。あくまでも「経済成長のおもしろみ」を追求したい人は中国に着目してはどうだろう。1997年には香港が帰ってくるし，そうなれば台湾統一が実現するのもそう遠い日ではないだろう。そうすれば，ますます将来性が期待できる。21世紀の中国に何か期待したい人は，今のうちから「つばをつけて」おいた方がいい。これが，2年間北京にいて考えた一つの結論である。

（1988年9月9日）

季節のたより　㉑（9月16日）

＊　毎日「北京秋天」の真っ青な空の日が続いています。観光客もだいぶ増えた感じです。ただ，その青空が夕方になると，一天にわかにかき曇り，雷が鳴り出す日があります。9月になったというのに変な天気です。秋になってから雷の話というのも変ですが，中国の雷は太陽エネルギーを吸収する大地の面積が日本よりずっと大きいので，なかなか迫力があります。部屋の中にいて，雲の中を走る稲妻を見ていると天で龍が暴れているように見えます。（余談ですが，「稲妻」というのは，もともとは，毎年稲の実るころに出るので，稲に精気を与えて実らせるもの，という意味で「稲の夫（つま）」の意味だそうです。「プラズマ」とも語呂が合うので近代的に聞こえますが，古今和歌集にも出てくる純粋の古代日本語です。中国語に「稲妻」という言い方はありません。中国では「電」が「稲妻」のことです。もともと「雷」という字は田んぼの上に雨が降っているのですから，イメージとしては日本も中国も同じようなものでしょう。なお，「電」の字を「エレキ」の意味で初めて使ったのが日本人なのか中国人なのかについてはよく知りません）

＊　9月7日に中国は初めての気象衛星（「風雲一号」という）を打ち上げました。静止衛星ではなく，極軌道を回る衛星です。今まで，中国のテレビの天気予報では日本の「ひまわり」の映像だけを使っていましたが，「風雲一号」と「ひまわり」の映像を併せて使うようになりました。「ひまわり」の映像を映すときには，画面の隅っこかどこかに「ひまわり」による，とか何とか出ていればよいのですが，何も注釈がないので，中国の人はずうっと以前から中国の衛星の写真が天気予報に出ているのだと思っているようです。まあ，どうでもいいんですけど，データを利用するならば「○○のデータによる」くらいのことは書いてもいいのになあ，といつも思っています。日本で，以前，アメリカの気象衛星の写真を使っていた時は，「気象衛星NOAAによる」とちゃんと脚注がついていました。中国はプライドの高い（悪くいえば中華思想の）国ですから，日本の衛星の写真であるということを表面に出すの

はメンツが許さないのかもしれません。中国とつきあうには「ひまわり」の写真だと明示しないとはケシカランじゃないか，などとカッカとしないで，相手のメンツも十分考えて上げる必要があるのです。（これは日本でも同じでしょう。よく「ここは課長の顔を立ててガマンしとくか」などと言ったりするのと同じ感覚です。）

＊　よく，日本人は東南アジアへ行くと，高慢だ，と批判されることがあります。特に現地の女性を褒めるのに「日本人みたいだ」などと言う時にそう批判されます。これは裏側に「日本人の方が優れている」という意識があるので，「日本人に似ている」と言うのが褒めることになる，という感覚が日本人側にあるからです。その感覚を見てとって，現地の人は自分の民族がバカにされた，と感じるのです。ところが中国における日本人に関しては，こういう批判はあまり聞きません。それは中国人の頭には「一番優れているのは中国人である」という意識がこびりついていますから，日本人に何を言われようと，なんとも思わないからです。ちなみに，私は「あなたは中国人に似ている」と「褒められた」ことが何回もあります。日本と中国が，アジアのほかの国と比べて過去の戦争体験にもかかわらず結構うまくやっているのは，お互いに「自分が相手より優れている」という自負の念があるので，相手の言うことがそれほど気に障らないからでしょう。

＊　春から秋にかけての北京の天気についていろいろ書いてきましたが，冬の北京の天気についてぜひ書いて置きたいことがあります。それは，現在の冬の北京ではスモッグがものすごくひどい，ということです。北京ではビルの集中暖房から一般家庭の暖房まで石炭が中心です（家庭では石炭の粉を固めた練炭をよく使います）。北京の冬は氷点下20度程度まで下がりますから，暖房がないと，本当に生きていけません。街のあちこちから真っ黒な煙が立ち上るので，冬の北京からは青空がなくなってしまいます。西北の方に乾燥地帯があるので，砂塵が舞い上がって青空を覆い隠すのだ，という説もありますが，住んでみた感じでは，冬の空が晴れないのはやはりスモッグのせいです。中国でも環境問題は重要視されているのですが，まず経済成長が第一だ，という気持ちが強いので，なかなか徹底しません。冬の空を比べるのだったら，東京の方がずっときれいです。

＊　最近，日本では原子力に対する風当たりが強いようですが，原子力を減らして火力発電を強化せよ，という議論に対しては，北京のスモッグに辟易している身からすれば，どう考えても賛成しかねます。最近は日本では火力発電所の立地にもいろいろ御苦労があるようなので，電力会社が出すパンフレットを見ると「原子力は火力よりこれだけ優れている！」と強調する部分が少ないように思えます。火力の方面で御苦労されている方のことを考えるとやむを得ないかとは思います。ただ，1970年代前半の公害問題や石油ショックの頃を思い起こしてみると，あの頃と比べて，最近は「酸素を消費せず，二酸化炭素や煤煙を全く出さない」という原子力の最大のメリットがちょっと隅っこの方へ行ってしまっている気がして，ちょっと残念です。

＊　さて，私事になりますが，これまで北京事務所からの報告を担当してきました渡辺は，9月30日に帰国することになりました。関係方面の方々には，いろいろお世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。後任は今井といいます。今後はフレッシュな感覚で，装いも新たにして報告していくことになると思いますので，今後ともよろしくお願いいたします。

＊　最後に全くの私事（ある意味では売名行為）ですが，私の名前は渡辺格といい，格は「いたる」と読みます。この読み方の出典は下に掲げる「論語・為政第二編」です。

「子曰，道之以政，斉之以刑，民免而無恥，道之以徳，斉之以礼，有恥且格」（子曰く，これをみちびくに政をもってし，これを斉（ととの）うるに刑をもってすれば，民免れて恥

じなし。これをみちびくに徳をもってし，これを斉（ととの）うるに礼をもってすれば，恥じありてかつ格（いた）る）［政］とは「法律による規制」のこと，［免れて］とは「法の目をかいくぐって」の意［格（いた）る］とは「正しき道にいたる」こと。「規格」の意味の「格」を動詞として読んでいる。（読み方，意味の解釈などについては，吉川幸次郎『論語（上）』（朝日文庫・中国古典選３）によった）

海外だより

夏の農村で

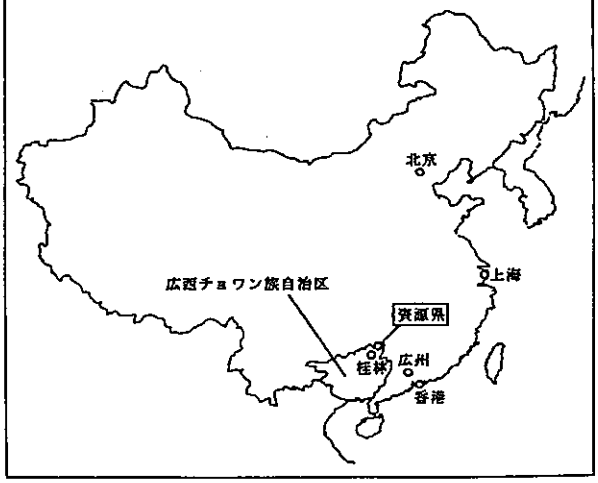
渡辺　格

大地は緑に覆われている季節がいい。車の騒音は嫌なものだが，うるさいくらいのセミの声はむしろ心地よい。

この夏，広西チョワン族自治区の資源県に行った。本社から出張者とともにここにあるウラン鉱床を視察するためである。資源県は，林立する巨岩・奇岩で有名な桂林から北東に車で約130km行ったところにある典型的な山間部の稲作農村地帯である。桂林から海抜1,000m級の山脈を一つ越えると，資源県の盆地が広がる。車が盆地に入ると，左右は一面の水田地帯となる。夏の昼間の太陽は，道路や水田に容赦なく降り注ぐ。露頭を見に行くために，中国側の人から麦わら帽子を借りてかぶって歩いた。回りの林からはセミの声が聞こえてくる。緑濃い水田を渡ってくる風は，むっとするほどの草いきれのような匂いを運んでくる。何年もの間忘れ去っていた夏の息遣いが，はっきり聞こえるような気がする。そんな中を麦わら帽子をかぶって歩いていると，遠い過去の子供の頃のことがよみがえってくるように思えてくる。

中国に駐在しているとはいえ，事務所のある北京は都会である。しかも，北京の気候は日本より乾燥していて，郊外へ行っても水田はない。麦畑ばかりである。万里の長城の近くにある山へ行っても，木の生えていないゴツゴツした岩山ばかりで，厳しい北方の自然を象徴するような風景が続く。それに引き換え，資源県の風景

広西チョワン族自治区資源県の位置



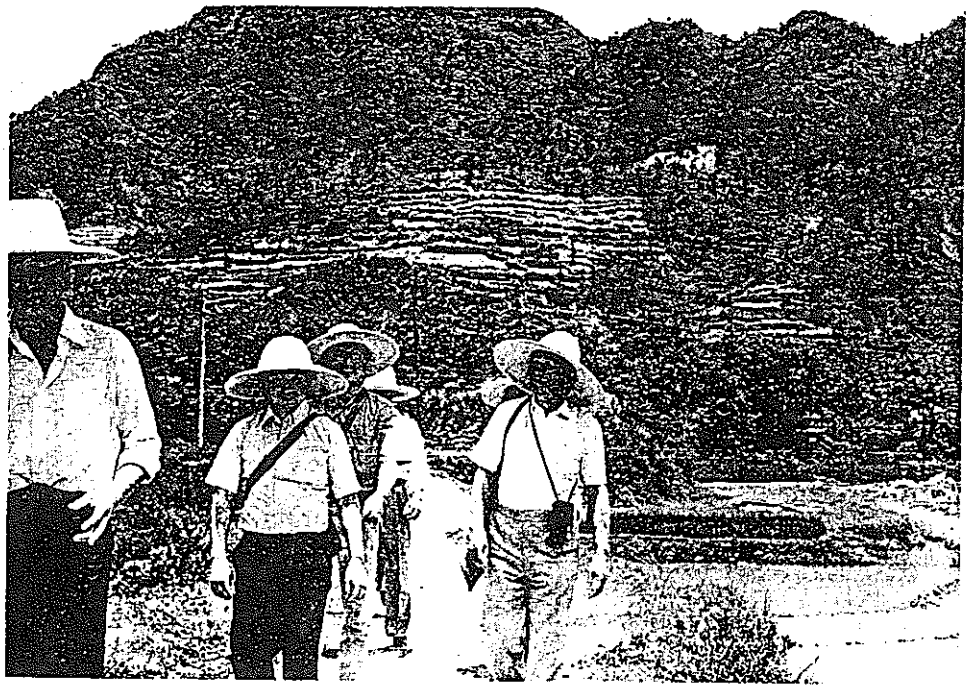
は，緑に覆われた山々と水田があり，人の心をホッとさせるものがある。

露頭の観察を終わって，水田のあぜ道を歩いていると，向こうから歩いてくる二人連れの女の子たちと擦れ違った。何気なしに「ニーハオ」と声をかけた。二人はちょっとびっくりしたように顔を見合わせていたが，すぐに「ニーハオ」と言って笑った。そのまま通り過ぎて歩いていると，女の子たちは，向こうへ行かずに我々の後からついてくる。「何か変だな。」と思っていたが，そのうちに彼女たちが，後からちょっとためらいがちに「ハロー。」と声をかけてきた。こういう農村で英語で声をかけられるとは思ってもいなかったので，立ち止まって振り返った。すると女の子たちは，意を決したように，つっかえながら英語で話し始めた。

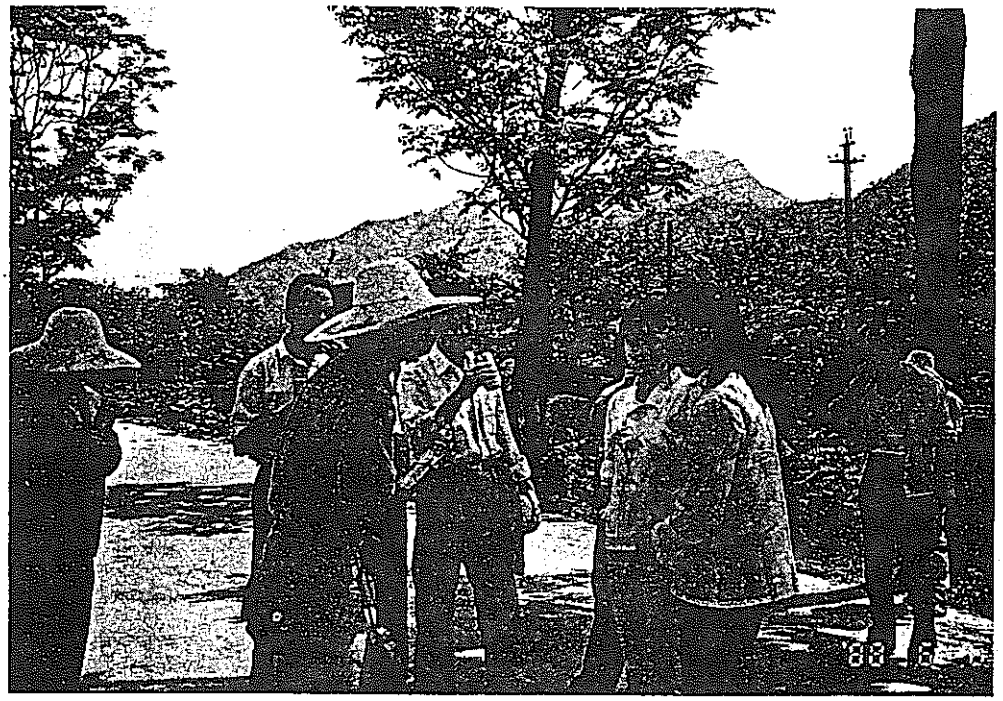
彼女たちは中学2年だという。今日，外国人が来ると聞いて，一度話をしてみようと思い，我々を待っていたそうである。1時間半待っても戻ってこないので，帰ろうと思って歩いていたら我々と擦れ違ったのだという。こちらは，麦わら帽子をかぶってしまえばその辺にいる村の人とそう違った顔をしているわけではないので，擦れ違った時には気が付かなかったらしい。こちらから「ニーハオ」と声をかけたので，外国人であることがわかったようだ。我々と女の子たちは，歩きながら話を始めた。一人の女の子が言った。「私の言っていることが分かりますか。」そこで“Yes, of course!”と答えてやった。その子はうれしそうに笑った。

我々は，迎えのマイクロバスが待っているところまで来た。迎えの人が中国製のコーラを用意して待っていた。女の子は「帰るんですか？」と聞いた。「そうだ。」と答えると彼女たちは「今晩時間がありますか？　私たちはお話がしたいんです。」と言った。我々は，「今から桂林まで帰るんだ。」と言うと，少し残念そうな顔をした。我々は，木陰でコーラを飲んで少し休憩したが，その間彼女たちとちょっと話をした。彼女たちの学校では週に3時間，英語の時間があるそうだ。この付近には，外国人はほとんど来ないし，彼女たち自身はこの土地から外へはあまり行ったことがないらしかった。車で4時間程の桂林にも今まで行ったことがないとのことだった。最近は，農村地帯でもテレビがかなり普及しているから，外国映画などを通して外国人の生活がどんなものかは大体知ってはいる。しかし，実際に学校で習った英語を使ってみる機会はほとんどないのだ。

コーラを飲み終わると，我々はもう出発しなければならなかった。我々は車に乗り込んだ。彼女たちは“See you again!”と言った。中国語の「再見」からすぐ連想できるからそう言ったのだろうが，彼女たちとはもう二度と会わない



資源県のあぜ道を歩きながら（左から2番目が筆者）



私たち「ニーハオ」，女の子「ハロー」で始まりました

だろう。そう思うと“See you again!”と言った彼女たちの気持ちが少し気の毒だった。しかし，彼女たちの方はわくわくする好奇心をまだその胸に秘めて，二人でおしゃべりしながら向こうへ歩いて行ってしまった。彼女たちは，明日学校の友達に「外国人と英語で話して，ちゃんと通じたよ。！」と自慢するかもしれない。英語の先生に我々の話の内容を報告するかもしれない。我々にとっては，出張の日のある１日に過ぎなかったこの日が，彼女たちにとっては一生の思い出の中で「外の世界」を垣間見た大きな１日になったのかもしれない。

我々は車の中で「もしかすると，彼女たちは，これを機会に一生懸命勉強して，大学へ進み党の幹部くらいになるかもしれない。そうして，将来偉くなってから『実は若い頃，日本から来た専門家と会って英語で話をして，それを切っ掛けに外の世界を勉強しようという気持ちが強くなったんですよ。』と言うかもしれない。」などと話をした。実際彼女たちは，テレビに出てくる外国の世界が急に身近に感じられて，外国の生活や外国人と自由に話をするのを，現実的なものとして思い描くようになるに違いない。もちろん，彼女たちがこれを切っ掛けに偉くなって有名になるというのは，一つの夢物語である。現実的には，彼女たちはたぶん農民のままで一生を終わるだろう。それはそれでいいのだが，我々には彼女たちの遠い世界を夢見る気持ちや好奇心でわくわくする心が，なんとなく輝いて見えて，ちょっと羨ましいようにも思えたのである。真夏の太陽と水田を渡る風の中で「子供のころは，こんなところで遊んでいたっけなあ。」と，ふと昔のことを思い出してしまっていたので，そんな風に思えたのかもしれなかった。

（北京事務所）

（付録１）

中国一般情勢に関する1988年年頭所感

1988年１月７日　動燃北京事務所
渡　辺　格

1988年の年頭に当たり，日頃の業務を離れて，北京に在住して感じる最近の中国の一般情勢について御報告したい。

1.　1987年を振り返って

(1) 総　論

1987年の中国は１月１日，天安門前広場における学生たちの「民主化要求デモ」によって始まった。このデモは，中国の激動の一年を予想させたが，結局その直後の１月16日に胡耀邦氏が中国共産党総書記の辞任があったものの，終わってみれば，それ以外は何もなく既定の路線が続いただけだった。当の胡耀邦氏にしても総書記は辞任したものの，今もって中央政治局員の職は続けており，10月の党大会では鄧小平氏や趙紫陽氏等と並んでちゃんとヒナ壇に座っていた。「胡耀邦の党総書記辞任！」というまことにハデな刀の一振りによって，学生たちはとたんにシュンとなってしまったし，開放政策に不満の保守派の人々も反撃する糸口がなくなってしまった。右と左で騒ごうとしていた連中が両方とも静かになったので，主役は堂々と今までと同じ道を何事もなかったように歩き続けたのである。鄧小平氏の役者振りは「お見事！」というほかはない。

胡耀邦氏の総書記辞任の時，これを伝えるアナウンサーが人民服で登場したが，これはどうやら，テレビ局の担当者の勇み足だったらしい。「総書記辞任！」というニュースを聞いて，担当者は「こりゃヤバイ。少し大人しくしなきゃいかんナ」と考えてアナウンサーに人民服を着せた。ところが，これが意外に反響が大きくて，外国の通信社は「文化面でも引き締めか？」と書き立てるし，一般大衆は「またあの時代に戻るのか」と嫌な気分になったろう。あまり，反響が大きかったので，紡績工業部長などは繊維製品の売れ行きに影響してはいけないと，「ファッション面での引き締め等ありえない」と躍起になって中国製品のイメージ・ダウンを防ごうとしていた。

というわけで，当のアナウンサー氏は，今でも毎日普通の背広でニュースを読んでいるし，街行く女性の服装も開放的にはなりこそすれ地味になることは全くない。

(2) 各　論

1987年の大きなニュースとそれに関する筆者の感想を列記してみたい。

① 1月：胡耀邦氏の中国共産党総書記辞任と「ブルジョア自由化反対」

胡耀邦氏の辞任は，ショックの割には，政策や路線にはほとんど影響がなかった。要するに，熱気にはやる学生たちに冷水を浴びせるのが目的だったのである。その目的は完全に達成された。これと前後して，物理学者の方励之氏や作家の王若望氏が党籍を剝脱され公職を追放された。科学技術大学の副学長であった方励之氏は学生のデモに対して有効な措置を取らずむしろこれを助長する発言を行った，王若望氏は社会主義に反対する発言を公然と行った，というのが理由である。王若望氏の発言とは「資本主義では各人の能力を引き出すシステムがうまく機能して社会全体の発展によい効果をもたらしているが，我が国にはそれがない」というような趣旨のことをいろいろな場所で公言していたのがマズかったらしい。2人とも党籍剝脱と職を追われただけで，別に刑事罰を食ったり監禁されたりしているわでけはないようで，「学者生命」「作家生命」どころか本当の生命の危険すらあった文革時代に比べれば，穏やかな処分であったことは確かである。しかし，現在の中国では，西側諸国のように自分の意見を主張するために本を出版したり，新聞に投書したりできないから（新聞社へ投書することはできるが，党を除名された者の投書を新聞社が掲載するわけがない），公職を追放されるということは，即ち言論活動を禁止されるのと同じなのである。胡耀邦，方励之，王若望の各氏に対する処分は，十分に「見せしめ効果」があり，「開放」はするが「言論の自由」は許さない，とする現体制の考え方を明示する結果となった。

各氏に対する処分のすぐあと，各新聞は「ブルジョア自由化反対」のキャンペーンを張ったが，「ブルジョア自由化」とは何を指すのか，終始はっきりしなかった。要するに「ブルジョア」というのは「許されないこと」にくっつける一種の接頭語で，あまり本質的な意味はないようだ。一般の庶民は長年の経験から「ブルジョア」という言葉を聞いただけで「悪いこと」だと（少なくとも，指導者が悪いことだと考えていること，だと）理解するようになっている。それは，ちょうど，戦前の日本人が「アカ」という言葉を聞いただけで，共産主義の何たるかを全く知らな

いでもとにかく「悪い，いけないことだ」と考えたのと同じなのかもしれない。もっとも，現在の中国人の方が戦前の日本人より，政治家が言っている内容の本質をつかむという点では鋭敏だし，ずっと図太いように思う。だから，中国の人々は，「ブルジョア自由化反対」のキャンペーンを聞いて，「経済面では『開放政策』を取っているが『開放』＝『自由化』ではなく，『自由化』はいけないことなのであって，自由に仕事をしたり，自由に話したりしてはいけないんだな」と理解したに違いない。彼らの一般的な考え方は，「『開放政策』を取るようになってから，確かに給料は上がったし，電化製品や生活用品も豊富に出回るようになり品質や性能のよいものを選んで買えるようになった。食料も食べたいだけ食べられるし，生活に余裕すら出てきた。一人っ子政策だけは面白くないが，これだけ人の数が多いのだから，まあある程度はやむを得ないだろう。自由に仕事をしたり，自由に話したりはできないけれども，自分の生活がまあまあならそれでいい。」というところだろう。だから，今「自由化はダメ」という政策に対する強烈な反発はない。

しかし，個人経済を容認する現在の政策の中で，小金を貯めた個人経営者が，営業規模の拡大を企らみ，消費動向が多様化した一般消費者もそれを強く希望するようになると，この「自由化はダメ」という枠組は窮屈なものに感じられるようになるだろう。個人経営者の企業化マインドと幅広い消費者の欲求を抑え付けようとすれば，国民の間に自由化要求の声が高まるであろうし，これを容認すれば「資本主義への道」を歩むことになってしまうであろう。現政権がこれをどのように梶取りしていくのか，これからが非常に難しいところであるが，現在の指導部は，個人経営者の企業化マインドと幅広い消費者の欲求の拡大は，極めて自然なものであり，国全体の経済の発展のためにも有益なものだ，と認識しており，これを否定するようなことはしないだろう。だから，「共産党の指導，社会主義の道，マルクス・レーニン主義と毛沢東思想の遵守，プロレタリアート独裁」の「４つの基本原則」という看板は掲げながらも，現実的には，消費材製造やサービス業等の分野ではある程度自由な企業活動を容認するようにしていくのではないかと思う。現在，既に，地方によっては株式市場の開設，土地使用権の競売なども行われており，果たしてこれが「社会主義の道」なのか，と疑問に思えるような「改革」が次々に行われている。土地の問題では，例えば，北京日本人学校新校舎の建設用地10,881平方㍍の土地使用料が99年間分で６億７百万円で，しかも一括前払い（１平方㍍当たり 5.6万円）というのを聞くと，「土地の所有権はあくまで国家に属しており，売買に供されるのは土地の『使用権』である」という公式見解も半ば詭弁に聞こえる。そもそも，現在の経済政策は，文革の時期の常識から見れば「社会主

義の道」から逸脱しているし，もし毛沢東が生きていたら現在の幹部は全員「君らは毛沢東思想を遵守していない」と一喝の下にクビになってしまうだろう。マルクスやレーニンが生きていたとしたら一体何と言うかは想像もできない。だから，これからも「看板と現実」の2つを上手に使い分けて，現在の路線を，むしろ開放と経済面での自由化を進める方向で歩んでいくことになろう。

問題なのは，経済面での自由化が進む中で，政治の自由化がどうなるかである。現在の指導部は，経済の自由は許すが，政治の自由はダメだ，という方針を貫くのではないかと思う。というのは，中国という広大な国土と多数の民族を持つ国家では，政治的自由を与えると各地区，各民族が独立を要求する可能性があるからである。これら独立を要求する勢力が外国と結び付くと国全体がバラバラになってしまう恐れがある。現指導部はこれを最も恐れている。また，経済的に豊かになれば国民は少しぐらい政治的自由がなくても満足に思うだろう，とも考えているに違いない。経済的・文化的には全く自由だが政治的には何の権利も持たない香港の人々がそうだし，ごく一部の外省人（蔣介石が亡命するとき大陸からつれてきた台湾省以外の人）に支配されている台湾の内省人（台湾土着の生粋の台湾人）もある意味ではそうである。だから，「とにかくまず経済発展を先にやることだ。その後で政治的自由とか言論の自由とかを考えればいい。いま全面的な自由化を唱えると，国内に混乱をもたらし，外国勢力の介入を招き，結局経済発展が遅れることになる」と現指導部は考えているのであろう。それはそれで一つの方針であって，外国人たる筆者がとやかく言う問題ではないが，それで，中国の国民，特に若い世代は我慢するだろうか。開放政策によって，外国からどんどん新しい文化や考え方が流入しているし，テレビのニュースではフィリピンの革命や南朝鮮（韓国）の学生デモ，大統領選挙の熱狂が毎日放映されている（［注］テレビの国際ニュースの映像は，外国通信社との契約によって配給されている。このため，国際ニュースは西側のものばかりで，日本で見るのとほとんど変わりはない。ソ連のニュースも西側通信社を通して入っている。従って，朝鮮半島情勢に関しては「南」のニュースばかりで「北」に関するニュースは見たことがない）。これらのニュースを見て，若い世代は「なぜ俺たちはデモをやってはいけないのか。あの『軍人独裁』の南朝鮮でさえ全国民による大統領選挙をやっているのに，なぜ自分たちはできないのか」と思うに違いない。外国の様子がわかるにつれ，個人経済が発達するにつれて，「なぜ，自分たちは自分の住みたい所に住み，やりたい仕事に就けないのか」という不満が高まってくるに違いない。政治的な自由はなくとも，自分で事業を起こして運と能力があれば社長にでもなれる経済的自由があれば，こういう不満は鬱積する

ことはない。経済的にも完全な自由ではありえないこの中国において，若者たちの不満のエネルギーは一体どこへ向けられればよいのか。この若いエネルギーを，既成概念の転覆と封建的思想の徹底的排撃へ向けて爆発させたのが，あの60年代の紅衛兵による文化大革命であった。今そのような若さをぶつける対象がない。韓国や東南アジアではこれらのエネルギーはよく反日運動の形で爆発するが，中国ではあまり反日の気運は高くない。1990年代に起こるかもしれない激動の時代のために，そのエネルギーが静かに蓄積されているような気がしてならない。

② 5月：大興安嶺森林火災と「官僚主義反対」

5月，東北地方の黒龍江省大興安嶺地区で森林火災が発生し，約1か月燃え続け，延焼面積は約 101万㌶（岐阜県全体の面積に近い），死者は 193人に上った。この火災は，被害の大きさもさることながら，山林管理担当者の対応のまずさが全国的な批判を浴びた。そもそも伐採機の油の漏れや森林内での伐採労働者のタバコなど作業管理者の怠慢が火災の原因だった。また，火災発生当初，現場の担当者は現場サイドだけで処理しようと試みて，中央に対しては「大したことはありません。もう消し止めました」とだけ報告していた。しかし，火災は急速に広がりランドサット衛星でも捕らえられるようになり，中央の救援部隊や人民解放軍がかけつけた時には手が付けられない状況だった。更に，救援人員が到着してからも，現場の担当者は「ここは管理区域である。この区域に入るなら許可証を提示されたい。あなたのような者がこの区域へ入ることは何も連絡を受けていない」等と言い張ってなかなか火災現場へ入れてくれない状況が出現した。また村の焼け跡を見てみたら，消火を指揮していた隊長の自宅だけが焼け残っていて，他の民家は丸焼けだった，など様々な不祥事が表に出た。普段，この手の事故・事件はあまり派手に扱わない中国の新聞も，地元民の不満を背景に，精力的に報道を行った。党中央も事態を重視して実情を調査し，結局現場の管理責任を問われて楊鐘林業部長［林業大臣］が解任された。

このあと，各新聞は「官僚主義反対」キャンペーンを張り，「親方五星紅旗」にあぐらをかいた職務の怠慢や，不祥事を自分のところだけで処理してしまおうとする風潮，上の指示があるまで何もせずに大きな損害を招いてしまう考え方を批判した。このキャンペーンは至極結構なものであり，誰も反対する者はいなかったが，そのかわり，効果が上がると考えてる者もいなかったようである。社会主義国では，全ての機関が「お役所」であり，「官僚主義反対」キャンペーンを張ったところで馬の耳に念仏だ，とみんな考えているわけである。

筆者がここで特筆したいのは，「官僚主義反対」キャンペーンを張ったこと自体ではなく，そ

うなった過程である。即ち，このキャンペーンの発端が，上からの指示ではなく，被害にあった地元民や救援に当たった人民解放軍の兵士が実感として林業部の現場責任者の「官僚主義」を感じ，これに不満を持ったことだったのだ。しかも，この点に関する一部新聞記者の活躍は今までにないものだった。この火事について，人民日報や北京週報などは現場に記者を派遣し，記者が現場で書いた生々しい記事を掲載した。特に，経済日報は2面一面を潰して精力的な取材に基づくルポを掲載した。しかもそれには，現場担当者の官僚主義に対する批判も含まれていた。これらは現場で官僚主義に直面した人々のナマの声だったに違いない。これらの記事がその後の「官僚主義反対」キャンペーンに発展していったのである。その意味で，これは官製のキャンペーンではなかった。

中国のマスコミと言えば，皆，「大本営発表」ばかりで現政府に批判的な記事は一切載せず，しかも画一的でどの新聞を見ても同じだという印象が強いが，この「大興安嶺森林火災」の報道では，各新聞は独自性を出していたし，官僚主義反対もブチあげた。その意味で，この事件は，中国の「言論界」の中では一つのエポックだったように思う。（しかし，その後，共産党の第13回党大会が開催された時には，全新聞が全く同じ文章の記事を長々と掲載していたのには閉口した。中国の新聞が自社の意見を交えて党大会の記事を書くようになるのはいつの日だろうか。）

③　6月：日本の外務省高官による「雲の上発言」と「光華寮問題」そして「東芝機械事件」

6月初め，訪中した公明党代表団との会見の際に鄧小平氏が「1972年の日中共同声明で中国は先の戦争に対する賠償の請求を放棄したのであるから，日本側はそれなりに中国に協力すべきだ」という趣旨でいつになく厳しい調子で発言したのに対し，日本の外務省高官（実は柳谷外務次官＝当時）が「鄧小平氏の意見は現在の中国の指導部を代表していない。鄧小平氏も雲の上の人になった感じがする」と発言した（いわゆる「雲の上発言」）。これに対し中国側は，強硬に反発した。一方，中国人留学生用の寮である「光華寮」の帰属を巡って起こされていた裁判で，2月，大阪高等裁判所が，寮の帰属は台湾当局にある，とした京都地裁の判決を支持する決定をしたことに対し，中国側は「2つの中国」を認めるものだとして激しく抗議してきた(「光華寮問題」)。更に4月には，いわゆる「東芝機械ココム違反事件」が起こり，中国は直接は関係ないものの，輸出審査が厳しくなったため中国と東芝機械とが結んだ契約24億ドル，中国と日本の他のメーカーとが結んだ契約9億ドルが履行できなくなった（金額は中国側の主張）。

この3つの問題は完全に別々の関係のない問題である。しかし，6月初めの鄧小平氏の発言は，

「光華寮問題」を背景としつつ，「東芝機械事件」の結果外為法の改正に着手しようとしていた日本に投げた一つの牽制球だったのである。つまり，公明党との会見で「今さらなんで」と思わせるような1972年の日中共同声明の話を持ち出したのは；「①中国は1つである，という共同声明で謳われている大原則を忘れるな→「光華寮問題」に対して，②日ソの関係のことはどうか知らないが，日中両国は共同声明にあるように友好国同士であるはずだ→「東芝機械事件」に対して。」という点を日本に再認識して欲しかったのである。ところが，天才的な先読み力を持つ鄧小平氏でも予測し得なかった「雲の上発言」が飛び出してしまった。日本の関心は鄧小平氏の発言自体よりも，この「雲の上発言」の方へ移ってしまい，鄧小平氏の発言は陰が薄くなってしまった。ということで「光華寮問題」は何ら進展しないし，「東芝機械事件」による外為法の改正も成立してしまった。（［注］新聞報道によれば，今度の外為法改正によっても，中国は特別扱いで今まで通りである，とのことであるが，筆者は改正外為法と施行令の本文を見ていないので，今度の改正が対中国関係にどのように影響するかは判断できない。商社の人の話によれば，法律の改正はともかく，通産省の担当者が慎重になっていて対中国案件の進捗が遅くなっているのは事実のようである）。中国側の意向は，結局あまり反映されなかったわけである。

一番心配なのは，このような日中関係なので，日中間の協力全体について（動燃のプロジェクトも含めて），中国側が「まあ，ちょっと待て。日本側の出方を見てから協力を進めても遅くはあるまい」という態度を取って，協力の進展にブレーキが掛けられる（あるいは既に掛けられている）のではないか，ということである（商社の人の話では，対外経済貿易部は最近日本に対してかなり冷淡になってきているという）。中国側にとっては，「光華寮問題」は原則論であり頭の中での議論であって実質的にはあまり痛くも痒くもないが，「東芝機械事件」は実際かなり痛いと思う。外為法の改正自体は日本の内政問題だからあまりガタガタ言わないが，もともとソ連での事件なのになぜ中国が被害を受けねばならないのか，という苛立ちはあるだろう。1987年を契機として，中国は経済的な対日依存体質から脱皮を図ることになるかもしれない。もし，そうだとしたら残念なことである。

④　台湾にいる人々に対する大陸訪問の緩和

10月から台湾政府は台湾にいる人々の親戚探訪のための大陸訪問を認めることとした。これに対し中国政府もこれを歓迎し，日本，アメリカ等にある在外公館がパスポートの代わりの役目を果たす旅行証を発行するとともに，中国国内での飛行機・汽車等の運賃は内国人扱い（外国人に

対しては割高な料金を取る）とする旨の通知を発した。これにより台湾にいる人々（つまり「中華民国」国籍の人）が大陸へ来る数がかなり増えたようである。筆者も10月下旬，北京の中国銀行本店で青天白日旗のマークの入った「中華民国」のパスポートを公然と持ち歩いている人に出会ってびっくりした。もちろん，中華人民共和国の中では「中華民国」のパスポートはただの紙切れで何の効力も持たないが，一昔前には考えられなかったことである。最近，北京空港のロビーには「台湾同胞の親戚探訪を熱烈に歓迎する」との横断幕がかかり，お土産屋では台湾同胞向け専用のお土産（旅行証を見せないと買えない）も売っている。テレビのニュースでは40年振りに故郷に返って老母に会ってお互いに涙に暮れる，という「感激の再会」のシーンを何回も放映していた。最近の新聞には「台湾同胞探親（尋ね人）」の欄がある。なお，これは前からであるが，こちらのテレビのニュースでは時々「最近の台北の大気汚染はひどい」とか「高雄市の動物園の動物は運動不足で太り気味」等というあまり大したことはない台湾のニュースの映像を流している。香港経由で入れているのであろうか。これは自国民に「台湾は外国ではないのだゾ」ということを改めて印象付けるために放映されているのではなかろうか（また当然のことだが，毎日の天気予報では台北の天気予報も流している）。

もともと台湾にいる人の大陸訪問は香港等を通じて密かに行われていたらしい。今回の措置はこれが公認されたわけである。台湾にいる人の大陸訪問については，中国政府は「いつでも歓迎」の姿勢であった。台湾当局が出国を認めなかったのである。香港というよい前例があるので，台湾の人が大陸へ来ても中国政府としては何ら困らず，むしろドルを持って来てくれるのなら大歓迎というわけだ。また，これは，世界の大勢が「中国とは中華人民共和国１つしかない」ということでほぼ固まったことによる自信の表れであろう。もし，韓国が中国との国交正常化に成功したら「中華民国政府」は名実ともにその意味を失ってしまるだろう（オリンピックが終わった後，1988年中に中韓国交樹立がなるかもしれない）

⑤　10月：チベットでの暴動

10月初め，ダライ・ラマのアメリカ議会での演説に呼応するように，ラサで一部のラマ教僧侶らが暴徒化した事件が発生した。これは，漢民族の支配に対するチベット族の反発と文革時代の宗教への圧迫が不満となって今も存在することを見せつけたが，この事件はあくまで中国の内政問題であり，歴史的にもほとんど重要な意味は持たないだろう。だから，筆者はこの問題にはあまり興味はない。少数民族の問題は，多かれ少なかれどの国にもある。他の国のことはあまりよ

く知らないが，中国はソ連などよりよっぽど少数民族に気を遣っているのではないか，と思う。一人っ子政策も少数民族は対象外だし，道路，学校等の建設でも随分お金を使っている。北京市内でも街のあちこちに「回民餐庁」（イスラム教徒用レストラン＝イスラム教徒は豚肉を食べない）があるし，騰冲地区の隴西の街にもりっぱな少数民族用品専門店があった（騰冲地区は非開放地区で外国人は入れない地区だから，これは外国人記者に見てもらうために建てられたのではなく，本当に少数民族の人たちのために建てられたものである）。ただ，文革時代に少数民族の文化を無視して，かなり思想的な押し売りをやったようで，それが今だに響いているようだ。

⑥　10月：中国共産党第13回全国代表大会の開催と李鵬氏の総理代行就任

この会議は，①とも関連するが，胡耀邦総書記の辞任にもかかわらず，開放・改革の現路線を強力に推進することを内外に表明したものである。李鵬氏の総理就任も前から噂されており，唐突な感じは受けなかった。人民日報は1987年の世界の10大ニュースのトップにこの党大会を掲げているが，この党大会は既定の路線の１通過点であり，歴史の節目としての意味はあまり大きくないと考えられる。

李鵬氏の総理代行就任については「彼はソ連派である」とか「お坊っちゃんで実力はない」等いろいろ言う人があるが，ソ連に留学したことがあるから今もソ連派である，と考えるのは単純過ぎるし，革命時期から建国，文革の時期を生きぬいてきた鄧小平氏と比べたら誰が総理になっても「お坊っちゃん」だと言われるだろう。現在の中国においては，鄧小平氏を除けば，自分のカラーを前面に押し出して強力なリーダーシップを取れる人は見当たらない。昔は，江青女史が実権を握るか鄧小平氏がトップに立つかでは，全く路線が異なっていたが，今は，李鵬氏が総理になるとか別の人がなるとかは，日本で竹下か，安倍か，という議論をするのと同じ次元の話で，政策路線にそれほど大きく影響するとは思えない。

ただこの党大会で印象付けられたのは，その公開性である。大会初日の趙紫陽氏の報告は，延々とテレビで生中継されていたし，大会期間中，内外プレスに対する記者会見が毎日行われ（記者会見は中国語－英語の通訳付き），その内容は毎日テレビで放映された。その中には外国記者からの要望で実現したチベット地区代表の記者会見も含まれていた。記者会見では

外国人記者：「鄧小平氏の引退の後は中国の体制はどうなるのか？」

中国側スポークスマン：「えー，その問題については，まあ，第15回大会，16回大会，というより17回，18回大会で話し合うことになるでしょう」（笑い）

というような対話も行われた。その昔，国慶節のパレードを前にして天安門の上に並ぶ指導者たちの並ぶ順序を双眼鏡で覗いて，内部の政争の様子をあれこれ推定していた頃から見れば隔世の感がする。

これは，どうもソ連のゴルバチョフ書記長のグラスノスチ（公開性）政策の影響を受けているようだ。党大会の時の記者会見で趙紫陽氏は，外国記者から「中国の改革はソ連の改革よりずっとスピードが速いと思うが，これについてどう思うか」と質問されたのに対して「各国にはそれぞれ事情があり，他の国と比べることに意味はない」と答えた。型通りの答えだが，こういう質問をされて満更悪い気もしなかったに違いない。ソ連は大型発電機等の「重厚長大」なものは得意であるが，家電製品等は，西側の技術とプラントを導入している中国製の方が品質はずっといいらしい。北京の街並を走る車を見ても，トヨタやニッサン，上海フォルクスワーゲン（合弁）等が軒並走る中で，東欧諸国の大使館員らしい人がソ連製のボルガ等に乗っているのを見ると完全に見劣りする。中国には「かつての兄貴国が我々のマネをしている！」という自信があるように思う。新聞・テレビもソ連の改革路線のニュースは好意的に扱っている。

⑦　社会面の事件から（以下の話は筆者の記憶の中のものを整理したものなので若干正確さを欠くかもしれないが，中国の雰囲気をお伝えするために書くことにした）

(a)　1月：トウフ事件

1月，北京市民は寒空の中「最近，豆腐がないねえ」とブツブツ文句を言いながらも，豆腐を買うために行列を作っていた。ところが，よく調べてみたら，東北地方から国営の豆腐工場へ大豆を納入する担当者が，豆腐製造の個人経営者に大豆を横流ししていたことがわかり，その担当者は逮捕された。これがトウフ事件である。恐らく，この手のヤミ・ブローカーはあちこちにいて，逮捕されたのは氷山の一角であろう。それにしても，北京市民は気の毒ではある。（なお，今年も冬になると豆腐が不足するようで，筆者もここ1か月程，麻婆豆腐を食べていない。もうすぐ1988年版トウフ事件が起きるのかも知れない）

(b)　6月：ニンニク事件

山東省のある村では，去年はニンニクが豊作だった。農民たちは大喜びで県（中国の県は日本の郡かそれより少し小さい行政単位）の役所へ収穫したニンニクを運び込んだ。ところが県の幹部は「規定により，請負量（当初に契約した量）だけは買取ろう。しかし，それ以上は今年の計画にないので買取れない」と言った。都市近郊なら，余ったニンニクは自由市場へ持って行って

安く売ればいくらでも売れる。しかし，こんな田舎ではどんなに安くしても消費者がいないのだからしょうがない。農民は県の役所に何回も交渉したが，県の幹部はガンとして聞き入れなかった。農民たちは丹精こめてせっかく作ったニンニクを買取ってくれないので，怒り狂い，遂に皆で県の役所に押し掛けてガラス窓を壊し，事務室を滅茶苦茶にしてしまった。これがニンニク事件である。この事件は党中央の聞き及ぶところとなり，県の幹部は「規則にばかり縛られて，農民の気持ちを全く理解しない官僚主義の最たるもの」としてクビになってしまった。役所を襲撃した農民たちは，「気持ちは理解できる」として不問に付されたようである。

この事件は「官僚主義反対」のキャンペーンの一つとして取り上げられたものだが，「国の計画」と「各農家の生産高」との衝突は全国日常的に行われているのではなかろうか。穀物ならば，余ったら家畜の飼料にもできるのだが，ニンニクは必需品というほどでもないので，このような事件が起こったのであろう。

(c)　7月：スイカ事件

スイカは中国でも重要な夏の果物（野菜？）の一つである。夏になると国営商店や自由市場で一斉にスイカが売られるようになる。7月のある日，北京の南郊外の貨物駅へ，国営商店へ運ぶためのスイカを満載した列車が到着した。そこに一群の自由販売業者がどこからともなく集まってきた。どうも，自由販売業者は，うまく列車の係員に話を付けて（要するに，プレゼントをやったり，様々な便宜を図ってやったりして）品質のよいスイカを貰いにくるらしい。ところが，この日は列車の係員は，「これは国営商店の品物だ」としてガンとして跳ね付けた。自由販売業者は，宥めたりすかしたりしていたが，遂に頭にきて仲間を語らって列車を襲いスイカを全部強奪していった。これがスイカ事件である。もちろん，これは刑事事件として公安［警察］により捜査が行われた。

もちろん，善良な自由販売業者も多いのであろうが，中国では物資の供給者と「うまく話を付ける」のが商売の死活問題に繋がる。そこでは，おそらく，ほとんどの自由販売業者が法律ギリギリのところで，うまくやっているのであろう。「原則規制，例外的に自由」を旨とする経済システムであれば致し方ないのであろう。

2.　これからどうなるのか

一言でいうと，少なくとも1990年頃までは，中国の今の開放路線は変更されない，また「文革」が復活するかもしれないというのは全くのナンセンス，ということになる。

何故かと言えば，中国の状況を省みると，現在の中国人民の間には，個々の案件に対する不満はいろいろあるものの，革命を推進するほどのエネルギーは蓄えられているとは思えないからである。また，「大変動」が起きるためには，その前に「エネルギーの蓄積」がなければならないが，現在の中国には，これは爆発するほどには蓄積されていな。従って，中国においては，ここしばらくは，例え中国指導者が急に交代しても「文化大革命」のような大変動は起こり得ない，と言うことができる。さらに，現代のような情報化社会では，民衆のエネルギーが爆発するまで蓄積するのは難しいのである。為政者は，自国民の中のエネルギーの蓄積を早目に察知してそれに対する有効な措置をとるだろうし，民衆の中でも，大量の情報の中で民意を一本にまとめるのは極めて難しい（民衆の要求が多様化しているからである）。特に中国は，広大な面積を有しているため，昔から民意がバラバラになりやすい傾向があり，かの孫文でさえ，全国を一つにまとめることはできなかった（もっとも，その時は日本を初めとする列強各国が横からちょっかいを出したからであるが）。中国の建国のための革命も「文化大革命」も，民衆の中に盛り上がったエネルギー（先の革命の時は封建的支配の打倒と日本に対する抵抗がエネルギーの源泉であり，「文化大革命」の時は「大躍進」期に引き続く1960年前後の経済的疲弊状況に対する不満の鬱積がエネルギーの源泉だった）と毛沢東という偉大な（カリスマ的な）指導者があったからこそ全国が一つになったのである。現在，そのようなエネルギーはないし，偉大な指導者もいない。世界の現状を見れば，1986年のフィリピンの「アキノ革命」や1987年の韓国の民主化の動きのように，爆発的な流血事件なしに民衆の意向が政治に反映されていくのが現在の世界の傾向である。これも「限界までの民衆のエネルギーの蓄積とそのエネルギーを解放する一瞬の爆発」が起こりにくい状況の一つの証明である。従って，中国が再び自力更生路線に立ち返えって鎖国状態に入るとか，国内で内戦状態が発生するとかというドラスティックな事態が発生すると予想するのは杞憂に過ぎない。

ただし，ここで体制自体のドラスティックな変化と個々の経済政策の変化とを混同してはいけない。政治体制が変化しなくても，その時々の経済状況に対応するため，外国製品の輸入禁止とか，海外への送金の禁止とかいったドラスティックな経済政策を取る可能性はある。ここでは，中国が，「何をするかわからない訳のわからない国」から既に脱却して，世界経済という土俵の上に上がり込んで西側諸国と一緒に同じルールで相撲を取るようになったのだ，と言いたいのである。中国は，「けたぐり」や「肩透かし」等の珍手で攻めてくるかもしれないが，相撲のルールを無視したり土俵を降りてしまうことはない，ということである。

とは言うものの，1987年の12月から北京等主要都市でも豚肉の配給制が復活し，紙，繊維製品，住居費等の値上げも予定されているが，これが民衆の不満を反発にまで高め，民衆の中にエネルギーの蓄積を強めていきはしないかと若干心配ではある。このエネルギーの蓄積がどの程度高じていくのか，現在の指導部がこれに対してどのような「ガス抜き」策を講じていくのか，なお，油断なく観察していく必要はあるだろう。

なお，中国の政策の今後について多少の不安を覚える向きには，次に掲げる人民日報の論説コラムをお読みいただきたい。政策の持続性が外国の投資家どころか自国民にさえ信用されていない，という現実を溜め息交じりに認めたものである。中国共産党の機関誌「人民日報」が，このような「人間の匂いのする」論説を出すようになったこと自体，時代の流れを感じさせるものであると同時に，中国の現体制の柔軟性を裏付ける一つの証であると見ることもできる。

1987年12月27日「人民日報」1面　論説コラム「毎週論壇」

「「定心丸」*1の治療効果の長短」　　－　朱維群　－

党の第13回大会が開催された当日，河北省の豊南県では，8,000か所余の工場・商店のうち80％が操業・営業を停止して，大会の実況中継を見ていた。見終わった後，皆はいわゆる「定心丸」を飲んで，次々に経営範囲を拡大していった，ということである。（11月27日付け人民日報参照）。ここ数日来，多くの新聞が「第13回党大会は農民や都市・農村の個人企業経営者の，政策が変わるのではないか，との心配を打ち消す「定心丸」の役割を果たした。」と報道している。初めてこの種の報道を読んだ時，私は「中国の庶民の疑心は何と重く，しかも「政策定心丸」の効き目は何と短いことか！」との感慨に思わず溜め息が出るのを禁じ得なかった。

「定心丸」について言われ出したのは，1982年に党中央が農業工作に関する1号文件を発布してからである。この文件は，我が国の農民が「左」の束縛を突破して創造した責任制*2を肯定して総括したものであった。全国の農民はこれに対して踊り上がって喜んだ。ずうっと引っ掛かっていた心が解き放たれたである。この後連続して5年の間，毎年初めに出される毎年の1号文件は皆農業に関するものだった。そのたびごとに農民は皆いわゆる「定心丸」を飲んだのである。

＊1：「定心丸」；ここでいうの「丸」は［毒掃丸］の「丸」で，薬の意味。
＊2：「責任制」；生産の責任を農家や各工場に任せるとともに，利益の一部をそれぞれの判断で自由に処分してもよい（新規事業の投資に回してもよいし，ボーナスとして支給してもよい）とする制度のこと。

1987年の１号文件は農業問題に関するものではなかったので，ある地方の農民はとたんに懐疑心を抱いて「この政策は変わるのだろうか？」との疑問を提出した。

まさか農民は「定心丸」を飲んで「定心丸」中毒になったのではないだろう？　だが，子細に考えてみるに，彼らが心配するのも道理のないことではないように思う。変わるのを恐れているのは，一つには，過去長い期間にわたって政策の変化があまりに急でありあまりに速すぎたことが，人々の間でまだ記憶に新しいからである。「農村互助組」*3のイスがまだ暖まらないうちに「合作社」*4をやって，「初級社」*4はすぐにまた「高級社」*4を建設することになり，それにすぐ引き続いて「公社化」（人民公社*5の建設）が行われた。無論，都市・農村においては，結局は「個体」*6（個人経営）よりは「集体」*6（集団経営）の方がいいし，「小集体」*6よりは「大集体」*6の方が，「大集体」よりは「全民所有」*6（国営）の方がいいわけだが，力を緩め

＊３：「農業互助組」；日中戦争末期，国共内戦期から建国初期（～1954年頃）にかけて組織された農作業を共同で行う小グループを「互助組」という。確固とした組織ではなく，季節的，臨時的に各農家が必要に応じて助け合う組合のようなもの。

＊４：「合作社」「初級社」「高級社」；解放後，農業における社会主義化を進めるため「農業生産合作社」が組織された。これは「互助組」を元に，これを恒常的な組織とし，肥料等の購入や生産物の販売を共同で行う機能も加えたものである。初期のうち（1956年頃まで）は土地や生産手段の私有制を基礎として土地の出資等を行う「初級合作社」であったが，1956年頃からは土地・生産手段を公有とするより社会主義的な「高級合作社」に発展していった。（いきなりソ連のコルホーズ・ソホーズのような社会主義化をせず，初めのうちは土地の私有を認めていたのは，富農階級の支持を得ることが社会主義化の鍵だという中国共産党の現実的な考え方と，いくら集団農場を作ってもそこで使うべきトラクター等の大型機械が何もない，という当時の中国の工業事情が背景にあった。）

＊５：「人民公社」；1958年８月の党政治局拡大会議で採択された「人民公社設立についての決議」に基づいて従来の「合作社」を発展させたのが「人民公社」である。それまでの「農業生産合作社」が生産を念頭においていたものだったのに対し，「人民公社」は，これに商業・教育・国防等の全ての活動を含み，生産・生活・政権の全てを管理する。つまり「人民公社」は職場であると同時に，学校でもあり村役場でもあったのである。「人民公社」の「公社」は日本語の［電電公社］の［公社］とは全く違う言葉で「コミューン」の訳語である。中国語では1871年の［パリ・コミューン］のことを「巴黎(巴)公社」という。「人民公社」は1978年12月の中国共産党第11期中央委員会第３回全体会議（３中全会）以降の改革路線の中で，農業の生産責任制の導入や政・党分離の方針の中で徐々に解体されていった。

＊６：「個体」「集体」「小集体」「大集体」「全民所有制」；何れも中国の社会主義における産業の経営形態。「個体経営」は生産手段の私有と個人労働により成り立っている。文革期には「資本主義のしっぽ」として批判の対象となったが，現在は小規模（２人以内の助手と５人以内の徒弟までは認められている）の小売り業，飲食業，サービス業，修理業等において「個体経営」が行われている。これに対し，生産手段を集団で所有する経営形態を「集体経営」という。このうち集団の規模が小さいのが「小集体」で大きいのが「大集体」である。これは究極的には，生産手段を全ての人民による集団で所有する「全人民所有制（全民所有制）」に到達する。「全民所有制企業」は日本流に言えば［国営企業］である。

ることのない一連の移行の結果，結果的には移行が行われるたびに段々貧しく*7なってしまった。今の改革はまだやっと9年たったばかりなので，それ以前20数年間の激動が大衆の脳裏に残していった不安定感を完全に拭い去るには，時間が少し短かったきらいがあるのは確かである。同時に，ここ何年かの我々上から下までの中には，商品生産の発展に対して，発展の中における様々な経済的要素を見慣れていなかったため，社会における様々な消極的な現象*8について商品生産の発展に罪を着せる人も確かにいた。この種の思想はまだ大きな損害を作り出してはいないとは言え，新聞やテレビを通してそのようなことをしょっちゅう見ている「前面に看板を掲げている」請け負い農民や個人経営者にとって見れば，結局のところそれは一種の不吉なシグナルであって，これを見ると彼らは生産を発展させようとする時にあれこれ考えあぐねて，毎年「定心丸」を待ち望むことになるのである。

第13回党大会で明確に述べられた社会主義初級段階理論*9は，現在行われている経済政策に対して確固たる基礎を打ち固めるとともに，根本から人心を安定させるための「治療効果」を持っていた。しかし，中国の一般庶民は非常に実際的に受け取っている。彼らは往々にして安心したと言うが，実際はまだ安心しておらず，彼らはまだ実際の状況を見ようとしているのである。社会主義初級段階理論には，さらに，今後の長期的な実践の中において，どのようにそれを堅持し，充実させ，発展させていくか，という課題が残っているのである。もし，我々が第13回党大会の路線を確固たるものとして変わることなくこれに沿ってやっていくのであれば，改革・開放は絶え間なく実質的な進展を獲得することになり，そうすれば将来の見通しも立てられるようになり，「定心丸」に対する「社会の需要」も自然に段々と縮小し，最終的には消失することになるであろう。

＊7：「貧しく」；この部分の［貧しい］は原文では「窮」で，この語は［貧しい（窮乏する）］のほかに［活路がない（困窮する）］，［極限に達する（窮まる）］，［終わる・尽きる（窮まる）］等いろいろな意味を有する。

＊8：「消極的な現象」；婉曲な表現であるが，要するにここでは［好ましくない現象］ということ。

＊9：「社会主義初級段階理論」；先の第13回党大会で趙紫陽総書記がその報告の中で提唱した現状認識で「現在の中国の社会主義段階はまだ初期段階である。この段階の目標はまず社会全体の生産力を向上させることであり，この段階では公有制を主としつつもその他の形態の経済が存在することを認め，一部の人々が合法的な方法によって先に豊かになることをむしろ奨励する。しかも，1950年代に生産手段の私有制の社会主義的な改造を達成してから少なくとも 100年間はかかる社会主義の初期段階が続く。」というもの。

3. 今年の予定

3月頃，全国人民代表大会が開催されて，李鵬氏が正式に総理に就任する。この全人代では，中央政府の機構改革が大きな話題になる予定である。一部，報道にある通り，現在政府内部で行政改革の案が作成されているところである。李鵬総理代行は元日の全国政治協商会議茶話会（新年のパーティー）での新年あいさつの中で，今年やるべきこととして，①経済の安定化と改革の深化，②中央機関の機構改革の実施，③社会主義民主政治と精神文明の強化，の3つを掲げており，今年機構改革が行われるのは決定的である。

李鵬総理代行のこのあいさつの中の機構改革に係わる部分を以下に掲げる。

「党中央と国務院の機構改革案は既に中央を原則的に通過している。国務院の機構改革案は第7期全人代の審議・批准を経てから実施される。機構改革のキー・ポイントは，機構を調整し，権限を下に降ろし，所掌範囲を変更して，党務と政務の分離，政務と企業活動の分離の原則に則って政府の仕事を行う機構を配置する。この件は影響するところが大きいので，綿密に準備し，計画的に実施して，機構改革を行っている間中混乱が起きないように努力し，業務の正常な運行を保持して，人員を妥当に按配する必要がある。我々は国家公務員制度を設立し，これを以て国の業務を行う徳才兼備した一群の人員を作り出し，各レベルの政府業務の水準と業務効率を根本的に向上させなければならない。」

具体的な詳細はまだ公表されていないので，報道されている（「カントリー・リスク情報」'87.12.21付け）以上のことはわからない。核工業部もエネルギー部（「カントリー・リスク情報」では「エネルギー委員会」となっているが「エネルギー部」が正式のようである）の中の一部門として吸収されることになるようである。軍事関係部門もエネルギー部に入るのか等はわからないが，少なくと外事局や地質局など外国と関係を持っているところはエネルギー部へ移管されるようである。

（以　上）

<付　録>

4.　1988年の予測（予言）

諸般の情勢と第六感をもって今年を予想（予言）する。

① 中韓国交樹立がなる（1988年後半か1989年）

［説明］韓国のチョンドゥホァン（全斗煥）大統領退任の後，中国側は韓国の誘い掛けに対する態度をやわらげ，9月のオリンピック後，国交樹立交渉が急速に進展する。

［理由］中韓国交樹立は時代の流れである。問題は北朝鮮の反発だが，北朝鮮は今年急激に軟化する（②参照）。

② 北朝鮮に大きな変動が起こる（1988年中）

［説明］北朝鮮の指導部の内部に大きな変動が起こり，場合によっては指導者の交代が行われる。方向としては，開放体制へと向かう。

［理由］中ソの開放化の流れの中で，北朝鮮では今だに「文革・鎖国」が続いている。「南」での大統領選挙等の動き，オリンピックの成功等により「北」の国民に孤独感や不満が高揚し，中国の支持の下で政権の「現代化」が行われる。

③ 上海（或いは別の地方都市）で労働者・学生による物価値上げ反対デモが発生する（1988年）

［説明］公共料金の相次ぐ値上げと，一部食料品の不足により，市民を中心とした比較的静かなデモが発生。流血の騒ぎにはならないが，市長の直接選挙等の政治改革が一段と進む切っ掛けとなる。

［理由］今年，中国の物価はかなり上がりそう（元がドルと同じレートなので輸入品が割高になっているし，内外の賃金格差是正のため，ある程度インフレ政策が取られる可能性がある）

④ 香港において中国政府と台湾当局との直接対話が開始される（1988年中）

［説明］議題は親戚探訪等人道的問題に限られるが，とにかく両「政府」の担当者の話し合いの糸口が見つかる。

［理由］韓国の中国への接近を見て，台湾当局が急速に軟化する。台湾内部では「台湾独立派」が台頭する。

⑤ 1988年中には世界的な景気の後退はない。不景気が来るとすれば1989年。

［説明］1988年の為替レートは前半は 120～125 円，後半は 115～120 円で安定する。日中貿

易は日→中の輸出がやや減，中→日の輸入がやや増で貿易インバランスは減少する。

［理由］アジア地域では，朝鮮半島，台湾海峡での政治情勢の好転を好感して，経済活動が活発化する。米国ではドル安効果が出始めて輸出が好調となる。

⑥ 米国の大統領選挙では共和党候補が勝利する

［説明］1988年の選挙では共和党候補（ブッシュ副大統領でないかもしれない）が勝利する。

［理由］レーガン大統領が INF廃止条約に続いて，戦略核兵器交渉も進め，経済状態も良くなるので共和党人気が高まる。

⑦ 1988年中には中ソ両国の両国首脳の相互訪問の話が進展する。

［説明］李鵬総理，ゴルバチョフ書記長の相互訪問が決定する（実際の訪問は1989年）

［理由］ゴルバチョフ書記長はアフガニスタンからの撤退（1988年末に完了する）を切り札として中国との接近を図る。（アメリカの新政権への牽制の意味もある）

⑧ 1988年中にはイラン・イラク戦争は終結しない。タンカー攻撃は小康状態を保つ。

［説明］イラン・イラク戦争は1987年とほとんど同じ状況だが，タンカー攻撃の回数は1987年より減る。

［理由］双方とも戦争終結の糸口を見い出せ得ない。タンカー攻撃は一種のショック療法だったが，あまり効き目がなかったのでこれからはあまり使わなくなる。

＊ なお，当然のことなので「予測」には書かないが，今年のソウル・オリンピックには米国，日本等はもちろん中国，ソ連等も参加する。（中国の若者たちは，先頃，サッカーのアジア地区予選で中国チームが日本に勝ったのに熱狂していた。今になって，中国がオリンピックに出ない，等と言い出したら，暴動でも起きかねない）。

＜注＞参考までに，過去のいくつかの筆者の同様の「予言」の「実績」を挙げておく。

［1979年１月時点での予想］

① 今年中に中国とベトナムが戦争を起こす → ２月に中越戦争が勃発

② 今年中にソビエトがイランに侵攻する → 12月にイランでなくアフガニスタンに侵攻した。

［1980年１月時点での予想］

① 今年の米国大統領選挙ではカーター大統領が再選される → 11月の選挙ではレーガン氏が勝った（完全なはずれ）

② 今年のモスクワ・オリンピックは開催なさ→ 米国，日本等がボイコットしたので「正常れない　　状態では開催されない」という予想だったら当たっていた。

［1985年6月中旬での予想］

・ 今年のセントラル・リーグは現在2位のタ→ 夏，タイガース・フィーバーが起こり優勝イガースが優勝する　　を果たす。

なお，為替相場の予想に関しては，筆者は1987年10月，当面の円相場は今が頭だ，と判断して手持ちの円を中国元に替えたところ，その後円が急騰してしまったことを申し添える。ついでながら，筆者の今年のプロ野球予想は，セでは「巨人は絶対に優勝できない。リーグ優勝はおそらく中日だろう」，パでは「東尾が前半欠けてもリーグ優勝は西武」である。

（付録２）

動燃北京事務所について

1. 所在地

中華人民共和国　北京市西城区旧鼓楼大街小石橋胡同24号

「竹園賓館」 401号室

電　話　　：（北京）401-4904（直通）〔FAX兼用〕

テレックス：　22033 BBGH CN（ホテルのテレックス）

2. 経　緯

1986年８月２日　北京市工商行政管理局から事務所の設置を正式に認可される

初代　稲積所長が着任

1987年６月５日　中華人民共和国核工業部の陳肇博副部長（次官）及び在中国日本大使館の湯下臨時代理大使の御臨席の下，林理事長以下動燃側関係者が参加して，北京事務所の開所式を挙行

1987年10月19日　二台目　平川所長が着任

3. 現在の北京事務所の業務

所　長：　平川　清純

所　員：　渡辺　格

通　訳：　王　龍安（Ms. Wang Long-An）

4. 動燃北京事務所の業務

- ウラン鉱資源の広域調査，共同調査等への支援業務
- 中国におけるウラン鉱資源に関する新規プロジェクトの開拓（鉱業事情調査）
- 廃棄物処分技術をはじめとする動燃業務全般にわたる原子力関係の情報収集及び関係機関との情報交換
- 関係者の訪中に対する便宜供与

5. 動燃北京事務所の概要

(1) 位　置

北京市の中心にある天安門からほぼ真北に約 4.5km，車で約20分。第二環状線（旧城壁があったところに作られた道路）の内側約 300m。周囲は旧くからある一般市民の住宅街。北側には最近建てられたアパートがある。周囲には合弁ホテルや日本企業の事務所は全くない。主要なカウンター・パートである中国核工業総公司（旧核工業部）地質局は約 3 km，車で約15分。

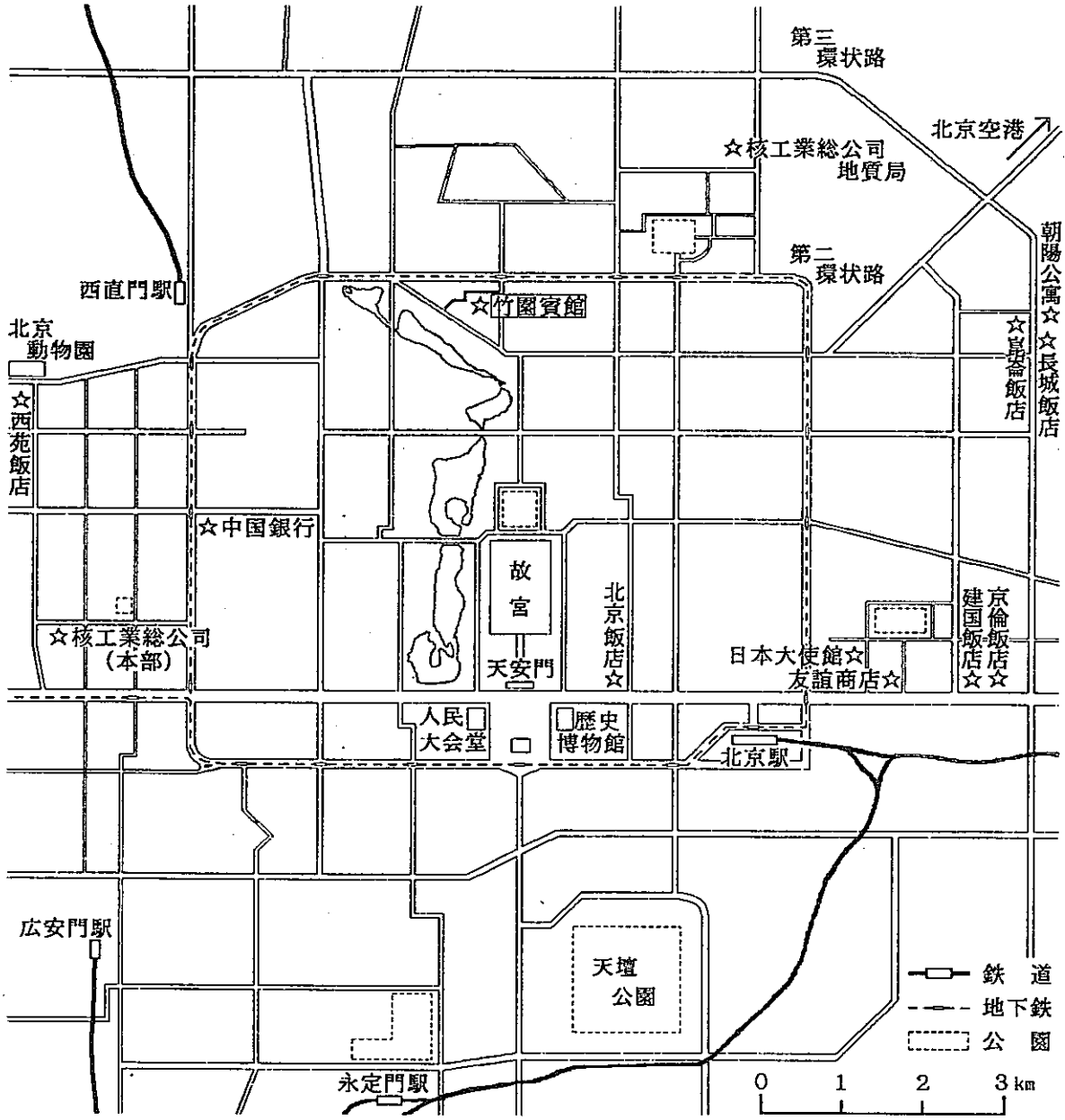
(2) 竹園賓館の概要

竹園賓館は正式な名称は「北京竹園賓館・聴松楼飯店(The Bamboo Garden Hotel and The Tingsonglou Hotel)」という。もともとは，清朝末期の郵政大臣だった盛宣懐の私邸だった。文化大革命の後，この中国庭園式の建築を利用してホテルに改造し1982年夏に開業した。その後，香港からの資本を導入して，鉄筋コンクリート 3 階建ての新館を建築し，部屋数は現在全部で39室ある。敷地は大体南北 200m×東西 150m程度。旧来からの清の時代の建築を利用した部分はレンガ造りの 1 階ないし 2 階の棟が 5 つあり，これらが回廊で結ばれている。この旧い部分が北京市旅游局の直営で「竹園賓館」と呼ばれる。旧い部分の南側の庭園の一部分に竹林があり，これが「竹園賓館」の名前の由来である。竹林の南側には新館がある。新館の部分は香港資本との合弁方式で経営されており，「聴松楼飯店」と呼ばれている。旧い中国の雰囲気を残しているので，中国情緒にひたりたい，と思っている観光客には人気がある。ただし，欧米系の合弁ホテルではないので，日本の旅行社とは提携関係になく，日本で発行されるガイド・ブックにも掲載されていない場合が多い。

この竹園賓館に事務所を設置している外国系の企業・団体は動燃だけである。中国の公司では，石油開発関係の公司が客室を 3 つ借り切って事務所としているほか，個人経営の旅行社が別棟を 1 つ借り切って事務所としている。長期滞在者としては，動燃の事務所員 1 名のほか，日本の商社の北京事務所員 1 名および数名の外国人がいる。

(3) 事務所のある 401号室の概要

401号室は，旧式のうちの 1 階建ての主客房の中にある 4 つのスイート・ルームのうちの 1 つ。3 階建ての新館の 1 階から 101号室，3 階が 301号室と続けて番号を付けているので，旧い方の棟の部屋番号は全て 4 で始まる。401号室とは言っても 4 階ではなく 1 階である。この 401号室の広さは約 5 m×約 9 m。一般の客室だったが，ベッドを搬出し，応接セット，

事務机等を搬入して事務所として使用している。

北京市の略図と動燃北京事務所がある竹園賓館の位置